

研究紀要

第2号

平成8年度

注口土器の研究	鈴木克彦	1~38
青森県における平安時代終末期の竪穴住居跡の形態について	成田誠治	39~52
青森県内の平安時代の火山灰について	中嶋友文	53~69
青森近県における陥し穴集成	坂本真弓, 杉野森淳子	70~80
青森県内の擦文土器文献	平山明寿	81~83
平成8年青森県内発掘調査動向	大湯卓二, 木村鉄次郎, 鈴木克彦	84~90

1997

青森県埋蔵文化財調査センター

研究紀要第2号 正誤表

頁	行	誤	正
1	18	後期前葉	後期前半
2	26	(文政7年)	(文政7年)
4	22	中口土器	注口土器
6	40	中路式	中茶路式
8	34	大木8a式	大木8a式(山岸英夫氏教示)
22	15	(図9-1)	(図11-1)
22	15	(図9-41)	(図11-44)
22	16	(図10-54)	(図12-68)
33	30	(文政7年)	(文政7年)
36	図23左	大洞C3式	大洞A式
40	4	痕跡のある	痕跡がある
40	14	ものが第5号で	ものは第5号で
40	31	東区では20m ²	東区ではすべて20m ²
40	36	三方を土壘	三方に土壘
41	6	例もみられている	例もみられる
41	12	考えられている	考えられる
44	19	持つものである	持つものがある
45	1	住穴	柱穴
64		19 一戸市大平遺跡	19 一戸町大平遺跡
68		図6 火山灰の堆積した出土土器4	図6 火山灰の堆積状況と出土土器4
69		中野平遺跡 第34代住居跡	中野平遺跡 第34号住居跡
71	26	和訳した場合	英訳した場合
72		分布図ドットの岩手県分	
		ドット番号61,101,117~120を削除する	
		ドット番号77を177に、109を104に変更する	
73		I、II、III1)・2)、V III3)・4)、IV	1、2、3-1)・2)、5 3-3)・4)、4
78	No 100	書書174集	書第174集
87	15	族	鍼
88	3	8/45	8/5
89	29	最上町	階上町

注口土器の研究

—主として東北地方の注口土器集成—

鈴木克彦

1はじめに

縄文土器の形態（器形）は、鉢形と壺形を基本にしてこの二つの器形のバリエーションとして細部にわたる形状変化を付加させながら発達してきた。あたかも独立した器形のように見える注口土器もその一つで、それはまた世界に類を見ない多様な器形を生み出して発達した日本の縄文土器の代表的かつ個性的な器形の一つでもある。

注口土器についての研究において、大正年間の中谷治宇二郎（1927）による体系的な研究の果たした役割が極めて大きい。これによって日本の注口土器の全容と類型化された分類から概ねの編年序列と地域的分布領域を理解することができた。以来今日まで、特定の時期の注口土器を考察したものがあっても注口土器の全容を体系的に論じたものはなかった。中谷治宇二郎は、それまでの考古学の方法論を批判的に捉らえてグローセの理論を引いて工芸的に分類しようとした。だから、用途機能の問題を意識的に避けた。勿論、中谷治宇二郎にも編年観という弱点があったし、それを突いた山内清男の指摘がある。この編年の問題と中谷の文化的類型を捉らえる方法を優劣択一するのではなく、整合性を持たせて論じることが課題となろう。

注口土器は、東北地方によく盛行し発達した器形である。勿論、その分布範囲は全国にわたる。比較的多い関東地方には後期前葉の堀之内式と加曾利B式に発達したことが知られている。しかし、大局的に見れば盛衰多寡の幅が大きい。これに対して東北地方の場合は中期から晩期まで多少の地域差があるが、一貫して継続盛行し、最後には究極の注口形とさえ言える亀ヶ岡式の注口土器に昇華した。これだけをとって見ても注口土器は東北地方においてこそ研究されるべきテーマだと言って過言でないが、関東地方の注口土器もまた東北地方と深く関係するばかりか、元はその影響下に発達した器形だとさえ言ってよい。注口土器（の器形発達の系譜）は、決して一系統のものではなく、鉢形、壺形の二系統からなる。そこには時期と地域を違えた出自、発達の軌跡があり、例えば一見して壺形系統のように見える関東地方の堀之内式の土瓶形注口土器が元来は鉢形（浅鉢形）をベースに持ち広口壺形ないし壺形の形態的要素を取り入れて形成されたものである。一方、東北地方では十腰内1式の段階で中期と後期を境にそれまでの鉢形系統から壺形系統の注口土器に転換する。例外的に岩手、青森県に鉢形注口土器が出現しても、それ以後再び鉢形系統に帰することはなかった（注1）。これにも関東地方と東北地方の注口土器の大きな違いがあるし、東北地方においても北部と南部では後期の或る一時期に汎東北地方を席巻する注口土器（宝ヶ峯型）を見るが、大方は北部に優位性を保ちながら錯綜して発達する。また、晩期の注口土器が前半期においてこそ北部に多いことに対して、後半期のそれは南部に生きながらえる。こういう消長推移の変遷過程は、中谷治宇二郎の深層に意図した文化の類型の問題と係わる。注口土器の当座の研究は直ちに結論が出そうにない用途機能論が主眼ではなく注口土器を製作使用する主体者の文化や社会の在り方を注口土器を通して考察することにある。そういう意味で、編年という縦軸と類型化による分布や文化の類型を捉らえる横軸を整合確立しながら論じることが大きな課題であると考える。そのため、本論ではできるだけ対象を広げて日本の注口土器の全容を理解しようとえたが、紙面の都合により東北地方の資料を中心にして集成考察し、関東地方の場合は最小限に一部を掲載したために摘まみ見る程度になった（注2）。北海道の場合は改め

て別稿に委ねることにした。

2 注口土器の名称について

注口土器については、注口形、注口付土器の名称がある。それまでの土壙や急須に似た形という意味で土壙（土瓶）、急須形土器と呼び習わされている慣習的名称に対して、中谷治宇二郎が工芸的な形式分類の概念を与える意味で注口土器と呼んで以来、この名称が広く採用されるに至ったものである。

土器の名称については、日本のみならず各国でもその国の日常用具に準えて呼び習わすことが多く（山内清男1964）、中谷治宇二郎の当該研究を見るまでは日本でもその初期の考古学分類では「日用品」として項目立てられ、その中の器形、器種の一つに土壙、急須形が分類されてきた経緯がある（八木英三郎1902）。土壙、急須は、江戸時代から現代まで使われている生活用具の名前だが、これだと考古学的には最初に機能のイメージを与える結果になってしまふことを憂慮したものである。土壙とは通常壺形の体部に注口を付したもの（山内清男1930、中谷治宇二郎1943）、急須形（型）の場合は注口形特有の形を有しダイヤモンド形の主体部に注口を付したものである（中谷1943）。つまり、注口土器の名称は当時の一般的な遺物に対する古典的な命名の仕方であった予め用途を連想するような名称から脱却した遺物の持つ形式の客観的観察を通してその形式分類を行った結果として提唱されたものであった（中谷治宇二郎1929）。

山内清男（1967）は一貫して注口付土器と呼んだ。既製の器形に注口部を付した土器という意味である。この方がより機械的な名称で、大半の形態は通常の土器に注口部を付けたものが多いので頷ける。当初から注口土器の独自な器形というものは存在しないし、堀之内式、加曾利B式や亀ヶ岡式の独自と言われる完成された独特な器形さえ元は鉢形、壺形のいずれかに由来する。それらの独自な器形というものの成長の軌跡を知ることは必要だし、反面或る一時期に注口土器の器形が他の土器の器形に類を見ない完成された器形を呈することも事実だが、しかし、敢えてそれぞれを分別して呼び分ける必要性がない（注3）。

3 注口土器に関する研究史

（1）中谷治宇二郎の研究以前

注口土器が学史上に初めて登場するのは、江戸時代の『耽奇漫録』（文政7年）に掲載された亀ヶ岡遺跡出土例のスケッチ画である。

注口土器の研究は、近代日本考古学の祖と称えられるモースの段階に逆上る。大森貝塚で日本最初の考古学的発掘を行ったモース（1879）は、その報告書の中で土器を「煮炊き土器」、「手にもつ土器」、「水入れにもちいた類のすぼまった土器」というように土器の用途を念頭において分類し、その図版10の解説文で注口土器の注口部について、水入れに用いた土器の注ぎ口の部分だと生物学者らしく簡明に表記したのである。

その後、青森県亀ヶ岡遺跡を始めとする東北地方などの各地で当該類例の幾つかが相次いで紹介された。それらを見ると、「把手なき急須の如し」（佐藤重紀1889）とか、「急須形の貝塚土器」（若林勝邦1890）と記されている。また、大野延太郎（1899）が石器時代の土瓶と呼び、図示された2個の類例は急須形式の土瓶というように記述している。同じ類例を中沢澄男（1898）は急須形と呼んでいるので、土瓶という名称よりは急須形の名称が古いことが分かる。というよりも急須形の類例の方がより早くから知られていた訳である。急須形の場合は現在の晩期の注口土器、土瓶形の場合は後期の注口土器のことである。

(2) 中谷治宇二郎の研究以後

中谷治宇二郎が大正14年末に口頭発表した「注口土器の分布に就て」は、『人類学雑誌41-5』に掲載された（中谷1926）。その中で、中谷の調査した類例は317点、しかも欠損品を除いているのでその数は五百に近いものと推察される。その分布は全国にわたる。広い分布範囲を持ちながらも類例が関東地方と東北地方に多いことを取り上げて、日本地図に注口土器の出土遺跡の分布図を図示し、先史地理学的手法をいち早く取り入れた功績も高く評価されている（江坂輝弥1972）。また、1遺跡における割合（比率）を概ね零点以下とし、土偶などの比率に類するとした。口頭発表の背景には後年の大著があり、この論考ができていた時には既にその稿を成していたらしいことは、A～D型の注口土器の分類にも表れているが、分類上のポイントは側面の曲線（断面形）にあることを記している。また、A型が関東地方の東京湾地帯、B型が関東地方、C型、D型が東北地方に多い、ことを明らかにした上で、分布状況から見て東北日本の沿岸地帯にこの文化の特質があつてより新しい器形が東北地方に多いことから日本の石器文化は西南（関東地方東京湾地帯）から東北（地方）に移行したものであろう（北漸論）、と結論づけたのである。すなわち、1927年の『注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布』では資料数も前著に比して455点を扱い、地名表、出典、分布図、実測図などが集大成されている。海外での同類資料との比較も行い、グローセの影響を受けて土器に施文される文様というものは工芸的なもので海外の類品とは直接的な関係はなく、日本の注口土器は独自に発生したものと冷静に観察している。分布状況特に東日本のうち海岸線を有する関東地方（茨城県）、東北地方（宮城、岩手、秋田、青森県）に偏っていることを強調し地方的差異を観察し、三つの地方圏、八つの地方区を設定したが、実際の記述には河川流域に沿った分布が見られ注口土器と海岸線との直接的関係を述べている訳ではない。全数量のうち、大半が薄手式（後期）、陸奥式（晩期）のものだが、厚手式（中期）の類例が2点あると記している。最大の功績は注口土器を形態の上から、A～D型に4分類したことである。つまり、A型は環状の把手を持つもの（把手付き型）、B型は土瓶形、C型は急須形、D型は粗型でC型の退化型、他に片口形、環状型などがあるという訳である。A型は東京都、埼玉県、B型は茨城県、C型、D型は青森県に数量のうえで最も多く分布が集中し、これらのことからA型は東京湾沿岸を中心とした関東地方、B型は霞ヶ浦沿岸を中心に青森県に及び、C型は青森県などの東北地方に限られ、D型はC型に付随する、ことを明らかにした。また、例えばC型の晩期注口土器の部位名称（名所）について従来の日常用具に準（なぞら）えた当時の一般的な名称の呼び方を批判的に考えその各部位を機械的に分類した点、注口土器に対して正面があるとする（正面性を求める）点、晩期注口土器の形態が注口部を下方に移行し実用的意義から遠ざかり液体を容れるためには実に不利な器形で注口土器としての究極に発達した器形進化の形式と見なした点、などを評価することができる。ただ、中谷治宇二郎の様式或いは形式というものが編年学派の八幡一郎や山内清男に代表される型式論とは多少違った文化概念を持つものであったがため、今日の型式論からすれば批判的に見られるのがこの辺の事情を物語るのである。

また、編年的序列よりも形態的分類による文様の様式の発展の新旧を論じその文化的中心を推し量ることはできかねる。しかもそれがあたかも、石器時代の文化的中心を示すとさえ結論付けてその特異型を高度な文化階梯に進んだ特別な文化環境の下に生まれたものと過大評価した。

次いで中谷治宇二郎（1936）は少し間を置いて、『日本新石器文化の一考究』を著した。副題に分布圏と文化圏とあるように、注口土器と土偶の複数の遺物による複合した分布関係を文化圏と呼びその意図するところは当時としては斬新的なものであった。しかし、注口土器の形態、文様の分類に編年的な視点を欠くために今日の所謂型式観と違っていて分かりにくいものとなっている。

さて、その後杉山寿栄男（1928b）が著した『日本原始工芸概説』は、実質的には甲野勇、中谷治

宇二郎の筆になるものらしく（江坂輝弥1972）、注口土器についてはその主体部は壺形、鉢形、壺形に注口を付し、後に注口土器としての一定の型を持つに至ったと述べ、大形から小形、高いものから低いものへ、注口部も長いものから短小にという変化が見られるとした。特に、晩期の注口土器が土質精選焼成発達の優秀な製作技術を認めた点の他に、青森県是川中居遺跡を例に土器組成比率を求めたり（注口土器の占める割合は約18%）、土器の高さと幅が同一寸法とか器高が径の3倍以内になるといった長谷部言人の九等分分類法に通じるものがある3等分正方形の比例値を考案し、土器の形態（器形）研究をより一步進めた。掲載された文様図版解説は、次の杉山寿栄男（1928a）の『日本原始工芸』に通じる。

当時の注口土器に関する研究は殆どこの両者によって行われている印象を受けるのは、これら以外に表立った研究が見られないせいもあるが、山内清男（1932）は亀ヶ岡式土器の研究として編年的研究に主力を注いだその中に、器形組成の一つに注口土器を取り上げて亀ヶ岡式では注口付、香炉形は最後まで続かない、とその時間的視野の一端を述べた。それ以上に、この中谷治宇二郎の研究については上述したように批判的に見ていた。それは、中谷治宇二郎の注口土器A型、B型が自ら設定した堀之内式、加曾利B式、安行式に伴うことが既に知られていたにも係わらず恰も今後の層位的発掘に編年序列を待たなければならないかのような記述に不満を表明し、D型はC型に先行するものでA型、B型、D型、C型の順序を指摘すると共に、文様観察に基づく型式の年代的序列を考慮しない方法論（様式論）の矛盾を指摘した（山内清男1929）。そして、八幡一郎（1928）もまた暗に方法論の違いを表明し、「編年」という中谷治宇二郎の弱点を指摘している。この点は中谷治宇二郎と山内清男、八幡一郎の意図する考古学的方法論や歴史観の違いにもよるであろうが、中谷の研究の有為性を否定するものではないとしても今日の考古学型式論（編年論）からすれば山内らの指摘は正しい。

また、山内清男（1967、初出は1939-41）の『日本先史土器図譜』には前期関山式や後期堀之内式、加曾利B式の片口形、中口土器の類例が幾つか紹介された。

注口土器の出自に関して藤森栄一ら（1963）は、中部地方に発達した種子壺、酒壺の貯蔵形態（具）である鍔付有孔土器が両耳壺に移行し、一部が注口土器に変化したと考えた。中期の勝坂期に現れて発達した鍔付有孔土器が加曾利E式の終末期に両耳壺と注口土器の形態に変化してその機能が吸収されたというものが、その間の経緯を実証的に示したものではなく、鍔付有孔土器に付いた尖端の窪んだ把手状の突起の様子が注口土器に似ているというだけでは異論が生じた場合に反論の余地がない。また、渡辺誠（1965）は鍔付有孔土器を醸酵器とする前提の下に勝坂式と亀ヶ岡式の注口土器が結び付くとし、土瓶形注口土器は形態に見られる耳状の突起が蓋を堅縛する機能を持ち、それに注ぎ口を付加した特徴だと推敲した。両耳状の突起が機能を体現した造作物であることを直ちに否定するものではない。しかし、鍔付有孔土器→両耳壺→土瓶形注口土器→急須形注口土器・細口壺の変遷と鍔付有孔土器の波及が遅れた関東地方に壺形が発達せず波及の早かった東北地方の後期に細口壺、小型注口土器が発生したのは勝坂式の受容の在り方が関東地方と東北地方では違ったからだと述べ、鍔付有孔土器の機能による器形分化が細口壺と急須形注口土器を生み出したと説明した問題は、時空領域を逸脱し山内清男が中谷治宇二郎の研究に警鐘を促した編年論の主意を考慮していない。

八幡一夫（1963）は、東北地方南部の中後期に多く出土する注口土器の初現を大木8b式に求め、大木9式に他の土器とセットを構成するようになると。その時期の類例に小型で朱塗りの例があったりその出土状態や複式炉跡を持つ住居跡に多いことなどに注意し、また関東地方の加曾利E式に少ないことから、東北地方南部の中後期には注口土器が一般化した形態で従前の形態とは異なって煮沸、貯蔵の機能とは違った用途に変化したことを想定した。中期末葉の注口土器は小型鉢形、鉢形、深鉢形から分化して注口土器としての器形が定着したものと考え、上述の藤森栄一や渡辺誠の所論に

疑問を投じた。

その後、概説書には度々注口土器に関する記述が見られたが、表立った研究は見られなかった。そういう中で晩期の注口土器について論じた藤村東男（1972）の所論は、上記の藤森、渡辺の意見を過大に評価した嫌いがあるが、編年を基軸に据えて後期の注口土器は壺形の器形と同じである反面晩期ではそれとは違って独自な形態をとり、関東地方と東北地方では独自性があることなど、晩期注口土器の研究の緒を開き大洞諸式毎の注口土器の概略の様相を明らかにした。その後の藤村東男（1988）の研究は、九年橋遺跡の資料を通して前著で晩期第5類とした壺形に注口部の付いた器形を急須形から壺形への変化として再考し併せて注口土器の変遷を考察したものである（図24）。具体的には大洞C2式からA式にそれが行われ、当該期の精製土器全般に行われている形態変化と同じものだという訳である。注口土器の機能が壺形に統合された結果、注口土器が減少消滅するという問題も興味深い。その動機に祭事の変化を想定しているが抽象的である。このような一連の藤村東男の研究は、晩期亀ヶ岡式土器の注口土器に口縁部が内湾するA型、膨らみをもつて外反するB型、壺形に近いC型とその形態上の特徴を機械的に類型区分したり、岩手県九年橋遺跡から多量に出土した資料によって大洞諸式土器と対比させた注口土器の編年を基軸に据えて器形と文様の関係を捉え、それらの各要素の変化を型式間で特に大洞C2式からA式に見られる複雑な動態を見極めようとする点で効果を上げた。このような考えを受けて、安孫子昭二（1982）は晩期注口土器の変遷表を作成した。今後はそれを補足修正しながらより体系的なものに止揚することが課題である。

同じような注口土器の編年は、丹野雅人（1985）や池谷信之（1990）、鈴木徳雄（1992）も中期末から後期前葉を対象に行っている。後期前葉は全国的に注口土器が急激に増加する時期で、特に関東地方の注口土器の形成に東北地方の影響が深く係わりあいを持っていることを明らかにすることが大きな課題だと思うので、池谷の所論は一定の評価を与えることができる。その一方で、同氏の言う網取・堀之内型注口土器の注口部に付く橋状或いはリング状の吊り手（把手）の出自や堀之内2式、加曾利B式の体部が球形を呈する地域性の強い関東地方独特な形式の出自に対する十分な説明をすることであったと思うが、いずれも一系統の単線的な説明に終始している。そこにはもっと複雑な錯綜した相互の係わりあいが認められることは当該期の土器に見られることだが、丹野と共に少し有孔鋲付土器にこだわったきらいがある。また、注口土器が瓢形、鉢形、壺形から分化したものとする鈴木の論考は一定の評価を与えることができ、その指摘する注口部の付く位置と文様の関係など詳細な観察を要する問題は少なくない。後期前半期の注口土器を集成しその変遷を既製型式の枠内で捉えた西田泰民（1992）の論考は、元来池谷のそれと論議を深めるものでなければならなかつたが、その集成の勞を多としても東北地方との関係で言えば不満が残る。この他に、神奈川県の類例を紹介したもの（鈴木一男1989）などや東北地方北部の後期十腰内2式前後の変遷に試みたもの（鈴木克彦1996）などがある。層位的な観察（図3）を行った宮城県大梁川遺跡（宮城県教育委員会1988）の発掘成果は特筆されてよい。注口土器などの土器の編年は、その型式学的考察に優先して問題意識のある層位的な発掘によって自ずから結論づけられることを暗示している。

このように注口土器に係わる研究史から学ぶべき問題が多いが、縄文時代全般にわたるその研究は70年前の中谷治宇二郎をおいて他にないことが分かる。しかし、それは些か古いものとなっていることや、反面中谷治宇二郎が開陳した文化の系統性の問題など、十分に再構築されてきたとは言いがたい側面があることを否定できない。

（3）用途に関する研究史

注口土器の研究の興味深い課題の一つに用途機能の問題がある。しかし、その表立った研究は少な

い。1960年代の概説書には特殊な用途、祭事に係わる用途が謳われるようになったが、明確な根拠がある訳ではない。学史的には、モース（1879）が注ぎ口のある土器の存在を観察したことを嚆矢とし、坪井正五郎（1891）は盃の如くに用いた物で飲料を口中に注ぎ込んだのであろう、と記している。高橋健自（1913）は、醤油注のようなものだが醤油注形土器では不適当なので急須形土器と呼んでいる、と記している。中谷治宇二郎（1927）は、下方に付けられる注口部の位置から実用的意義を離れた器形、と述べたが具体的な用途には触れていない。後藤守一（1943）は、注口土器は（お湯をわかすものではなく）酒を容れたもの、と記した。酒という具体的用途を述べた最初の文献ではないかと思うが、実は後藤守一（1927）は高橋健自の著作と同じ醤油注のようなものとも記している。その後再び後藤守一（1956）は、注口土器は液体を容れるものでその液体は果殻類をかんで作った酒の類であろうと述べた。

この頃は、土器の用途は推測するだけで確定することが難しいとしていた（杉山寿栄男1928）ばかりか、中谷治宇二郎は従来の土瓶形、急須形と呼んでいるが両者は容易に峻別できるものではなく、また本来の急須形とは何ら関係ないもので、恰もそのような用途を連想させる名称を止めて（機械的に）注口部を有する土器と一括して総称すると述べたが、その背景には当初からモースに始まる当該土器の注口部の存在を液体を注ぐものと当然視していたからであろう。当時既に朱を塗ったり、吊るす紐穴のある注口土器、人面付きの注口土器の存在が把握されていたり、壺形の注口土器が多いことなどが把握されていたために、中谷治宇二郎は実用的なものではないと考え、旧来の実用（日用）具とする意見に対して非実用具と考えた訳であるが、いずれも抽象的なものに終始した。1943年の後藤守一の意見まではそういう状態にあったと思う。それさえも酒を容れる、という観点が日用、非日用のいずれかとなると曖昧なものであるが、後藤守一は食器や煮沸する物ではないと記しているので、どちらかというと非実用具と考えていたと取れる。

江坂輝弥（1956、57）は、後藤説を実証的に一步進めて木の実酒のような特殊な液体を作り保存、飲用するとか発酵させる器具と見なした。青森県八幡崎遺跡の発掘で多数の注口土器を出土した土層からカジノキの木の実が多量に堆積していた事例から、この考えを更に発展させて神に捧げる果実酒容器説を開拓した（1967）。この江坂説が、今日の一般的な説の主流をなしているものである。この他に、飲血儀礼、葬送儀礼と関連づける考え方（文献省略）もあるらしい。

このように注口土器の用途機能は、後藤守一や江坂輝弥に発する祭祀容器（酒器）説と酒造具説（山梨県立考古博物館1984）に大別される。これには、注口土器の普遍的な用途機能が全時期を通じて一定していたものなのか、それとも時期や地域によって異なっているものなのかという問題があり、鉢形系統から壺形系統に変化する問題や特定の時期の類例を捉らえてその器の全時期の用途機能を規定できるのかという問題さえ議論されていないし、類例の多寡に時期と地域による盛衰があるので一貫して合理的な説に見える推論にも無理が付きまとう。この問題は発掘による実証的事例に裏付けられてこそ論じるべきものなので、今後の調査研究に期待したい。

4 注口土器の様相

（1）草創期の注口土器（図1）

新潟県室谷洞窟から室谷下層式の深鉢形に注口の付いた土器が出土している。草創期中葉に位置付けられる日本最古の注口土器である。注口部は短いが、器壁との接点部分（注口部入り口）が平らに整形されている。この時期の類例はこの1点のみで、その出自の系譜等については不明である。

（2）早期の注口土器（図1）

北海道苫小牧市静川5遺跡（苫小牧市教育委員会1996）から、後半期の中路式の口縁部に注口の付

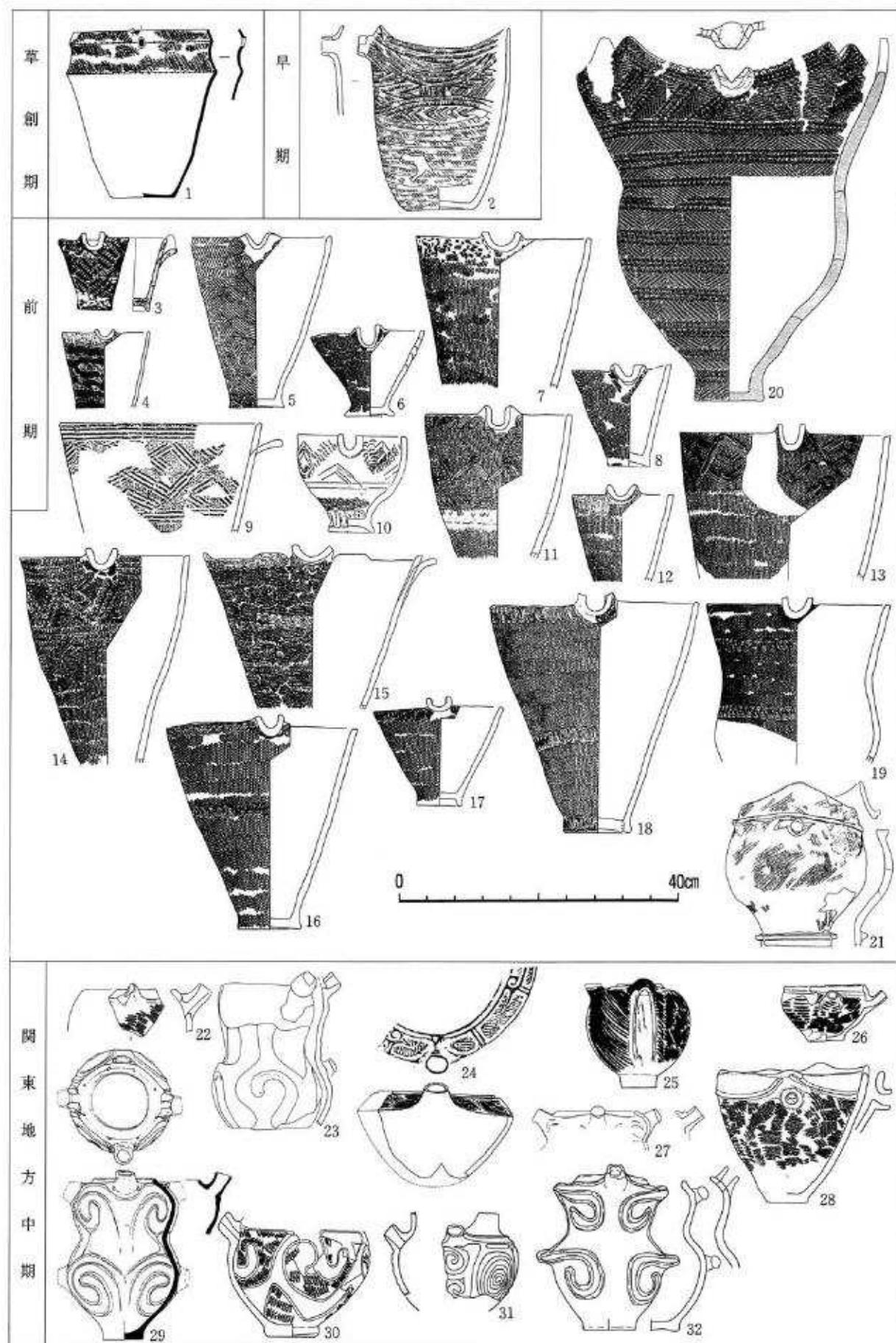


図1 草創期～中期の注口土器（片口形含む）

いた深鉢形が出土している。同市からは他にもニナルカ遺跡に類例が発見されている。熊本県大津町瀬田裏遺跡（緒方1991）の早期後半（押型文）の類例は、有孔のみで作り付けの注口部はない。

（3）前期の注口土器（図1）

北陸地方の前期前葉の福井県鳥浜貝塚には異形土器としての類例や片口形の木器が出土している。こういう遺存率の極めて低い木器具に例を見ることは、晩期にも新潟県御井戸遺跡に類例があるので木製品として相当に普及していたことを考えるべきであろう。

関東地方一円に分布する前期前葉の関山式には埼玉県大古里遺跡、井沼方遺跡などに集中的に類例が出土している。その系譜については不明である。現在のところ関東地方での最も古い類例である。基本的に深鉢形だが多少の器形変化が認められる。これらには片口形と注口形の2種があり、古手に片口形の方が多い。前期としては諸磯式にかけて器形変化が見られる時期なので、そういう一環の中でこのような器形が創作された可能性がある。当該期の類例には奥野麦生（1996）の研究がある。

東北地方南部では福島県塩喰岩陰遺跡から大型深鉢形の片口形土器が出土している。関東地方の関山式の範囲で捉えられ、その影響によるものであろう。

東北地方北部の前期末葉には円筒下層d式に青森県石神遺跡から浅鉢形の注口土器が出土している。両者共東北地方ではそれぞれ最古の類例だが、前後の脈絡は不明である。

前期の類例はまだ数量的には少ない。最古の注口土器である草創期や早期との系統関係も間にくる類例が不明だし、前期の類例が次の中期の類例にどのように繋がるのかも資料が少ないので不明である。いずれにしても、この段階までは生活上の必要性から各地で独創的にこの器形が創作されたものであろう。

（4）中期の注口土器

① 関東地方（図1）

比較的資料が出揃うのは中期に入ってからだが、前半期には殆ど見られず、僅かに初頭の五領ヶ台式に神奈川県金沢文庫遺跡で注口土器の破片を見る。栃木県梨木平遺跡では中期中葉の加曾利E-1式新段階に類例が出土し、その後しばらくして栃木県御城田遺跡、群馬県空沢遺跡、神奈川県尾崎遺跡など一円に中期終末期の加曾利E-4式になって類例を見るが、断続的なその系統関係は不明である。加曾利E-1式新段階は大木8b式に平行するので、この点は東北地方の在り方と符合する。

中期末には類例が増加する。加曾利E-4式と後期との系統関係を理解については丹野雅人（1985）、池谷信之（1990）の論考がある。この時期には無頸の広口壺形を呈するものと口径の広い鉢形と瓢箪形（瓠形）を呈する体部が屈曲した深鉢形の注口土器が出土する。特に、瓢箪形注口土器はその器形が特徴的で無文の地に微隆起線文の渦巻き文が施文され、東北地方南部まで分布範囲（図25）を持つが、無頸の広口壺形の存在は侮れない。

② 東北地方（図2、3）

東北地方では注口土器が一般的になるのは中期中葉になってからで、その先駆けは中葉の福島県法正尻遺跡の大木8a式の類例で、以後青森県石手洗遺跡、富ノ沢遺跡、岩手県大館町遺跡、柿ノ木平遺跡、高根遺跡、林崎館遺跡、山形県白須賀遺跡、宮城県永根貝塚、上野遺跡など、いずれも大木8b式の段階である。大木式土器の盛行した地域とその周辺部で、中期の注口土器は大木式土器様式において発達した器形であることは間違いないが、その周辺部に多いことは言わば異なる文化圏が接触した潮間帯（接觸圏）地域にそれが派生した可能性があろう。その後の大木9式から中期終末の大木10式になると関東地方よりは類例が増加し宮城県、福島県に多い。宮城県大梁川遺跡では大木9式から10式に至る注口土器の変遷を理解することができる（図3）。大木10式後半期にはそれまで深鉢形が多かったことに対して小型や口縁部が内向する浅鉢形に変化することが重要である。逆に、深鉢形の瓢

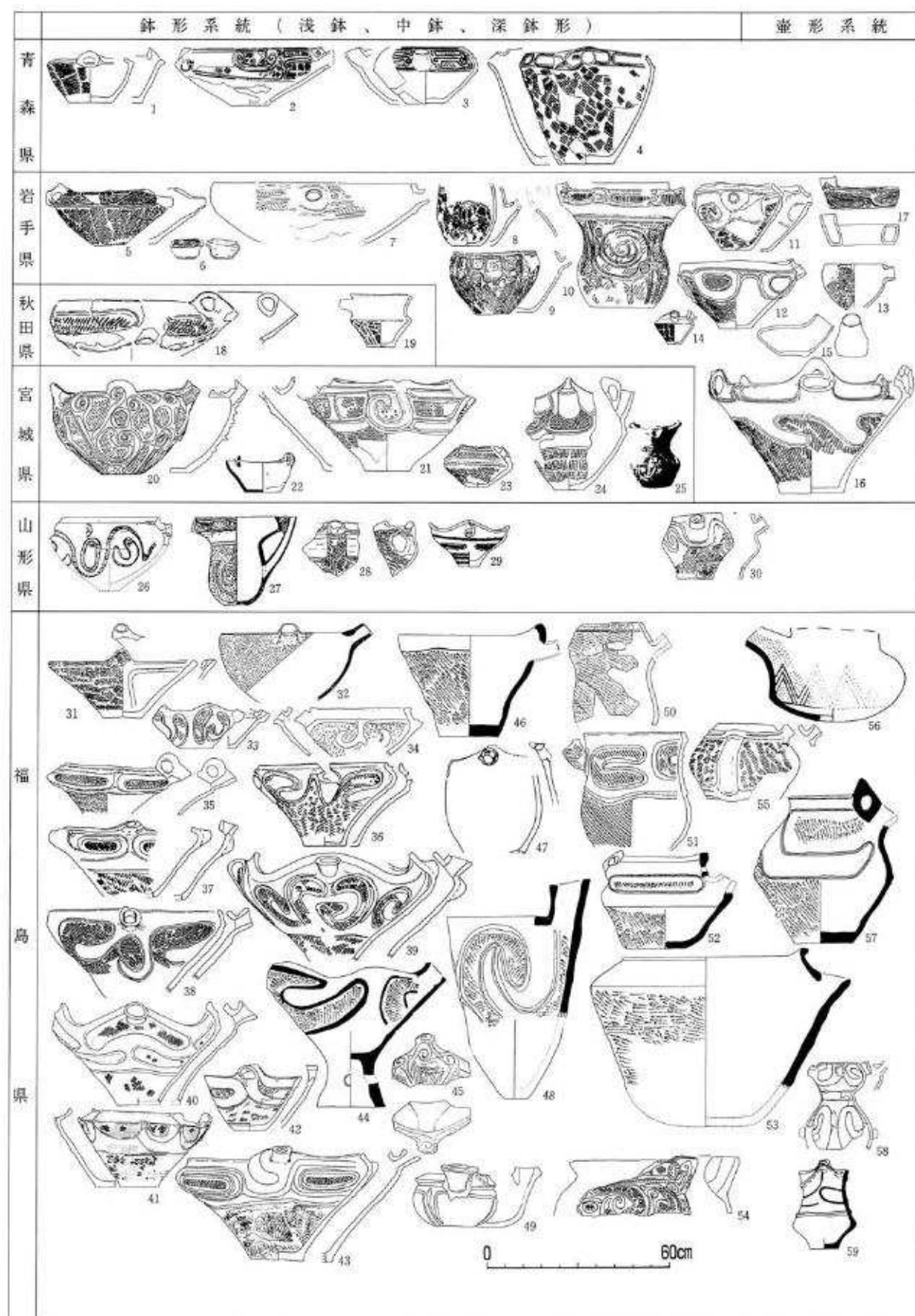


図2 東北地方中期注口土器

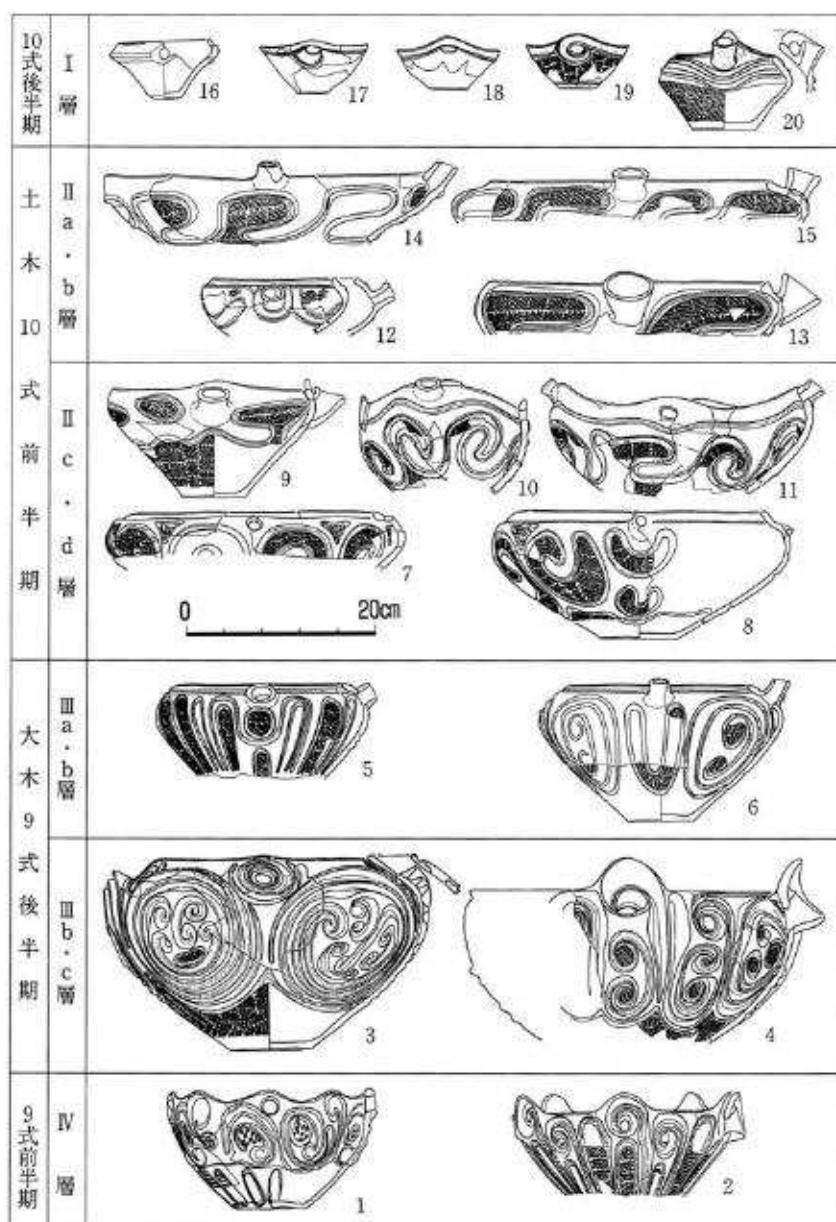


図3 宮城県大梁川遺跡出土注口土器

したものであるが、山形県白須賀遺跡の深鉢形の注口部は特異な器形である。このことは、注口土器というものが特定の器形として生まれたものではないことを物語るであろう。強いて言えば、当該期に発達するキャリバー形の器形と関係することも考えられるが、この液体を注ぐに非機能的な器形ゆえに生じた役割を強調しても、中期の場合には当てはまってより古い時期の注口土器には該当しない。

中期末の注口土器を観察する際に、口縁部に付く把手の存在と変形の器形を見逃すことができない。口縁部に注口部と接するように付けられる把手付き型注口土器は、現状では中期注口土器の最も古い段階である大木8b式から岩手県柿ノ木平遺跡（図2-5）に存在する。これは両耳壺の把手と係わり得る藤森説の有力な援用事例だが注口土器の出自とは関係ない。その把手には紐穴のような孔が空いていることが通有である。恐らく関東、中部地方などの中期一般に多い両耳壺などと関連する当該期の流行によるものであろう。いずれにしても口縁部に注口部が付くことが通有である。この把手付

簾形注口土器が福島県北向遺跡から出土している。また、福島県田地ヶ岡遺跡の口縁部が外反し大きな把手を持つ變形は注意してよい。中期の東北地方における類例は、それ以前とその後の注口土器の系譜を考える上で、それ以前では鉢形が基本で變形の要素が加わることが重要である。

壺形の注口土器が宮城県幡谷貝塚の大木8b式にあるが、類例はまだ少ない。圧倒的に多いのは鉢形の注口土器である。鉢形の注口土器には浅鉢形、中鉢形、深鉢形がある。これに變形、瓢箪形が加わる。以後、これらを鉢形系統の注口土器、壺形の類例を壺形系統の注口土器と呼ぶことにする。變形のことを筆者は壺のような鉢形という意味で壺鉢形と呼んでいるが、鉢形の系統に入る。瓢箪形も同様である。中期の注口土器は特定の器形に限定されず、通常の土器（日常の生活容器）に単に注口部の付

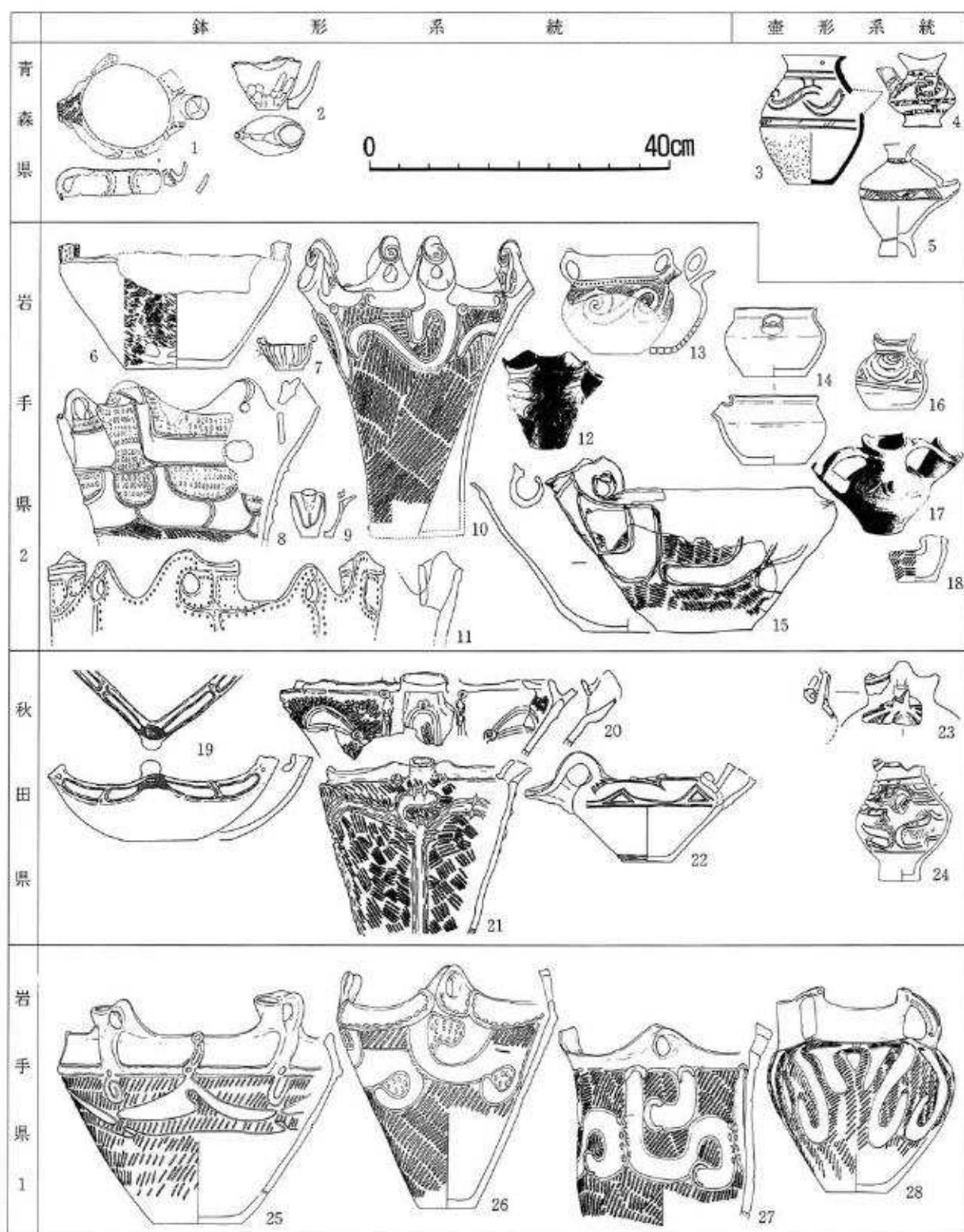


図4 東北地方北部の後期初頭の注口土器

き型注口土器は、大木10式を経由して後期初頭の注口土器或いは関東地方の後期に継続される最大の特徴である。瓢箪形には筒型の横向きの把手が付くのが特徴だが、それ自体は古くからある。また、注口部の付く位置にも特徴があり、例外的に体部や口唇部に付く場合があるが、中期の注口土器は原則として口縁部に注口部が付く。その他に、注口部が口縁部突起と一体化したものや、単に口縁部の有孔という形で文様化されたものなどが多い。

宮城県大梁川遺跡で層位的に把握された中期から後期に至る注口土器の変遷過程から、大木10式後半期から鉢形系統の注口土器の器形が中鉢形、深鉢形から小型化された浅鉢形、中鉢形に大きく変わることが分かる。この浅鉢形には口縁部が外向するものと内傾するものがあり、後者の器形が東北地方一帯に分布し後期に引き継がれる。

(5) 後期の注口土器

① 関東地方

関東地方の前半期については池谷信之(1990)、鈴木徳雄(1992)、西田泰民(1992)らの研究がある。堀之内1式の注口土器の場合は鉢形系統の東北地方南部との関連性が強い反面、加曾利B式に代表される体部が球形を呈するものが現れるように器形形状から見た2種がある。後者は、池谷によると有孔鍔付土器から変化した在地的注口土器ということになるが、それは有孔鍔付土器の要素を取り入れたに過ぎない。有孔鍔付土器に捕らわれたために注口土器の鉢形と壺形の系統性が曖昧になった。鉢形系統に壺形や有孔鍔付土器の要素を取り入れて変容しても、元来鉢形から壺形の注口土器に系統が変わることはあり得ない。その間には錯綜した壺形の影響を見て取るべきであったと思う。端的に言えば、堀之内式、加曾利B式の球形体部の注口土器は、栃木県御城田遺跡、神奈川県尾崎遺跡の広口壺、千葉県江原台遺跡に発する壺形、瓢箪形の体部下半部の膨らみとが合体して関東地方の注口土器の独自性を表すもので、壺形の要素を取り入れていることにポイントがある。しかし、一見して壺形とも見られる土瓶形と称する球形体部の関東地方独特な注口土器は実は東北地方の影響に基づく鉢形系統をベースにするもので、壺形の要素は或る限られた時期に取り入れられた。ここに、東北地方を含めた汎東日本の広域な相互の編年と土器文化の係わり合いを考察する大きな問題があると考える。

その後の曾谷式になると注口土器の類例が少なくなり、安行式に至っては再び独自性の強い變形ないし鉢形の注口土器が作られ地域性が顕著になる。

② 東北地方(図4~12)

後期に入ると東北地方には北部と南部の地域差が生じるようになる。類例も多く、前半期には相対的に関東地方よりは少ないとしても過少評価する西田(1992)の指摘は当たらない。同じ後期でも段階的な注口土器の発展の画期を捉らることができる。なお、編年は主に青森県の土器型式を使って説明する。

後期初頭の場合は、北部では青森県を中心とする十腰内1式と岩手県を中心とする門前式の二つの文化圏にそれぞれ特徴的な注口土器が知られる。青森県では幾分門前式の影響による鉢形注口土器が見られるが、岩手県北部にかけて当該期に通常見られる壺形に注口部を付けた注口土器が特徴で、その場合の注口部は体部に付く。これに対して岩手県、秋田県にかけては深鉢形の口縁部に注口部が付いたものが多い。いずれにしてもこの地域はごく一般的な通常の器形に注口部を付けた注口土器の範疇を出ない。岩手県には宮城県方面の注口土器がもたらされる。

東北地方南部の場合は、南境式に比較的纏まった類例が存在する。分布の主体は宮城県、福島県だが、一部岩手県貝貝塚、秋田県藤株遺跡に知られている。器形を見ると深鉢形や壺形は見られず、殆どが浅鉢形、中鉢形の鉢形系統のものとやはり鉢形系統の仲間である變形とがある。浅鉢形、中鉢形の区別が付けにくいので浅鉢形と総称するが、その浅鉢形は口縁部が短く内傾しそこに注口部が付いたものである(a類)。この浅鉢形を基本形とし体部の屈折が体部中央に位置する變形(b類)、屈折部が体部上半部に位置する壺形に似た變形(c類)、鉢形系統(浅鉢形)の3つの類型と口縁部が屈折して外反する變形に似た壺形(d類)があり、こういった要素が統合されたものがe類である(図)。このような鉢形系統を主体にした4つの類型から当該期の注口土器が形成されるが、細分は可能だ。e類はあたかも無頸壺に見えるが鉢形である。特に注意されるのは六反田遺跡や二屋敷遺跡などに見

られる口縁部が内傾したり体部が丸みを帯びる鉢形と、鉢形の口縁部に付く大型な把手である。この把手と注口部の位置関係には、大型な把手の部分に注口部が付く場合と大型な把手との間に注口部が付くものとがある。以後前者が継続される。また、注口部が浅鉢形、中鉢形には概ね口縁部に付くのに対して、体部が丸みを帯びる鉢形の場合は体部上半部に付く時間差を表す特徴が見られる。これらの関係は関東地方とも関連し、後出して把手と注口部が分離する。

また、注口土器に研磨手法による鉢形系統（浅鉢形）が岩手県、秋田県に出土している。この器形は中期末葉の宮城県大梁川遺跡の大木10式の類例に端を発するものであろうが、アヒルの嘴状の大型把手を付ける（白長根館型）。これは中期に始まる鉢形系統注口土器の終焉である。大木式の縁辺部地域（土器文化の潮間帶）に存在する。これは後期中葉に近いものでその直後の中葉の宝ヶ峯遺跡に多い研磨注口土器（宝ヶ峯型）の素型をなすものと思う。

後期前葉は北部の編年では十腰内2式から丹後平式を経て3式が相当する。この時期には東北地方一帯に非常に特徴的な無文研磨の手法による注口土器が発達する一方で、磨消繩文を施文する注口土器が平行して存在する。無文研磨の手法による注口土器は従前とは違って壺形、甕形を基調とするもので、その後の東北地方における後期ないし晩期注口土器に至る系統性（系譜）を考える上で極めて重要であると考えているので、その出自と消長発展の系統を明確にする必要性がある。大木式の系統を引く門前式に基づくものだが、対象の幅を広げて考える必要があろう。

特に、当該期の注口土器の主体が研磨手法による壺形と磨消繩文による壺形と甕形、すなわち鉢形系統から壺形系統に分離された注口土器類型の2種が成立形成されることが注目される。新たに鉢形系統には青森県、岩手県に台付鉢形の浅鉢形注口土器が十腰内2式の前半期に出自する。これは台付鉢形で注口部の位置が口縁部にあるので前段階の系譜を伝統的に引いていることが分かる。鉢形系統の甕形の場合は前段階では注口部の位置がまだ口縁部付近にあったが、この段階になると体部上半部に移る。同じ甕形でも東北地方北部と南部では文様構成が違うので平行関係にあるとしても型式が異なり、北部の場合は十腰内3式である。

圧倒的に多いのが壺形系統の注口土器である。東北地方北部の類例は青森県、秋田県に見られる十腰内2式のa類は口縁部が「く」の字状に内傾し底部が平底で底辺部が少し立ち上がるものである（大湯型）。これに似た類例の分布範囲は福島県などと広い。最も類例の多い研磨注口土器は宮城県宝ヶ峯遺跡に多く知られているので宝ヶ峯型と称したい。これはほぼ東北地方全域と関東地方北部（茨城県）に類例が出土していて、当該期の注口土器を最も特徴づけるものである。一般にこの宝ヶ峯遺跡の出土土器は広義の宝ヶ峯式と言われているが、宝ヶ峯型にはいくつかの階級があるものと思っている。この宝ヶ峯型には幾つかの特徴があり、口縁部形状では外反するもの（a類）、内湾するもの（b類）に区分され、a類には口頸部が2段に膨らんで多段化するもの（a2類）とそうでない単純に外反するもの（a1類）がある。底部の形状も特徴的で平底、丸底、底辺部に屈折の段を形成するものなどがある。この注口土器には全て沈線文による入組み帶状区画文が施文される。このように幾つかの特徴は一型式の範囲に収まるものではなく、青森県の編年では十腰内2式から丹後平式までの範囲で捉えられ（鈴木克彦1996）、一部は十腰内3式まで渡る可能性がある。恐らく宝ヶ峯式というのもそのように細別されるものではないかと思う。いずれにしても精巧な作りと光沢をもち、朱塗りなどがある。

この宝ヶ峯型の器形を特に注意するのは、後の東北地方の後期、晩期の注口土器の形態を規定する型（a類=型、b類=型）をこれに持っているからである。この研磨手法の宝ヶ峯型には磨消繩文を施文する注口土器が共伴することが丹後平式として判明している。この宝ヶ峯型の出自は上記したように十腰内2式前半期にあるであろうから、十腰内2式古手（2a式と表記）の大湯型、白長根館型

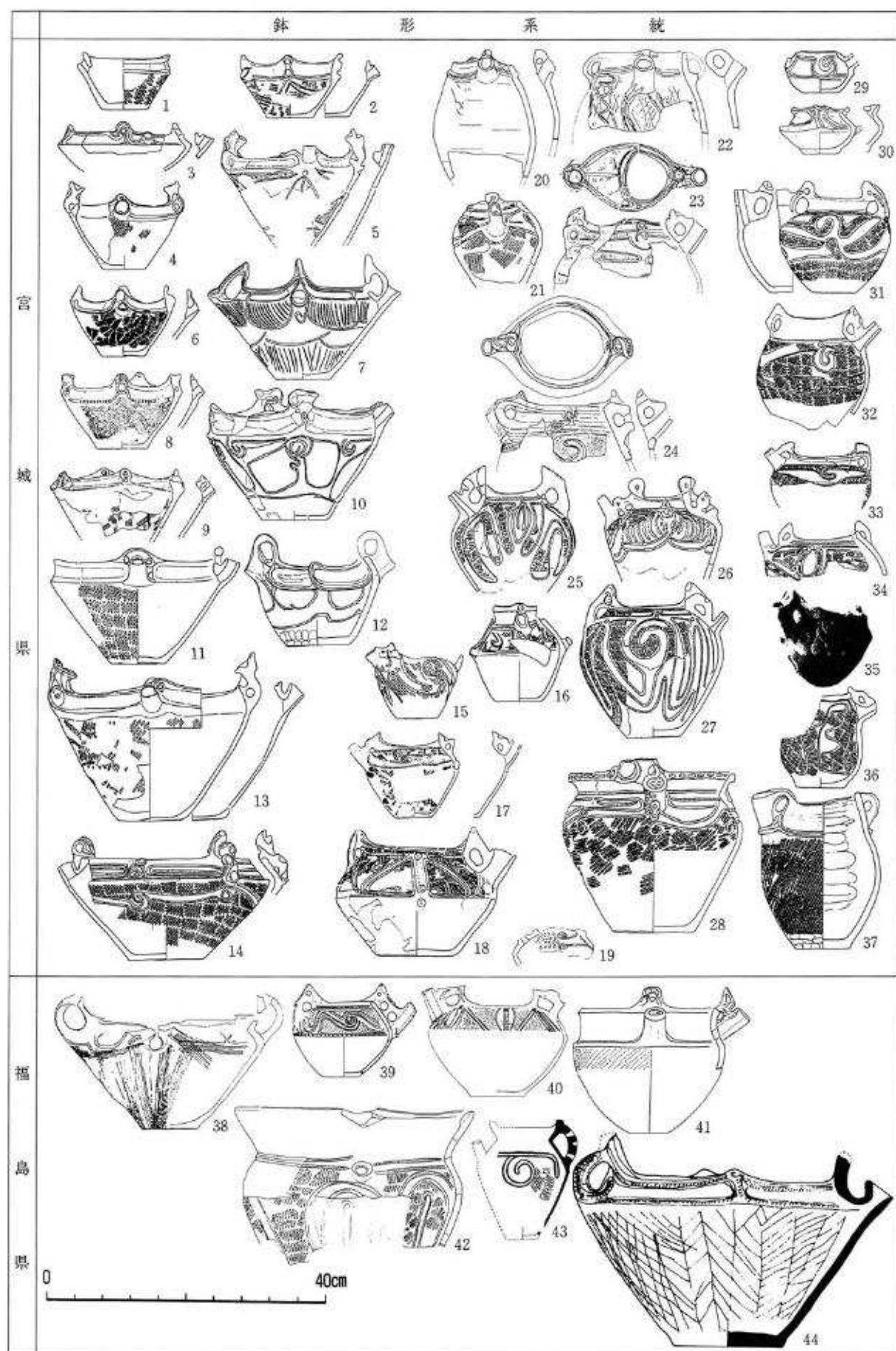


図5 東北地方南部後期初頭の注口土器

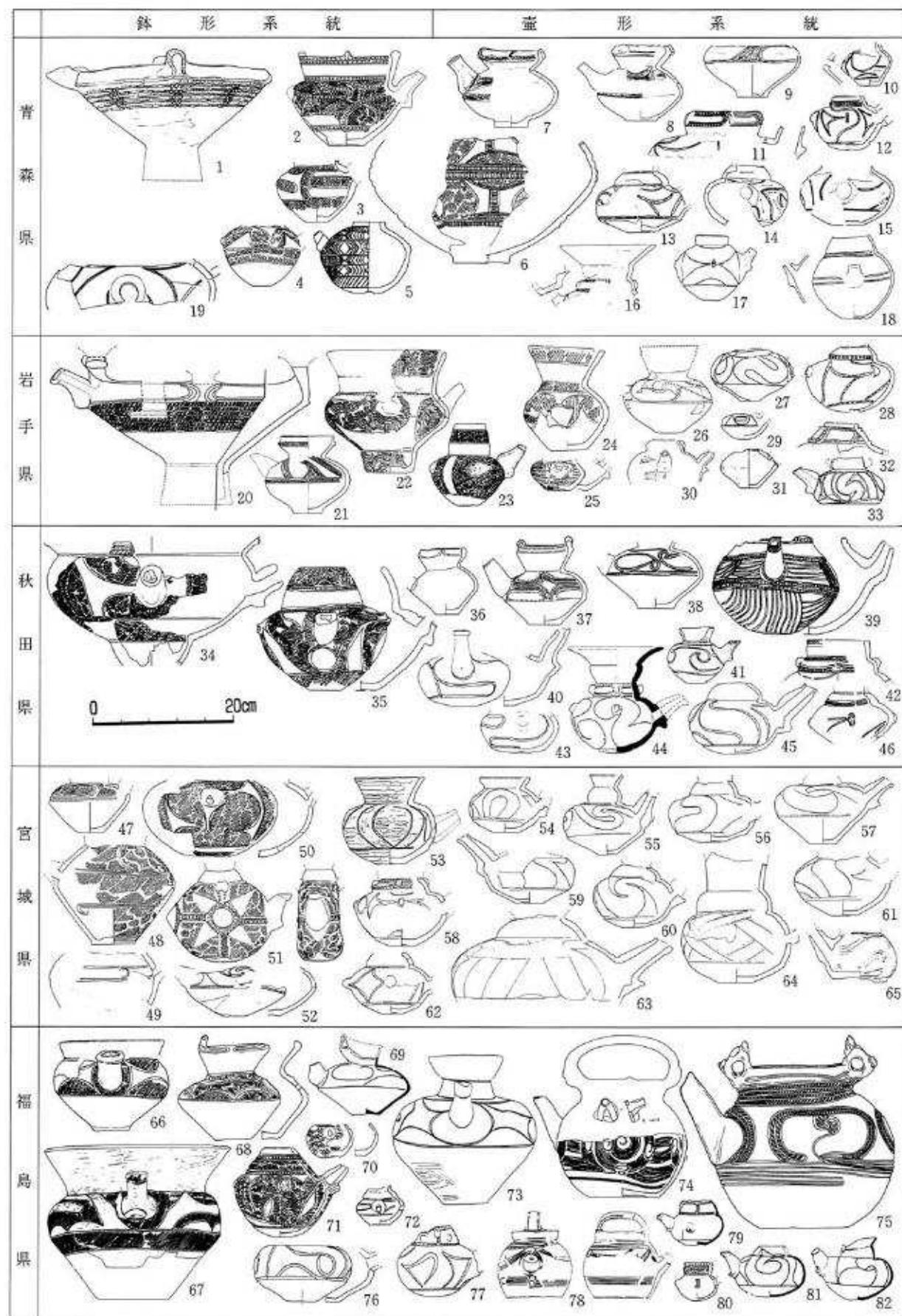


図6 東北地方後期前葉の注口土器

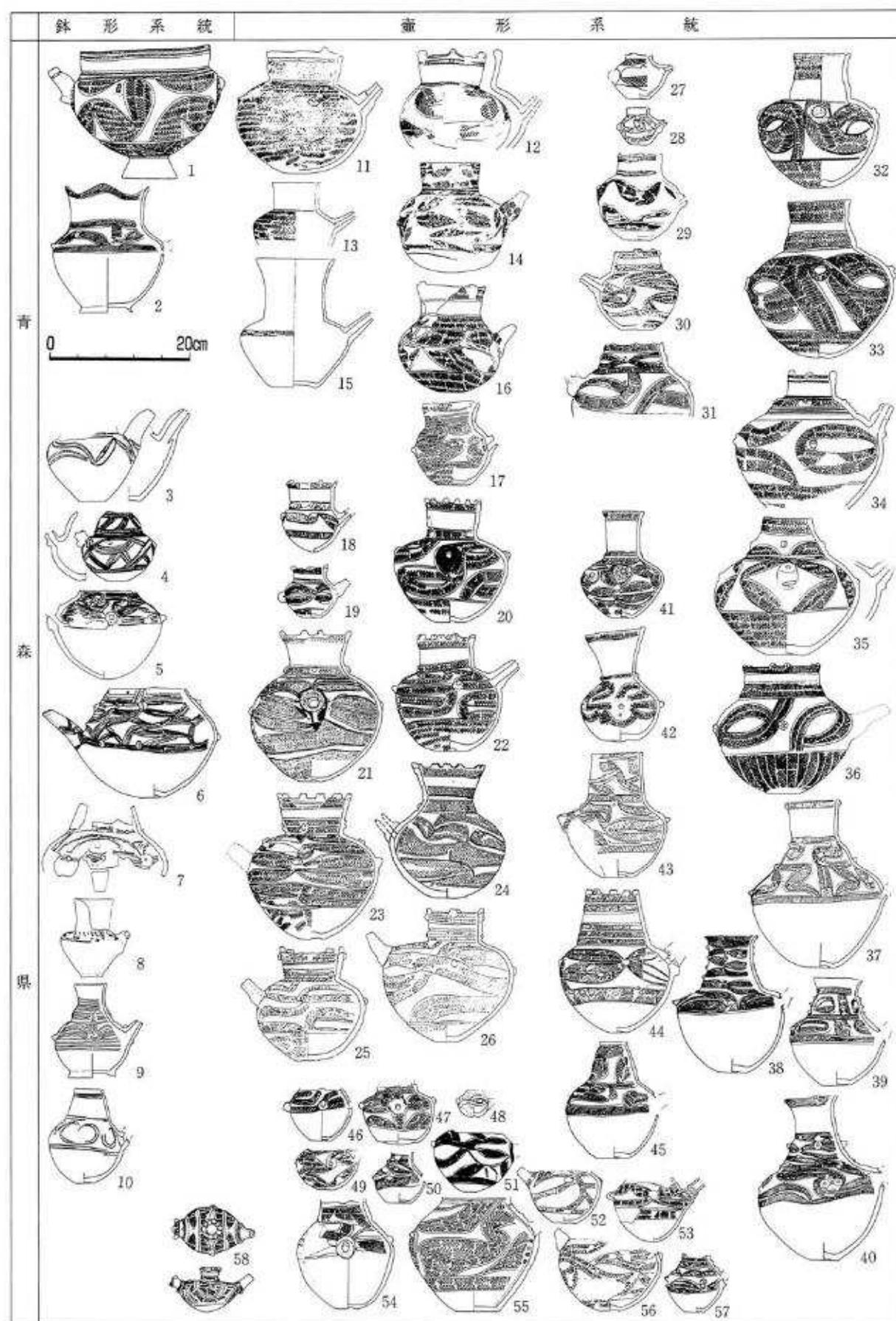


図7 東北地方北部（青森県）の後期中葉の注口土器(1)

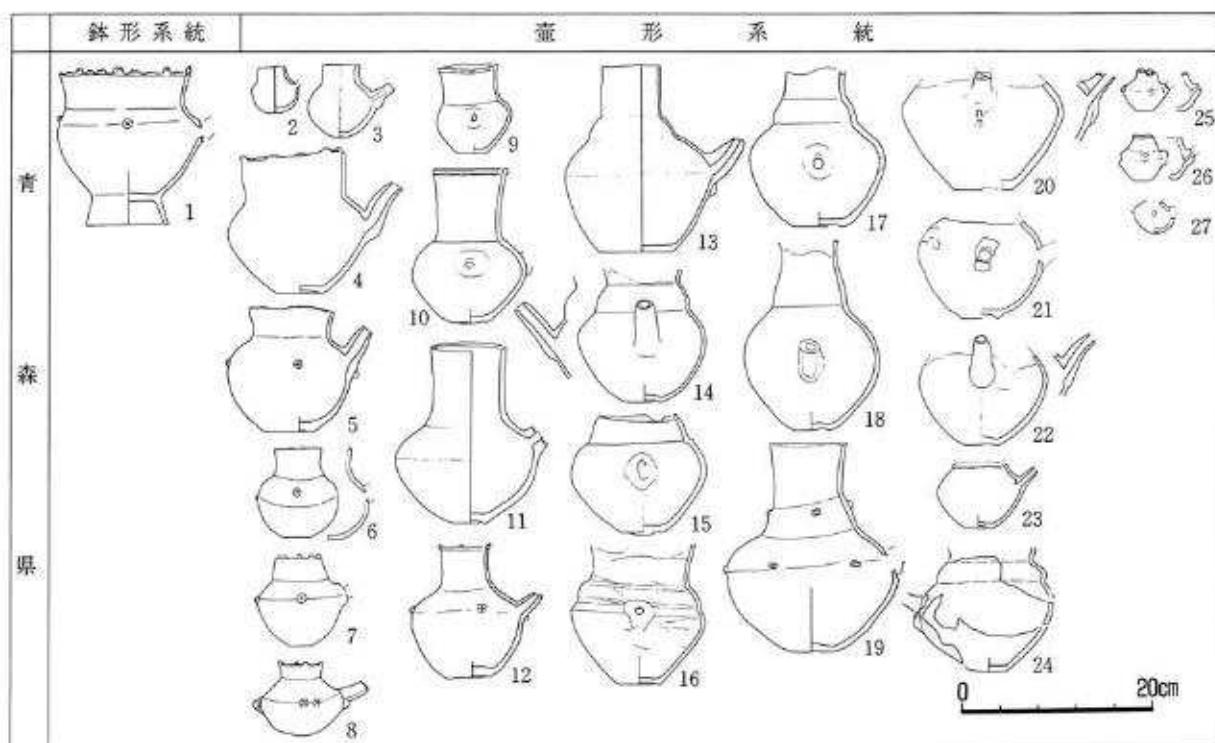


図8 東北地方北部（青森県）の後期中葉の注口土器(2)

と平行（共伴）関係にあるもの、その新手（2b式と表記）に相当するもの、更に丹後平式に共伴するもの、という少なくとも3段階ないし十腰内3式にもその可能性がありうるので3～4段階が存在するであろう。宝ヶ峯型には把手が付かない。しかし、白長根館型にはアヒルの嘴状の把手が付いていた。両者は文様の施文手法やモチーフは類似するものがあるが、器形が大きく異なる。

宝ヶ峯型の口縁部が外反するもの（a類）と内湾するもの（b類）の2種には、底部の形状から平底、丸底の他に底辺部が立ち上がり気味のものなどがあり、同じく文様構成もまた類別する要素になりうる。文様を型式判別の要素とする時には前段階の横位方向を示す区画曲線文がより古い文様構成を示すものであろう。体部は一般に丸く球形を呈する。さて、口縁部が外反するa類には短い口縁部が直立したり外反するだけのもの（a1類）と多段化して口縁部、口頸部が分離するもの（a2類）がある。a2類には口頸部が2段になるものもある。底部には平底と丸底があり、両者に上げ底がある。底辺部には立ち上がり気味のものや屈折して稜線が付くものなどがある。平底と底辺部が立ち上がり気味のものの方が古手で、後出のものが丸底だと思う。丸底には中央が窪んで上げ底（凹底）になるものなどがある。口縁部が内湾するするb類は現状では全て丸底を呈する。このかぎりでは宝ヶ峯型は当初からa類、b類が共存したのではなく或る段階からb類が出自したことになるが、この点はa類の出自問題と含めて今後の課題である。現状ではこの宝ヶ峯型は文様からは或る程度の系譜を理解できるが、恐らくは十腰内2式古手の大湯型と十腰内2式か直前の壺形注口土器をベースにして発達したものではないかと考えられる。特に、b類は大湯型を更に内湾させた場合に派生する形態ではないかと考えるし、a2類はその大湯型と通常の壺形注口土器が合体して生じた形態の可能性がある。

東北地方南部の福島県には土瓶形と称される体部が球形の壺之内式に多い注口土器（壺之内式型）が存在する。これには棒状の橋状把手と大型の把手が付くものとがある。前者は関東地方に多く、東北地方では福島県において他に類例は秋田県にあるだけである。関東地方からの影響によるものと搬入品の可能性がある。このように当該期の福島県は複雑な様相を示し、この地域は地理的な位置関係から関東地方と密接な関係を伝統的に保つ傾向がある。

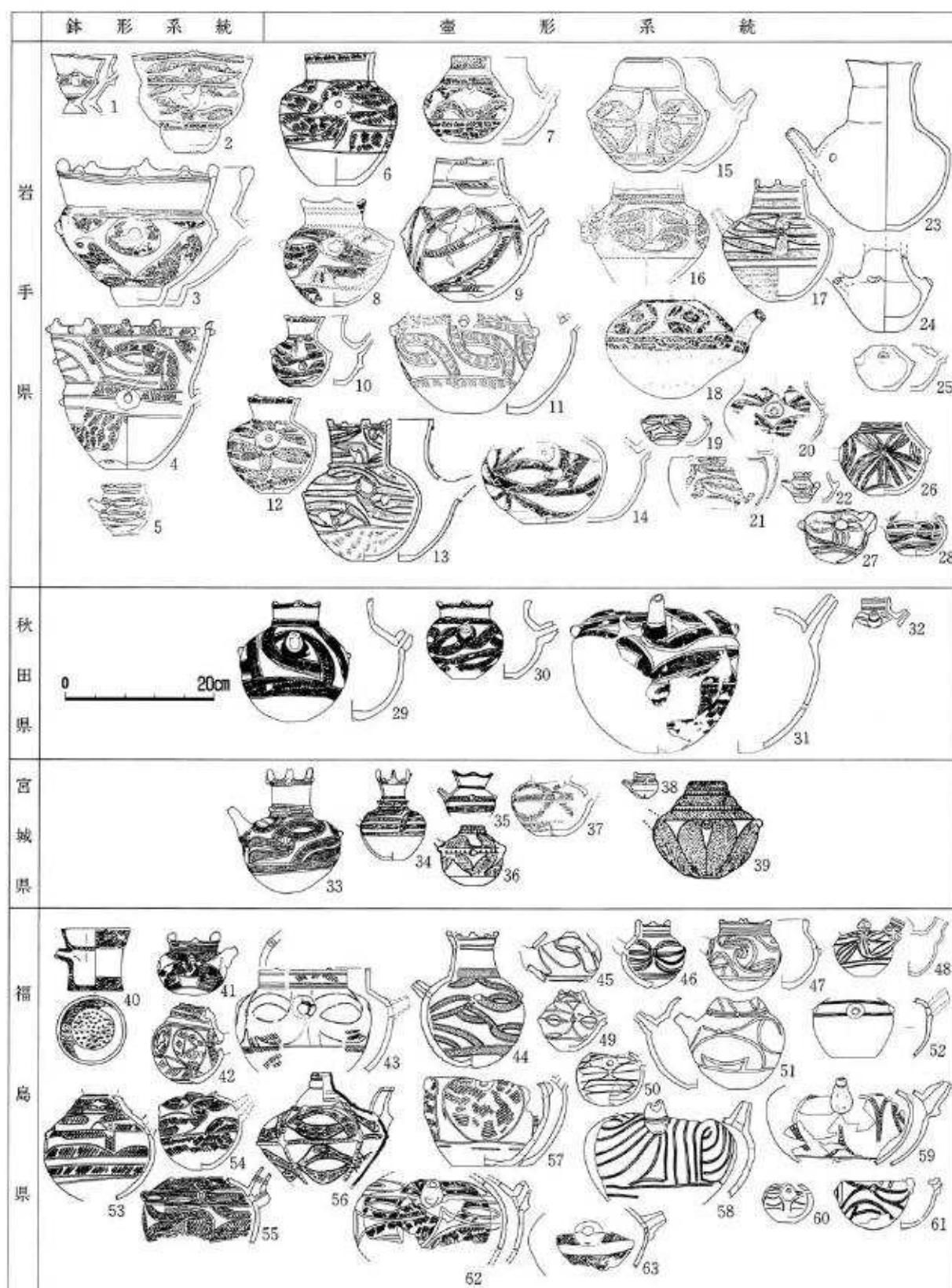


図9 東北地方の後期中葉の注口土器

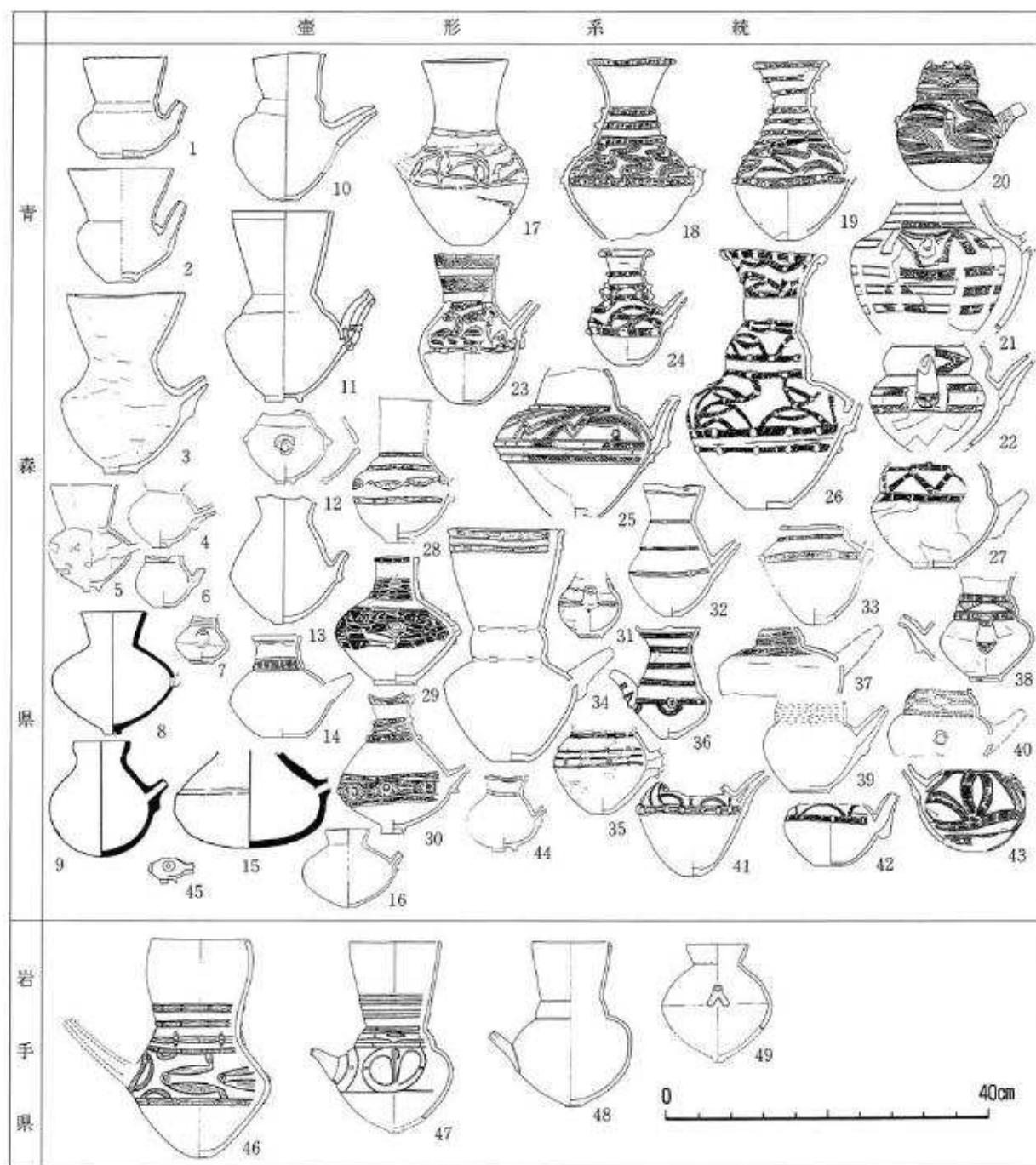


図10 東北地方北部の後期後葉の注口土器(1)

後期後葉になると、注口土器の多寡に地域差が著しくなる。現状では青森県に圧倒的に多くなり、次いで岩手県、福島県と続き、その中間地域に少ない。青森県の編年では十腰内4、5式に相当する時期である。青森県では無文注口土器が多いが、一般的には入組み帶状（磨消繩）文を施文する壺形注口土器が主体を占める。通常の壺形と壺形注口土器の器形が全く同一なために破片資料からでは判別が困難である。図化されたものを集成したが、そのような事情から類例はもっと遙かに多くなることを想定してよい。通常は体部が丸みを帯び、底部が丸底を呈する。口縁部ないし口頸部と底部形状と施文される文様モチーフをよく観察することによって型式判別することができる。とりわけ、当該期の類例には櫛掛け状入組み帶状文の磨消繩文を施文するものが汎東北地方一体に分布し、それぞれ平行関係にある北部の十腰内5式、南部の西の浜式という具合にそれらは一つの型式学的なキータイ

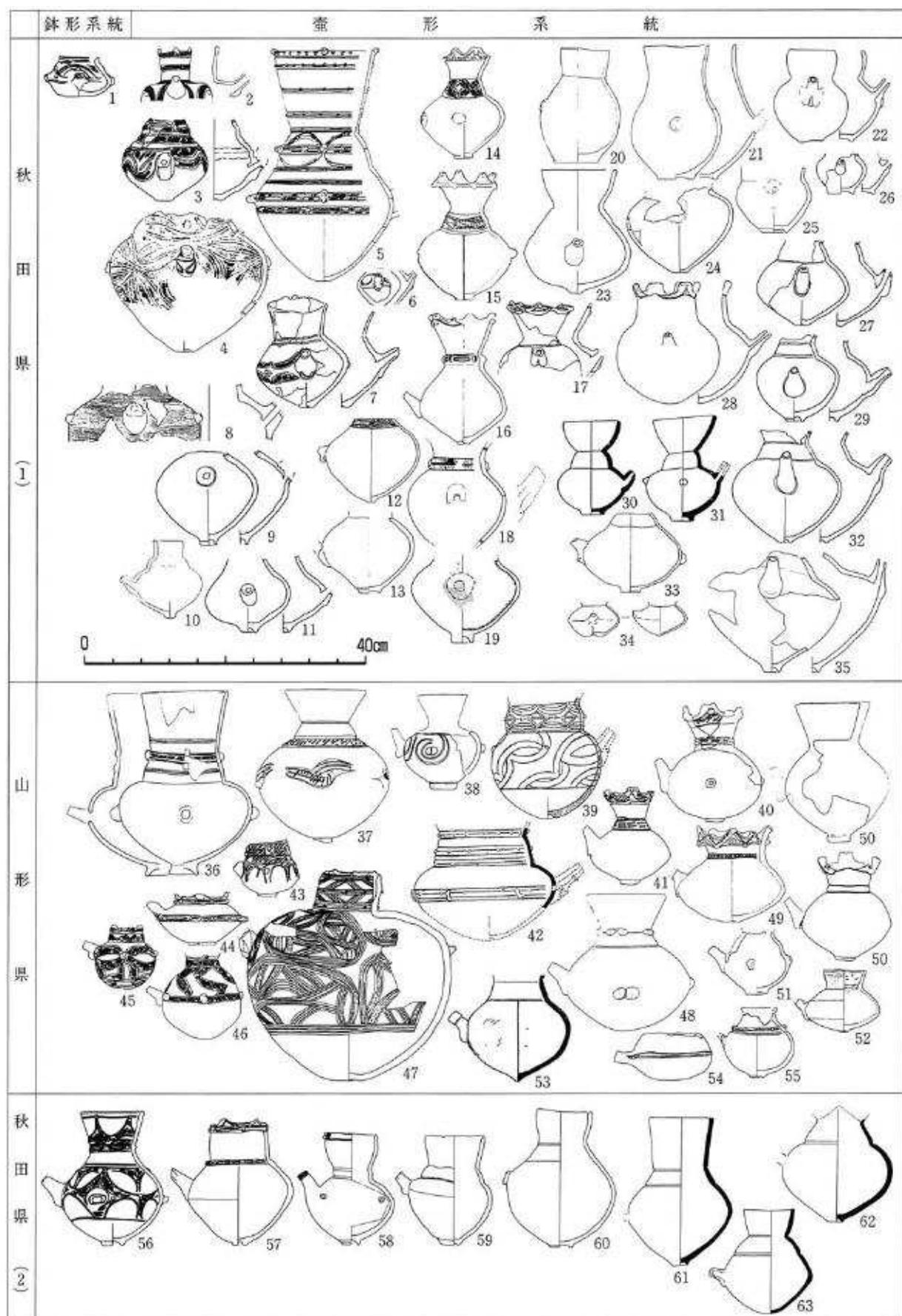


図11 東北地方北部の後期後葉の注口土器(2)

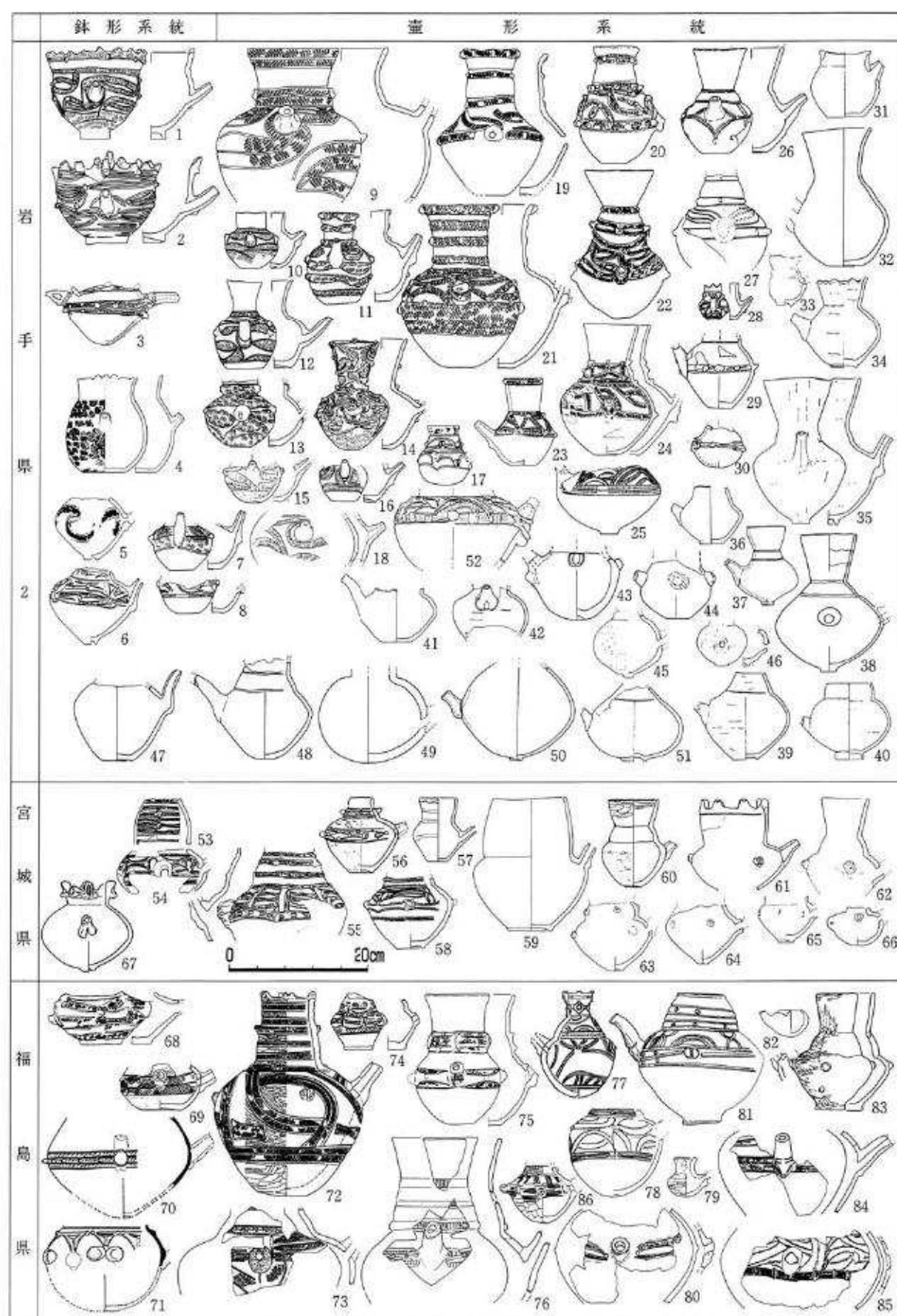


図12 東北地方の後期後樂の注口土器(3)

ブになりそうだ。ただ類例が多い割りには層位的な共伴関係を捉えられている場合が少なく、研究の余地がある。前段階同様に山形県の類例があまり知られていないために多少の問題を残すきらいがあるが、福島県では相対的に無文研磨やみみず張り状文の文様を施文する類例が多いような気がしている。

後期末葉は青森県で風張式、大湊近川式、十腰内6式が相当する。この6式は後期ないし晩期ともされるが、この辺の事情は主論から外れるので説明しない。前段階とは打って変わって東北地方全域に資料が存在する。福島県を除いて全体に無文注口土器が多いが、それはほぼ6式に集中する。6式以外では一貫してそれは青森県に多い。長く開く口縁部形状を特徴とし、青森県などの東北地方北部に平底が多いのに対して山形県などの南部に丸底が多いきらいがあるが、口縁部形状は概ね前段階の系統を引きながらも特に底部形状は特徴的である。つまり、丸底、尖底に近いもの、底部が窪むもの、高台状の台部、中央が窪んだ小さな突起状の底部など非常に多様性が伺われる。その一方で施文される文様自体には地域差が強い。この編年は晩期注口土器との関係において重要で、今後の大きな課題である。

ここでは晩期注口土器を考えるうえで看過できない資料を明記しておきたい。それは秋田県中山遺跡の無茎の注口土器（図9-1）、山形県の体部が円盤形を呈する器形の注口土器（図9-41）、福島県外出遺跡の体部が算盤形を呈する注口土器（図10-54）の存在である。当該期の注口土器は押しながら体部が球形を呈するものが定型であった。それに対してその類例は相入れない器形を示す。晩期との関係で言えば、丸底、球形の体部が共通していて、その違いを旬別することが極めて難しい程に一線を画すことができかねるのが実態だが、そう言った中に後期としてはアノーマルな器形ながら、晩期注口土器の器形の一側面を体する突然変異的な器形が当該期に存在する。恰も前後の脈絡を越えた所で新たな器形がサイレントに創作されるという可能性を指摘したい。

（6）晩期の注口土器

① 関東地方

関東地方には晩期初頭の球形体部の注口土器が知られているが、類例は少ない。それは東北地方の同時期と同じ形制にある注口土器である。少ないながらも広範囲な分布を見る。その後は、東北地方の注口土器が搬入されたり、東北地方の注口土器をモデルにした模倣注口土器が作られる。歴史的にこの問題は亀ヶ岡式の南漸、北漸論の論争史に代表される別な問題があるので割愛する。

② 東北地方（図13～24）

一般的に急須形として知られている亀ヶ岡式の注口土器は、後期の壺形注口土器の系譜を引くものである。厳密に後期と晩期の注口土器の境界を区分することは難しい。最終的な決定は形式論と共に発掘による層位的出土や共伴関係の観察によって行わなければならないが、形態と文様から類型化を図った上でそれを層位的に確認することも一つの方法である。ただし、詳細な後期末から晩期初頭の型式編年が確立しているとは言いがたい現状では、当座晩期の注口土器の概念を規定する作業が必要である。しかしながら、後期末と晩期初頭の注口土器は無文が多く、瘤付きの有無以外には明確に規定することが難しい。例えば、底部の小さな突起、高台状の台部は、基本的には後期の特徴だが晩期に残る。小型化、体部が丸みを呈することや三叉文が施文されるという点では同じものが後期にも存在する。この時期の境界に位置付けられる特徴的な注口土器に体部の丸い球形注口土器がある。この器形は、極短い期間に広範囲な分布を示すが、これの存在を以て晩期の開始とされる（須藤隆1992）ことが多い。しかし、その出自過程やその後の系譜（影響）については分かっていない。分布はやや東北地方南部に多いきらいがある。

晩期注口土器については、主として文様と形態から大洞諸式に伴う注口土器の特徴を、口縁部が内

傾するA型、口縁部が外反するB型、壺形のC型に形態分類した藤村東男の系統的な研究がある。また、九年橋遺跡の出土例から例えば大洞C2式に多様な文様を施す注口土器があることを明らかにした。このことは重要なことだが、この機械的な分類はどれがA型でどれがB型かは大した問題ではないかもしれない。しかし、晩期のそれが後期の継続だとすれば相互に意味合いを持たせた方が解りやすいと考え、藤村東男のA、B型を逆にした方が適している。つまり、後期には初めA型が一般的で或る段階からB型が出現する。これにC型、D型を加えたが、C型は藤村東男の分類とは違った壺形に近いものではない。筆者の分類法は中谷に基づく注口土器の体部形状を区分しその各形部の合体が晩期注口土器の系統的な形態的変化を順序立てているとするもので、一見して分かりやすい藤村東男の分類法は大洞B式には適しているが、その後の大洞BC、C1式以降の類例を見ると細部にわたる器形変化に見落としが生じたり、曖昧になると見えるからである。A型は晩期を貫通して主流をなす。概ねB型は大洞BC式まで、C型は大洞B～C1式、D型は大洞BC～C2式に主体となるように、細別時期によって類型が段階的に変遷することと、一貫したA型と時期別差異の著しい類型とが並立的に存在する構造が見られる。更にこれに細かな地域差が加わる。それは各県位の単位で見ることもできるし、岩手県東裏遺跡に代表される比較的狭い型の地域差などがあるが、ここでは詳述する余裕がないので、最大範囲の地域性について明らかにしておく。

図23は東北地方の北と南を大別したものだが、後半期になるに従って南部に注口土器が多くなり、北部に前半期の類例が多いことを示す。注口土器の多寡にこのような逆転した変化が起こる理由の一つに土器製作上の専業化の一環として九年橋遺跡の存在が介入していると思っているが、それだけでは解決できる問題ではない。

藤村東男(1988)は大洞C2、A式の注口土器に各々数段階があることを指摘したが、このことはそれ以前の類例にも当てはまる。この細別をそのまま型式差とすることはできないが、大洞式の型式細分を示唆する問題である。

(7) 弥生時代及びそれ以降の注口土器

弥生時代の注口土器については、関東地方で栃木県柴工業団地内遺跡、東北地方で福島県天王山遺跡、青森県砂沢遺跡、宇田野2遺跡などに類例が知られている。注口土器ないし片口形は、北海道の後北式土器において顕著である。関東地方以北には土師器、擦文土器にも片口形の類例がある。

5 注口土器の編年 ——類型分類とその系譜、編年等の諸問題—

(1) 注口土器の類型分類の基準

注口土器の研究に果たした中谷治宇二郎の功績は、その全体を網羅して実態を明らかにしたことと形態に基づく類型化を図ったことである。多少順序が逆転した部分があったとしても、もっと発展的に論じ高めるべきものであった。当時既に中期の類例の2、3が知られていたが、その実態が不明確なために特に分類立てをしなかったらしく、よく知られていれば当然それがA型になったであろうし、その後の研究が進めばこの記号類型(の内容)は当然改定されたであろう。藤村東男の分類も機械的なもので後期と晩期との間に整合性、連動性はない。晩期の注口土器は後期の注口土器と密接な関係を持ちながらも独自な形態を持って発達したものであることが述べられているので、相互の連動性を求める必要がなかったと考えたのかもしれないが、機械的な分類ゆえの帰結である。筆者はその機械的分類(類型化)に意味合いを持たせることを意図した。その発想は、晩期粗製深鉢形で述べたこと(鈴木克彦1996)と同じである。こういった機械的な分類に終始しては混同をきたしかねない。だからという訳でもなかろうが、注口土器は「○○式の注口土器と呼ぶことが正しい」とされたことがあった。しかし、筆者は必ずしもそのように考えない。日本全体の注口土器を時期毎の機械的分類に終始するの

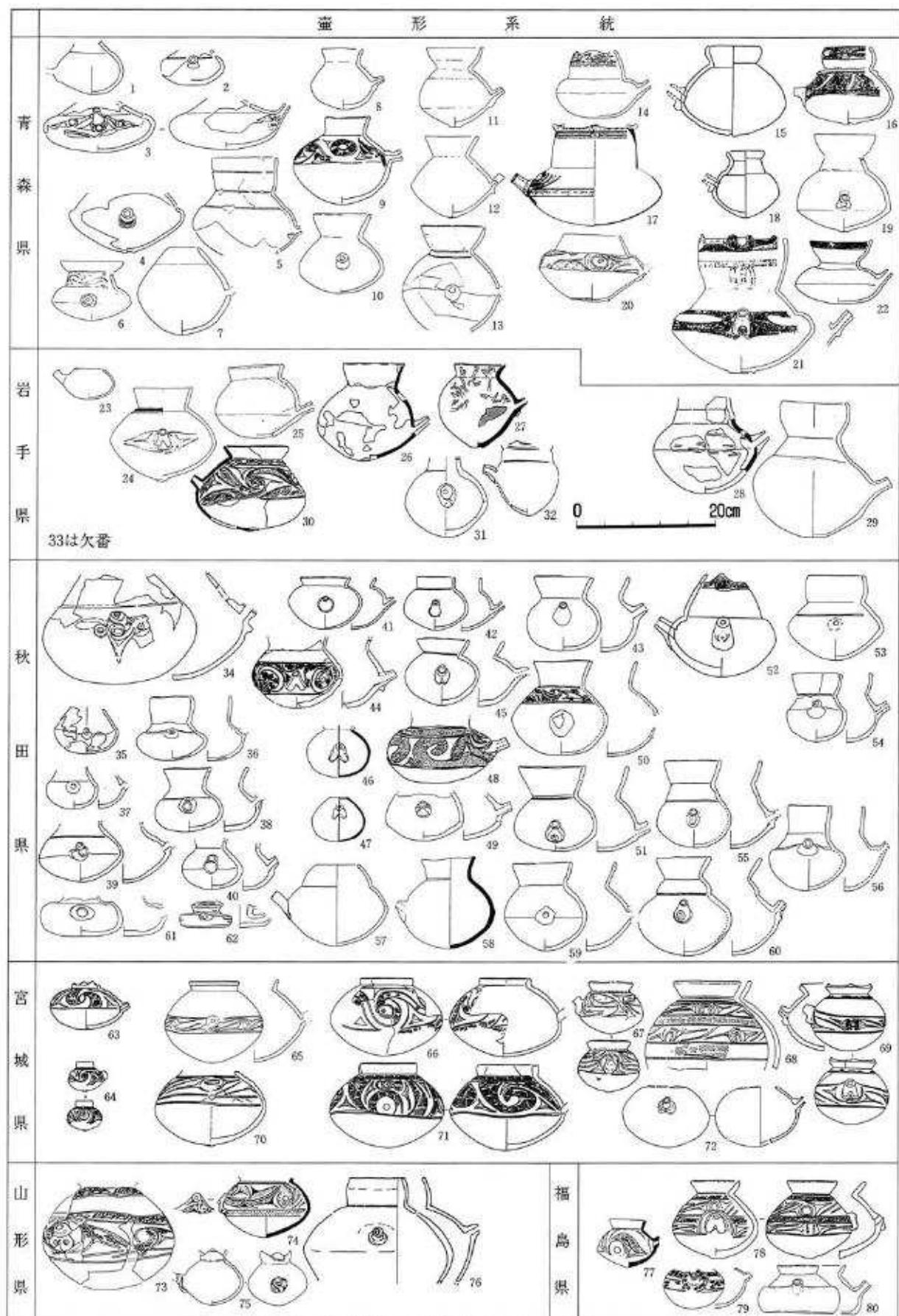


図13 東北地方の晩期初頭の注口土器

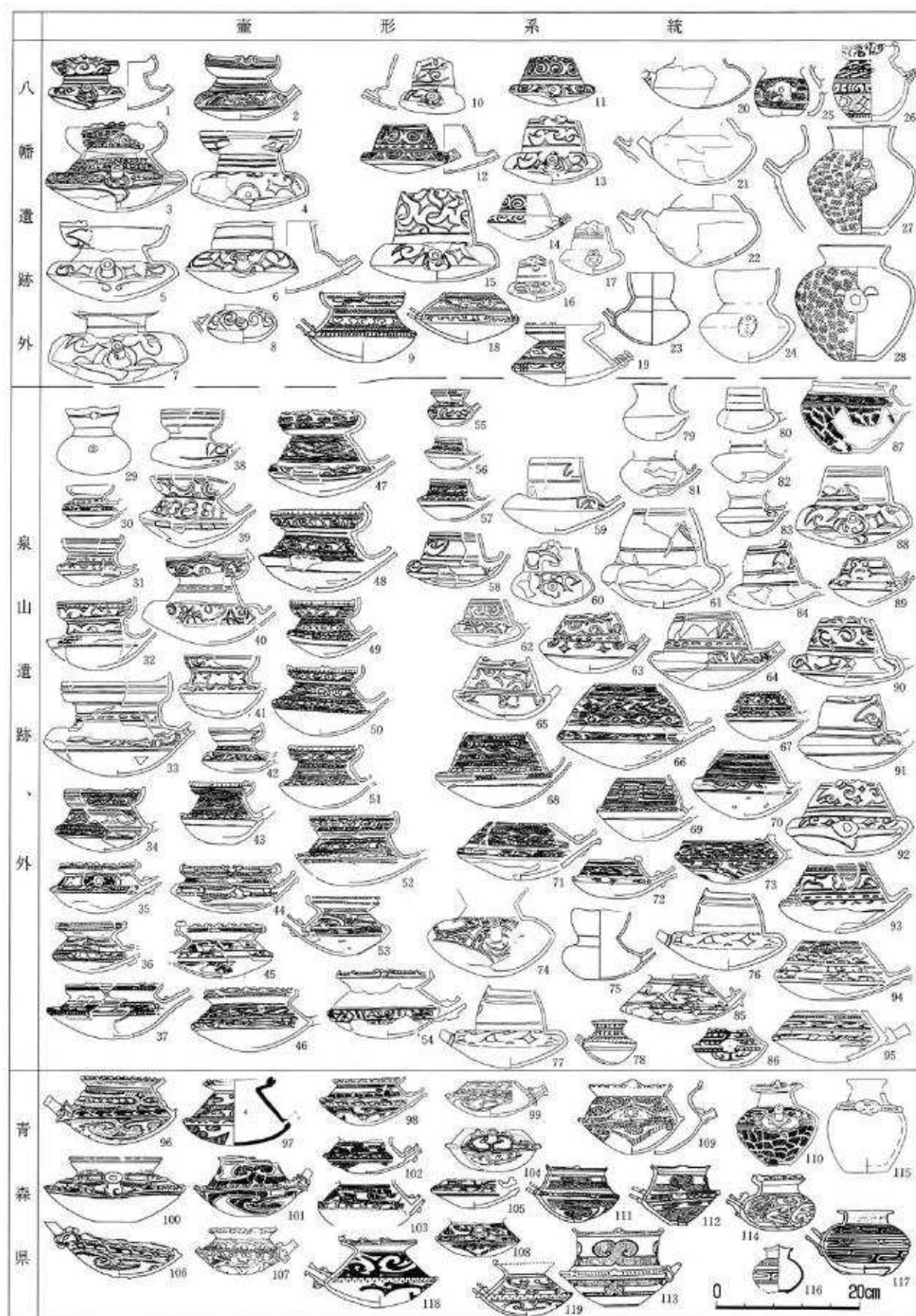


図14 東北地方の晩期注口土器（青森県）

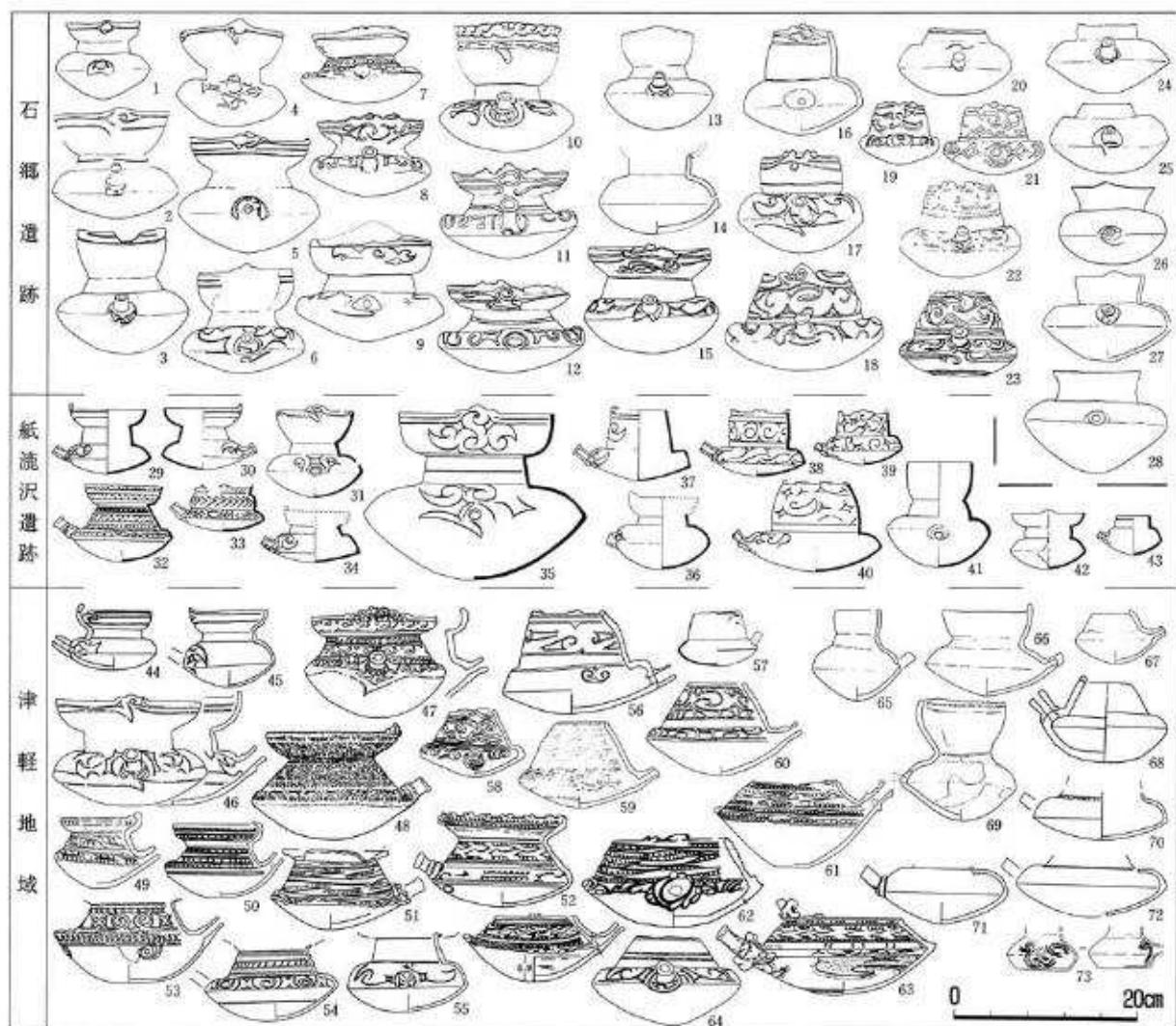


図15 東北地方の晩期注口土器（青森県2）

ではなく、分類を系統的に体系づけて類型化することを試みることが必要であろう。勿論、器形組成の問題もまた重要な課題であるが、今後、注口土器の分類やその変遷を全時期を通じてどのように止揚するべきものであるかは、重要な編年的研究の課題であると考える。

類型化は段階的な変遷を捉らえることでもある。段階的とは連続性（継続性）と非連続性（断続性）を知ることである。しかしながら、大方の分類基準に共通していることは個々の形態差である。これに対して筆者は編年的な画期と鉢形と壺形という器形類型を前提にしその系統を捉らえ、類型と変遷に具体的に有機的な意味合いを持たせることを考えた。事実、変遷には大きな画期がある。中期中葉以前を別にして、中期から後期、後期から晩期にかけては注口土器の形制（形製）の確立という意味では共通しているが、その間には地域別にそれぞれ大きな変節があると共に系統的な意味合いがある。これを形態、文様差で捉らえるならおびただしい変化が見られる。このような注口土器の類型による編年的な研究と共にもうひとつの重要な課題は、その地域性の問題である。縦軸と横軸を組み合わせた所謂型式学的な編年的な研究を止揚する方法としての類型化のために、従来行われて来た機械的分類に何らかの意味合いを与えるべき時期に來ていると思う根拠の一つがここにある。

（2）注口土器の編年的類型とその系譜等の諸問題

日本の注口土器の変遷において、草創期から中期までは鉢形系統が主流を成した（注4）。中期から後期にかけては鉢形系統から壺形系統の要素が加わる。それには地域的な二面性があり、東北地方

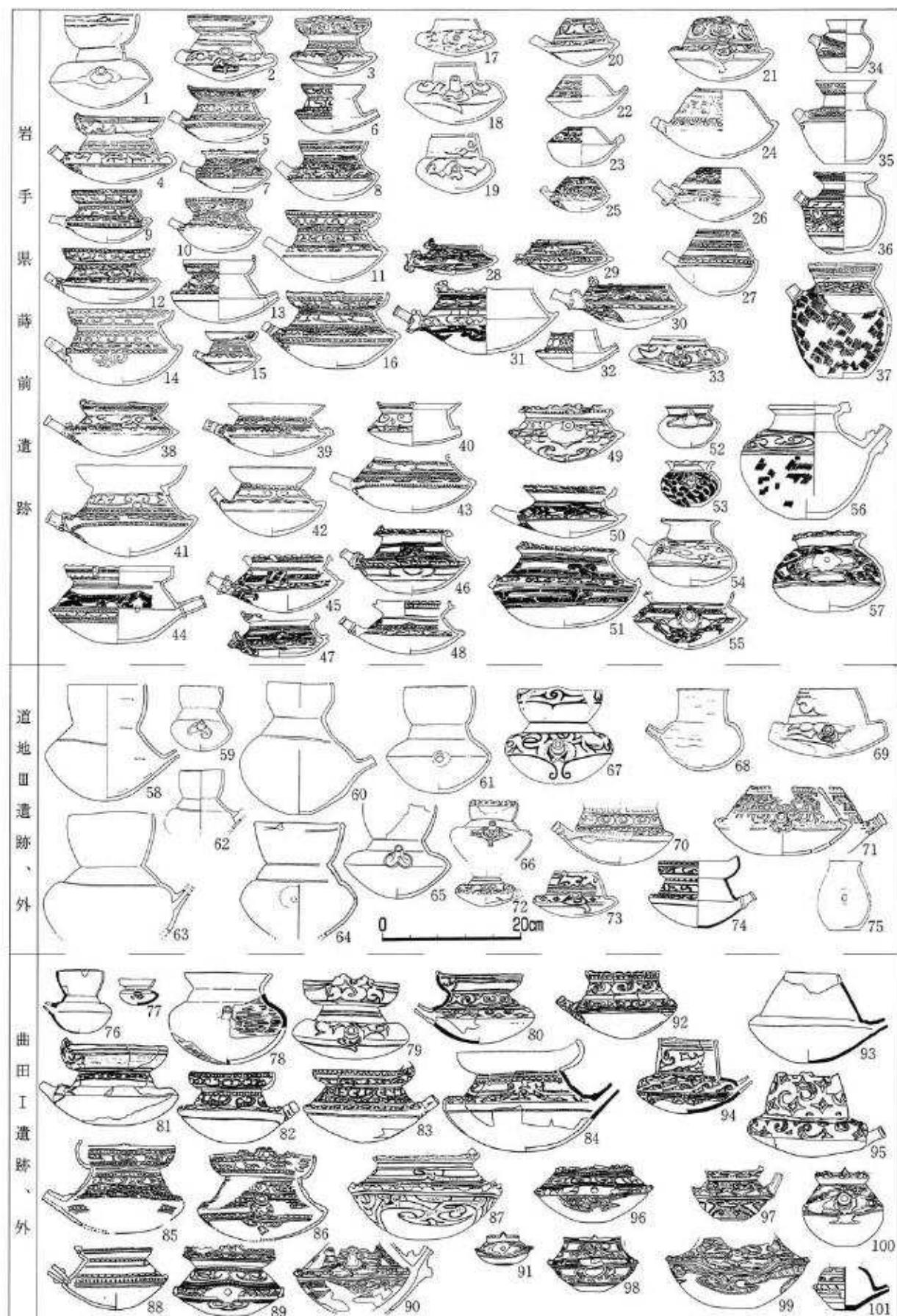


図16 東北地方の晩期注口土器（岩手県1）

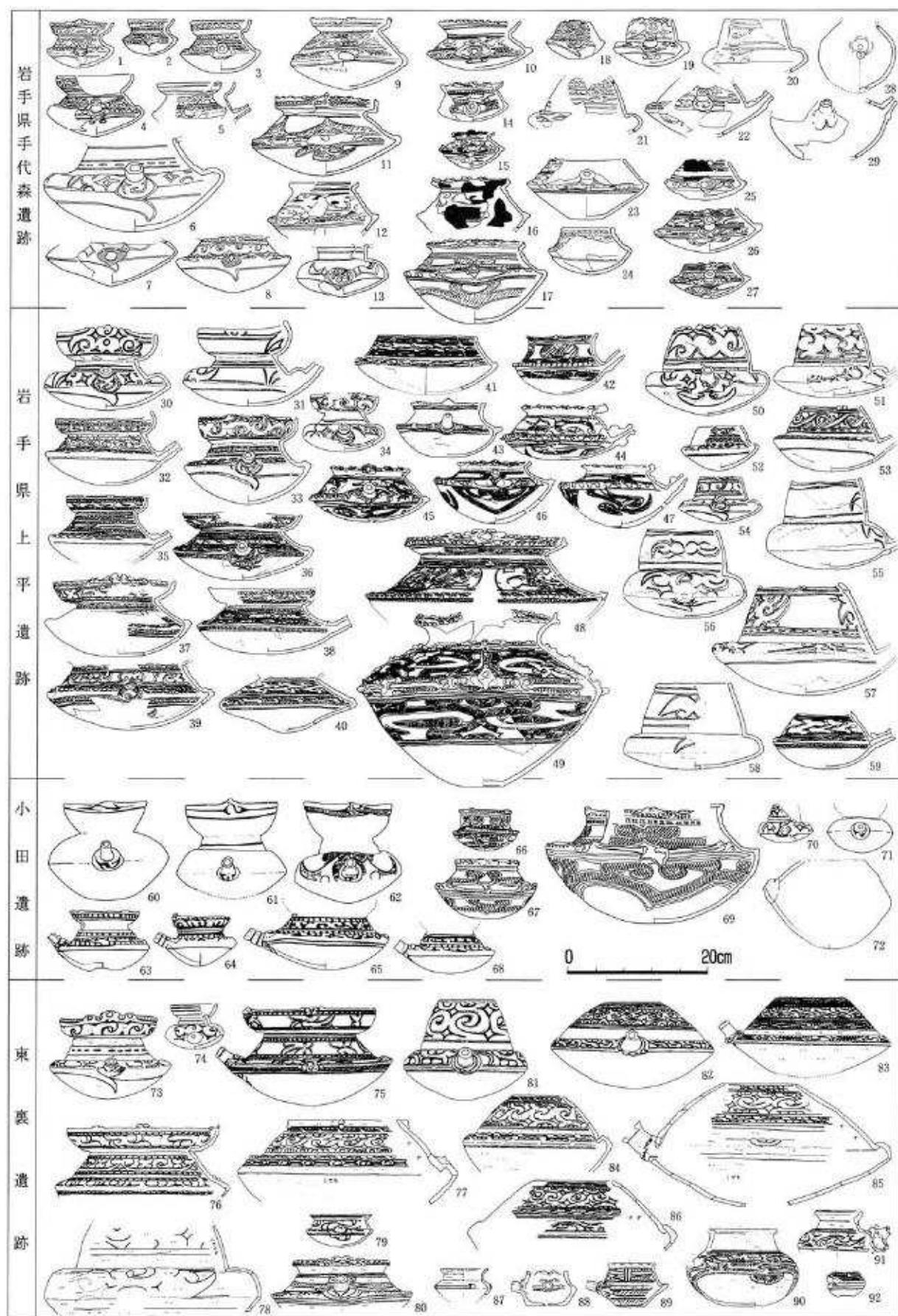
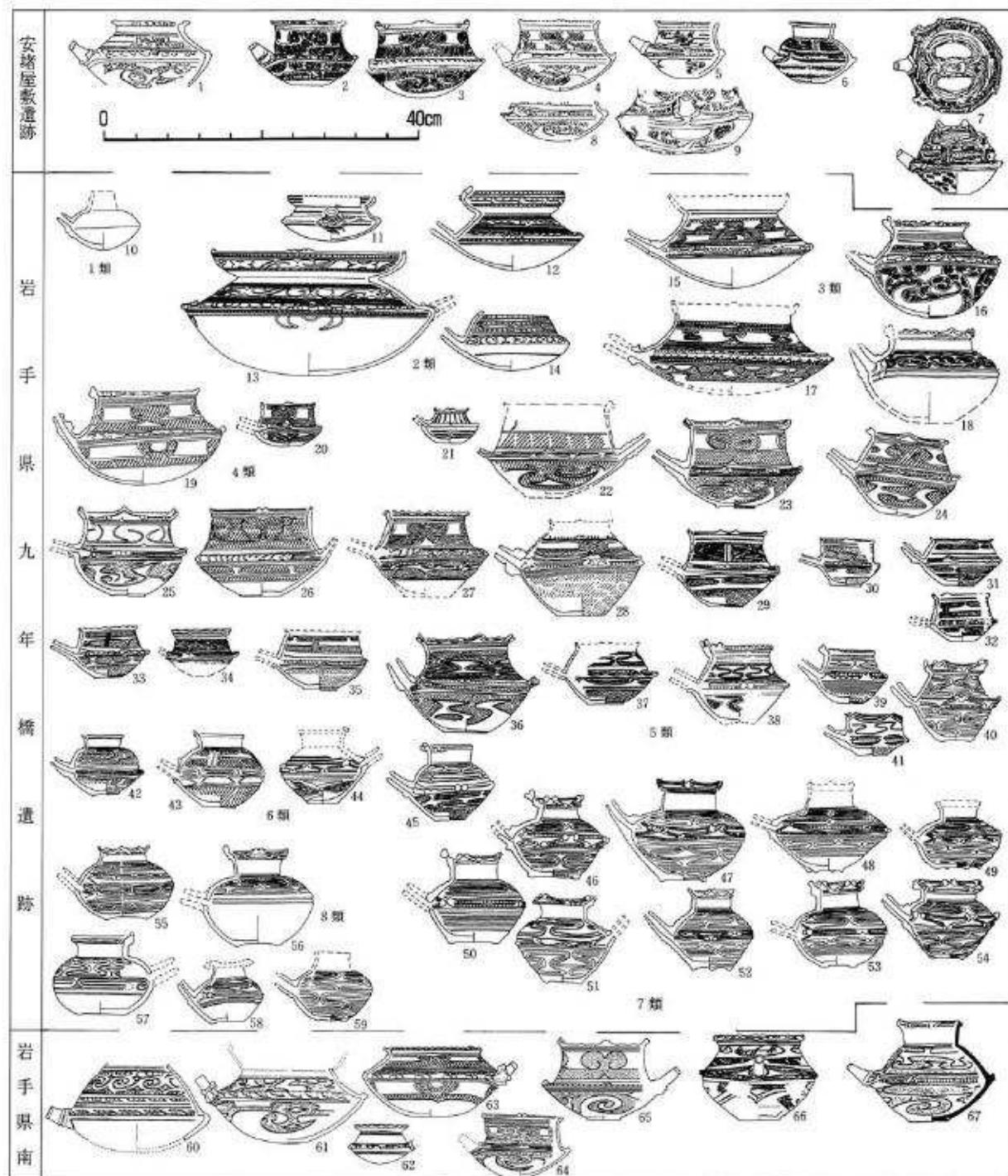


図17 東北地方の晩期注口土器（岩手県2）



(九年橋遺跡図中の分類は藤村による)

図18 東北地方の晩期注口土器（岩手県3）

北部はいち早く壺形を踏襲した。東北地方南部と関東地方は鉢形と壺形を組み合わせながらも相対的に東北地方南部が壺形系統を強くし、関東地方はその度合いが弱い。一見して壺形と見える堀之内式、加曾利B式の注口土器の器形は独自な器形の注口土器と言われるが、基本形は鉢形でそれに壺形の影響が強く係わったものである。この諸相に注口土器の型式学上の問題がある。関東地方の堀之内1式の注口土器は東北地方の強い関与のもとに成立したと考えられた（池谷1990）にも係わらず、大木10b式の浅鉢形から形態変化して成立したと説明されただけで、これでは体部が球形の関東地方特有な注口土器の形成過程は理解されない。称名寺式の類例が池谷と西田（1992）では見解が異なるようだが、

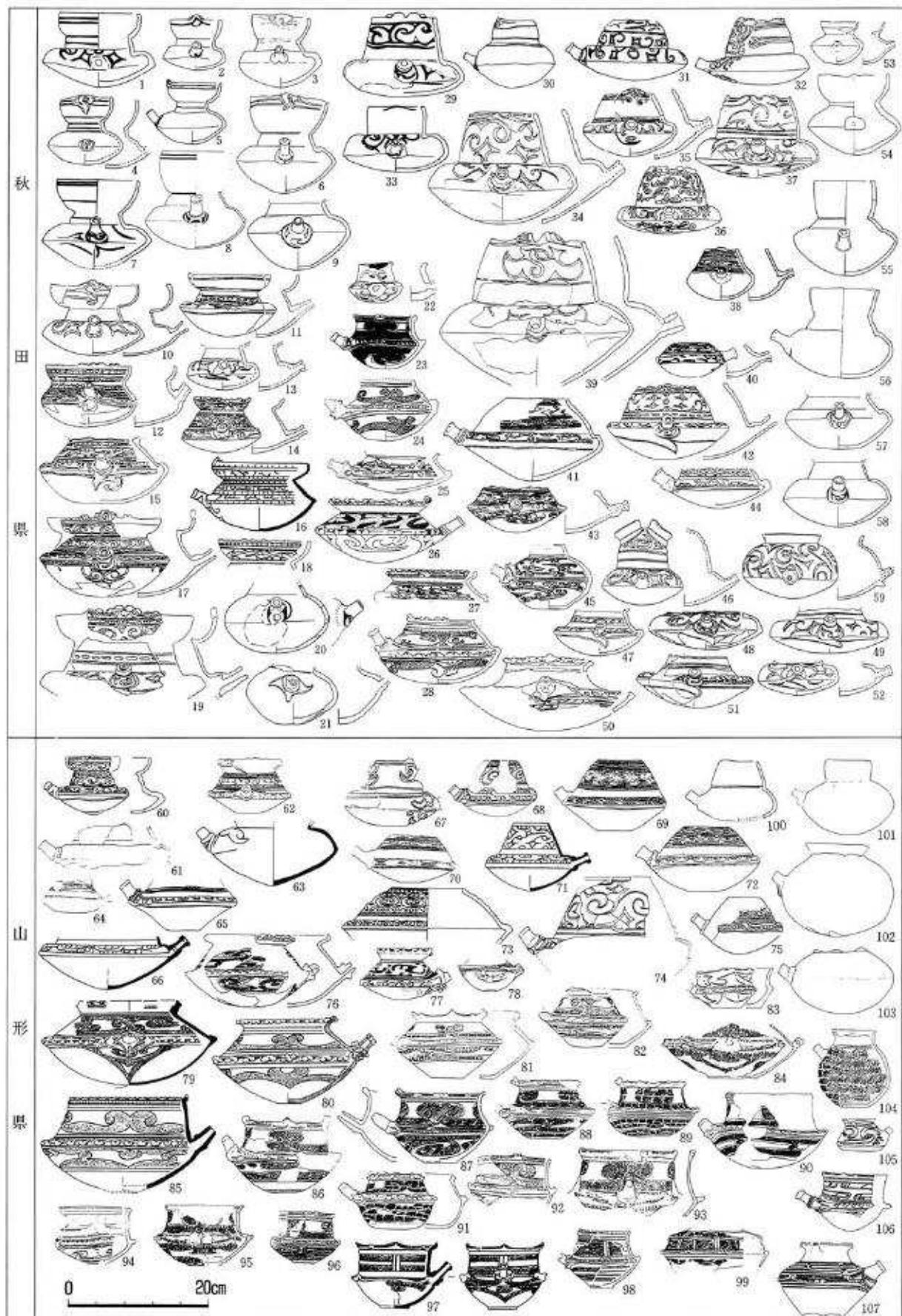


図19 東北地方の晩期注口土器

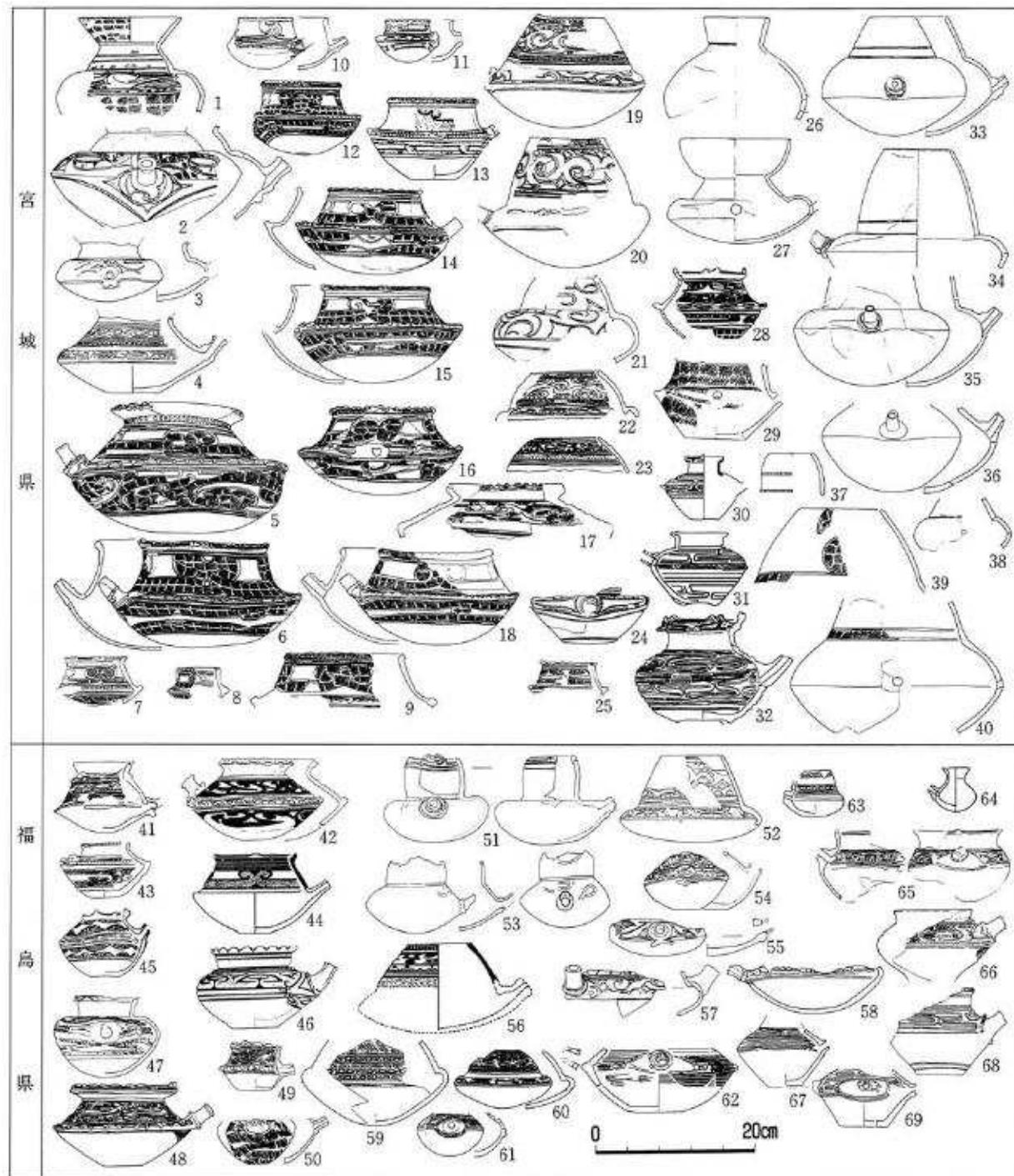


図20 東北地方南部の晩期注口土器

そのような大木10式から継続する鉢形の系譜に関東地方の同時期の他の土器（壺形ないし甕形）の器形（池谷の言う在地的注口土器を含む）の形態的特徴の影響と口縁部が明瞭な壺形の影響の2段階を経て完成した形態だと考える。前段階までは東北地方南部と深く係わるが、後段階では関東地方としての独自性を強める。その一方で、堀之内2式のソロバン形注口土器は東北地方南部の大木式の浅鉢形に由来するもので、東北地方よりは関東地方で昇華した器形である。その後の注口土器の形制は、堀之内式、加曾利B式の注口土器（池谷による網取・堀之内型）と宝ヶ峯型に大別され、この両者の注口土器の出自形成は大きな問題で、堀之内2式、加曾利B式の体部が球形の注口土器の出自が一系統であるかのような、壺形の影響を観察する視点が池谷の論考に欠けている。鉢形と壺形は日本の繩

文土器の基本形であって、相互に影響があつても生物学の進化系統樹に似た進化論として鉢形が壺形に直接変化することはあり得ない法則である。

以後、東北地方と関東地方では注口土器の発展の軌跡、過程が異なる。その間には壺形の存在を忘却することができない。関東地方の場合は壺形系統を継続することは無かった。正確に言えば長続きしなかった。東北地方の場合は後期初頭の変節とは打って変わって後期中葉以降は例外があつても全て壺形系統として発展して晩期亀ヶ岡式の注口土器に成就する。

関東地方の後期後葉以降については、主に東北地方に注口土器が盛行したために十分に説明をする余裕がなかつたが、東北地方においては磨消繩文、無文、研磨手法の注口土器の三者が注口土器の主流を成し、器形上の類型化が宝ヶ峯型注口土器として完成した。後期から晩期にかけて無文注口土器の存在は一過性のものかもしれないが、侮れない。それ以上に、宝ヶ峯型の形製において口縁部が内傾するものと外反する二形態、丸底、尖底に近い底部形態が出自することの意義を考えなくてはなるまい。類型上、A型、B型としたが、後期、晩期の区分を越えた機械的な分類から系統的な継続性を主張する意図をそこに図った。特に、宝ヶ峯型注口土器の重要性はその文様にもある。例えば、東北地方全域に存在するみみず張り状文もこの宝ヶ峯型の文様に發する。

注口土器に施文される磨消繩文は東北地方北部に發達した。その中で後期中葉から後葉にかけては西の浜式や十腰内5式に代表されるような櫛掛け状文が盛行して一時期を画する。亀ヶ岡式のそれが偏平で丸みを帯びることに対して、当該期には多段化した長胴の大型な注口土器が發達し、以後全体的に無文注口土器が多くなる。この間、一貫してA型が主流をなすが、再びA型、B型が台頭して亀ヶ岡式注口土器の基礎を作る。

このように後期注口土器の変遷過程には、十腰内1式、南境式と十腰内2式、宝ヶ峯式と十腰内5式と十腰内6式に至る段階（画期）が存在する。それは従前の基本形であった鉢形系統から壺形系統に移行する過程でもあり、十腰内2式以降の壺形系統に席巻される器形系統の変節の過程を物語るものである。東北地方では稀に鉢形注口土器、関東地方では堀之内式、加曾利B式の特有な形態を生み出しながらも、東北地方で宝ヶ峯型として完成したA、Bの類型は継続され、亀ヶ岡式注口土器に漸次移行する。その亀ヶ岡式注口土器に至って同じ器形の土器が他に見ない注口土器の独自な器形が成立する。亀ヶ岡式注口土器をして筆者は、A～D型を分類した。A、B型は後期ないし宝ヶ峯型からの継続形態である。この中でD型はB型からのバリエーションか、鉢形系統の（要素を取り入れた形態）可能性があるが、例えばそれはキメラの注口土器や異系統の類例が出没するようこの間の器形系統については再考する余地がある。

元来注口土器には器形の系譜上の点から独自な器形というものは極めて少なかつた。大半が鉢形か壺形、ないしは壺形のバリエーションに過ぎない。しかし、一見して壺形であるかのような堀之内式、加曾利B式の注口土器が存在するし、亀ヶ岡式特有な注口土器が存在する。前者の無頸の壺形に似た注口土器は大局には鉢形系統でそれに壺形の影響が加わり、後者は壺形系統に入る。注口土器を考える上で、この形制（形製）の変節と微細な係わり具合が大きな問題だと考える。当然、用途機能の問題もこの問題と連動している。したがって、特定の時期の類例を以てその用途機能を規定したり、鉢形、壺形系統の類型を同一視することは出来かねる。また、池谷は把手の機能性を考えているが、この点について新潟県、埼玉県、福島県、宮城県の主要な類例を観察した限りでは紐穴に使用痕は認められなかった。装飾性の方が強いと思う（注5）。

本論では繩文時代の全時期の注口土器を対象に考察した。安易な用途機能を論じる昨今の研究姿勢に個々に反論しても水掛け論に終始するであろうと考え、鉢形と壺形の系統の注口土器が存在することを示すことによって暗に警鐘を促した。最後に、注口土器の終焉の様相を示し擱筆する。晩期の注

口土器は亀ヶ岡式土器を代表する器形の一つである。この亀ヶ岡式は大方東北地方北半部に盛行したとされることが多いが、注口土器の多寡を見ると図23に示したとおりその終末期には岩手県南部の九年橋遺跡が所在する地域に多く、必ずしも亀ヶ岡式の中核地域である北部に多い訳ではない。縄文時代最後の注口土器は東北地方の北と南では南に多いのである。その意味を考えることも大きな課題である。

中谷治宇二郎以外の研究は、全て特定の時期、地域の研究に終始し、その指向は編年である。しかし、土器型式編年は注口土器という一器形でのみ確立することはできない。本論では注口土器の類型化を図り、全時期における注口土器の変遷と画期を捉らえ、時期によってその器形系統が変わっていることを明らかにした。

今後更に、注口土器の類型化とその編年との問題を詳細に深めることが大事である。その編年を基礎に、地域性や用途機能の問題を含めた文化、社会の仕組みを理解する方法論を磨くことが課題であろう。発掘事例の観察には意を尽くせなかった点が多い。また、細部にわたる器形々状変化や文様との関係からみた編年の詳細な問題点など、今後に残された課題も多い。執筆にあたり、藤沼邦彦、能登健、大塚昌彦、戸田哲也、丹羽茂、小熊博史、小倉均、阿部博志、田中則和、池谷信之、山岸英夫、工藤肇などの学兄や新潟県埋蔵文化財事業団、福島県文化センター、八戸市、仙台市教育委員会等の職員にご助言や資料提供の便宜等を賜ったことを記し、感謝申し上げる。なお、紙面の都合により多数な掲載資料の出典文献を記載できなかったことが残念である。

注記

- 注1 基本的には晩期に鉢形の注口土器はないが、中葉に断面形が算盤形を呈するものがある。この中に鉢形系統の要素が取り入れられた可能性はある。
- 注2 東北地方などの類例は、後述するように丹野雅人、池谷伸之、西田泰民、鈴木徳雄らも集成している。それらは相当数に上るので本稿では東北地方に隣接する県の一部の類例を掲載した。
- 注3 本稿では東北地方の前期の片口形を取り上げた。厳密には注口土器からは外れる。後期から晩期の片口形は外した。片口形にも時期、地域による違いがある。
- 注4 上記したように早期の熊本県綾田裏遺跡の有孔の広義な注口土器は、唯一独特な尖底の壺形である。
- 注5 注口土器の用途、機能の推定問題は実証的に語るべきものである。後期以降には朱塗も多いが、室谷、静川5、六反田遺跡などの鉢形系統の類例には炭化物の付着が認められ、煮沸容器の可能性が高い。勿論、これだけでこの問題を全て規定するつもりはない。

参考文献

- 山崎 美成 1824 (文政7年) 耽奇漫録
- モース 1879 大森貝塚 東京大学理学部紀要1-1
- 神田 孝平 1887 古土器図解 東京人類学会報告2-17
- 佐藤 重紀 1889 アイノ沢遺跡探査記 東京人類学雑誌5-45
- 若林 勝邦 1890 貝塚土器図解 東京人類学雑誌5-54
- 坪井正五郎 1891 ロンドン通信 人類学雑誌6-58
- 若林 勝邦 1893 晩奥国二戸郡小鳥谷村石器時代の遺跡 東京人類学雑誌8-84
- 坪井正五郎 1893 西ヶ原貝塚探査記報告其一 東京人類学雑誌8-85
- 八木樊三郎 1893 埼玉県大宮公園より所出の土器 東京人類学雑誌8-90
- 坪井正五郎 1893 西ヶ原貝塚探査記報告其三 東京人類学雑誌9-91
- 若林 勝邦 1894 常陸国福田貝塚探査報告 東京人類学雑誌9-100
- 若林 貝塚 1894 陸前磐城両地方二三ノ遺跡 東京人類学雑誌9-102
- 中沢 澄男 1898 常南綿北の遺跡 人類学雑誌14-152
- 川角 実吉 1898 常陸国福田貝塚発掘報告 東京人類学雑誌14-153
- 大野延太郎 1899 石器時代土瓶 東京人類学雑誌14-156
- 八木樊三郎 1902 『日本考古学』
- 高橋 健自 1913 『考古学』

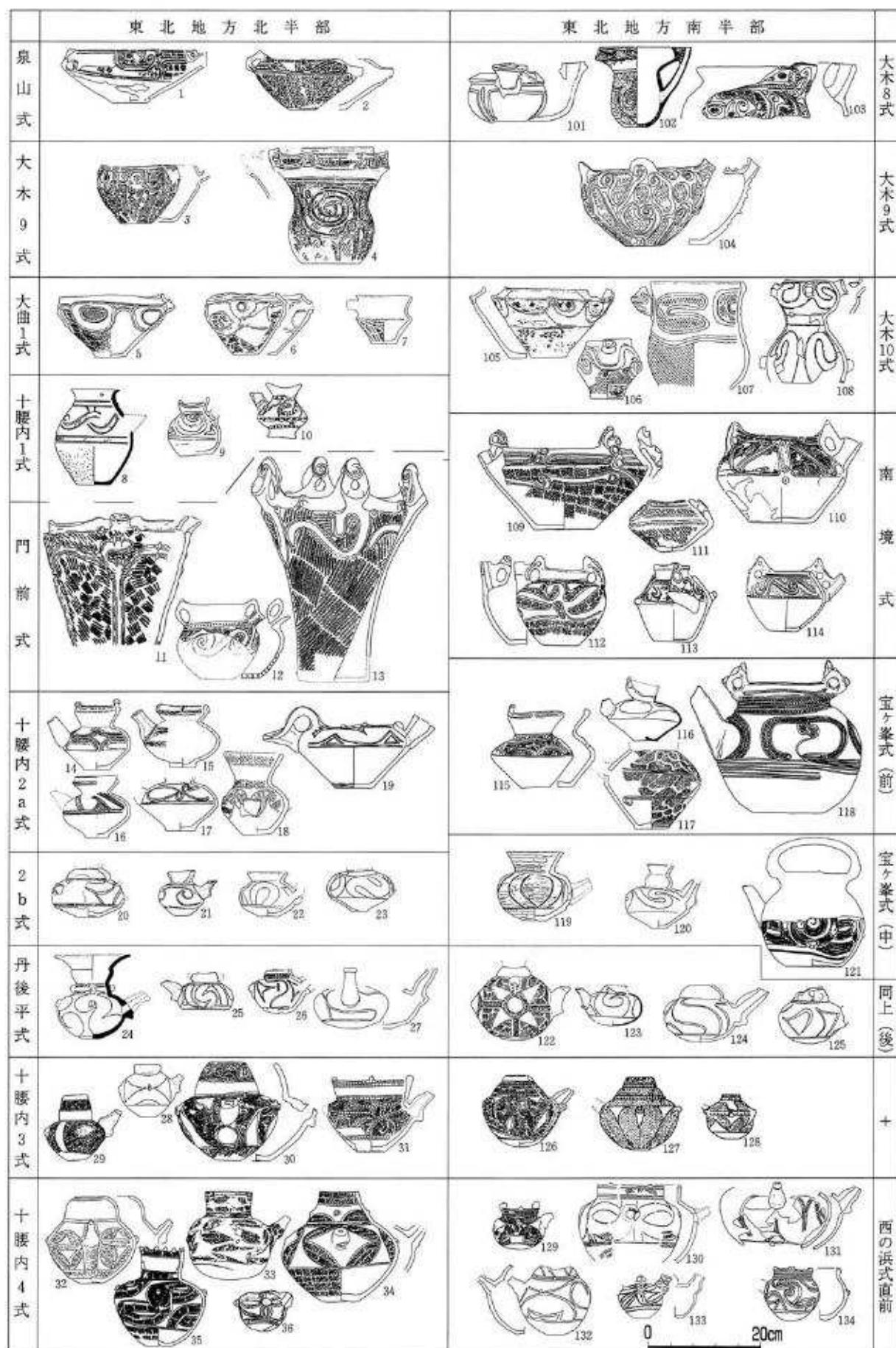


図21 東北地方注口土器変遷図(1)

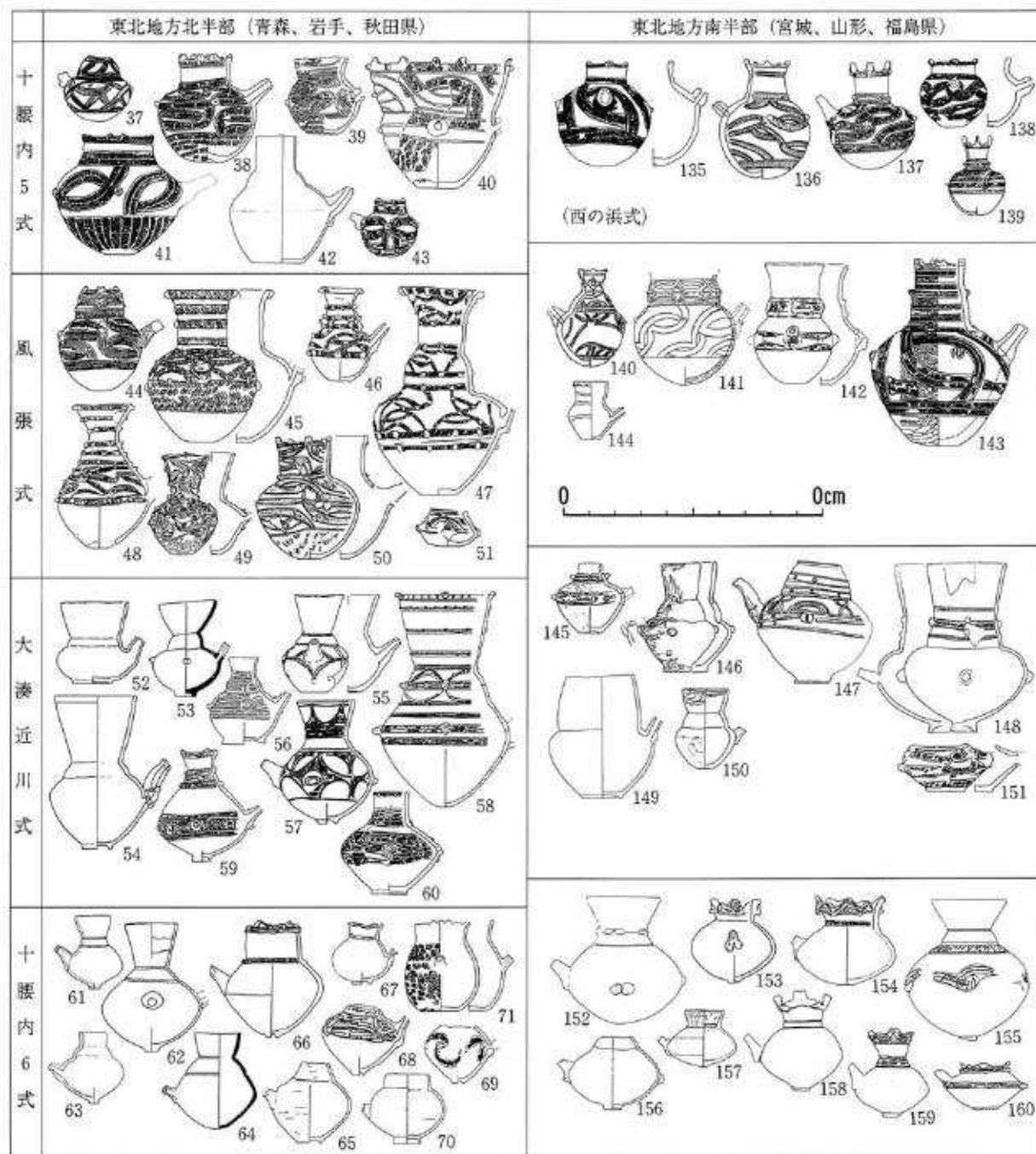


図22 東北地方注口土器変遷図(2)

石田(収蔵) 1915 最近発掘石器時代土器(口絵説明) 人類学雑誌30-6

中谷治宇二郎 1926 注口土器の分布に就いて 人類学雑誌41-5

後藤 守一 1927 「日本考古学」

中谷治宇二郎 1927 注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布 東京大学人類学教室研究報告4

八幡 一郎 1928 書評 中谷治宇二郎著 注口土器の分類とその地理的分布 人類学雑誌43-1

杉山寿栄男 1928 「日本原始工芸概説」

山内 清男 1929 Nakaya: A study of the stone Age Remains of Japan 史前学雑誌1-3

樋口 清之 1929 弥生式注口形土器について 史前学雑誌1-2

中谷治宇二郎 1929 弥生式注口形土器なる文をみて形式分類の立場を論ず 史前学雑誌1-3

大場 翁雄 1935 「考古学」

中谷治宇二郎 1936 日本新石器文化の一考究 考古学7-1, 2

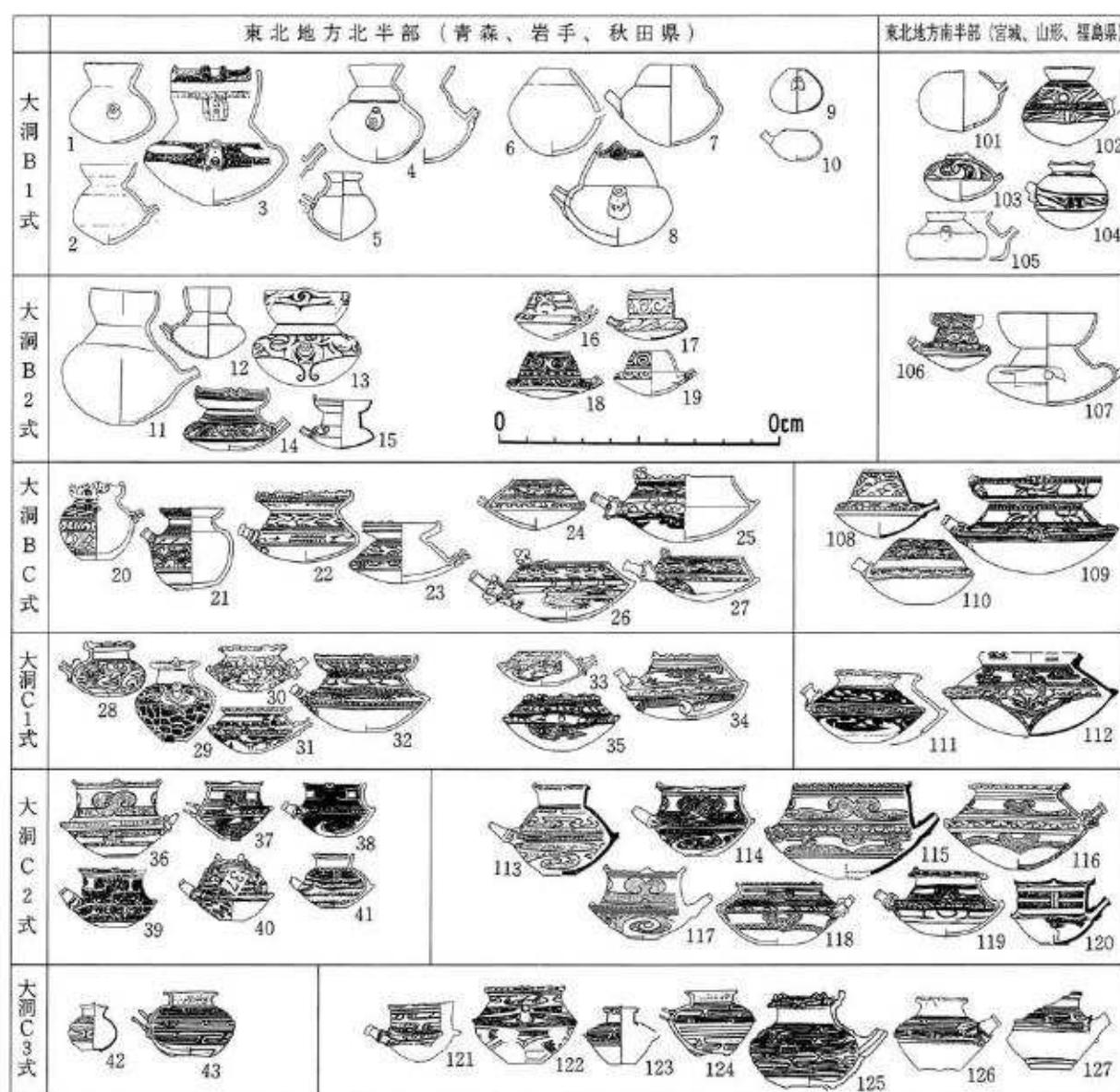


図23 東北地方晩期注口土器変遷図

- 山内 清男 1939 日本先史土器図譜
 山内 清男 1940 日本先史土器図譜
 中谷治宇二郎 1943 「日本考古学提要」
 後藤 守一 1943 「先史時代の考古学」
 八幡 一郎 1953 「日本史の黎明」
 移山寿栄男 1928 「日本原始工芸」
 甲野 勇 1953 「縄文土器のはなし」
 江坂 輝弥 1956 東北—各地の縄文式土器 日本考古学講座3
 吉田 格 1956 関東—各地の縄文式土器 日本考古学講座3
 江坂 輝弥 1957 「考古学ノート」2
 芹沢 長介 1960 「石器時代の日本」
 藤森 栄一、武藤雄六 1963 中期縄文土器の貯蔵形態について 考古学手帖20
 江坂 輝弥 1964 前期の土器 日本原始美術1
 磐崎 正彦 1964 後期の土器 日本原始美術1
 長岡市立科学博物館 1964 室谷洞窟
 後藤 守一 1965 衣・食・住 日本考古学講座3
 渡辺 誠 1965 勝坂式土器と亀ヶ岡式土器の様式構造 信濃17-2

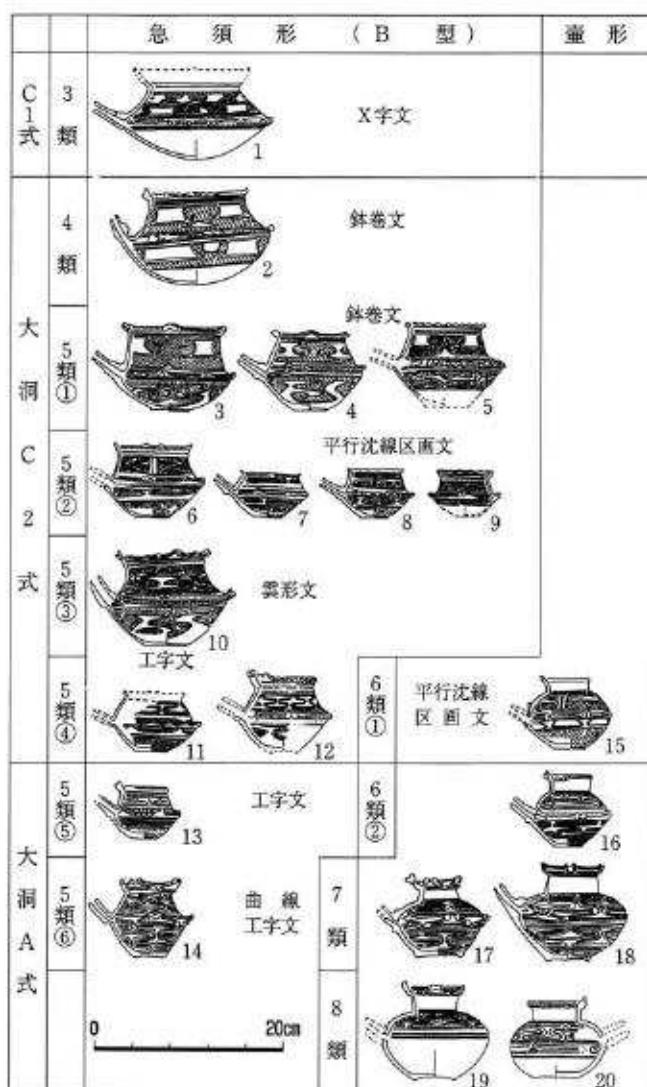
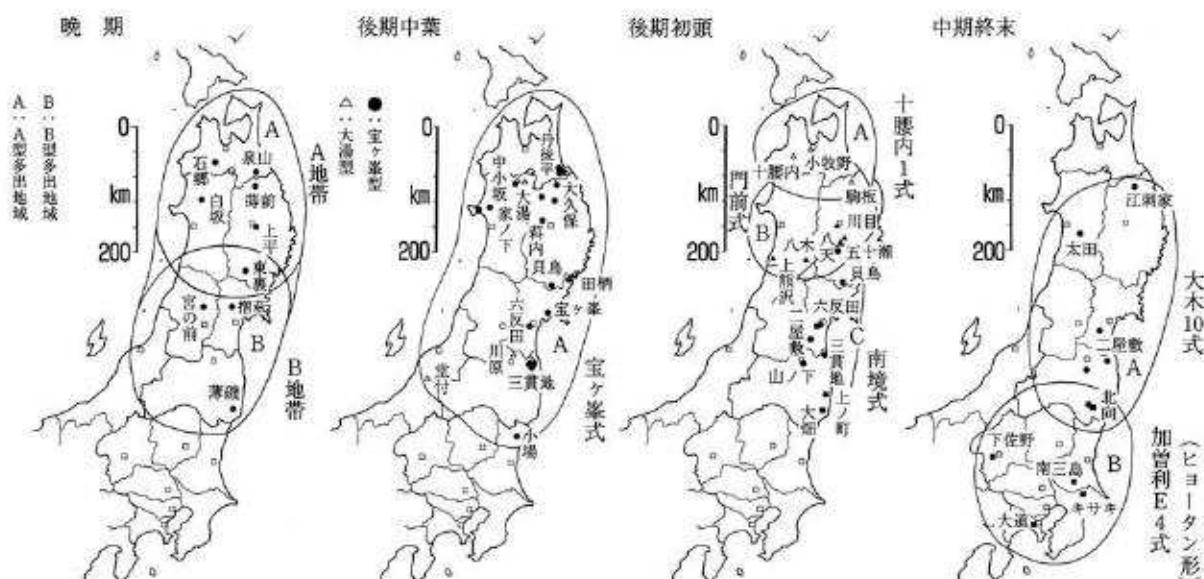
図24 藤村分類（大洞C₁～A式）

図25 注口土器類型分布図（分布図）

- 山内 清男 1967 『日本先史土器図譜』
- 江坂 輝弥 1967 『日本文化の起源』
- 馬目 順一 1968 台の上貝塚に於ける土器意匠文の研究 小名浜
- 江坂 輝弥 1972 学史上における中谷治宇二郎の業績 日本考古学選集24
- 丹羽 茂 1972 縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論 福島大学考古学研究会研究紀要1
- 藤村 東男 1972 東北地方における晩期縄文時代の注口土器について 史学44-2
- 八巻 一夫 1973 東北地方南部における縄文時代中期末葉の集落構成 福島考古14
- 藤村 東男 1977 晩期縄文式土器の器形組成 萌木12
- 藤村 東男 1980 東北地方における晩期縄文式土器の器形組成 史学50
- 小林 達雄 1981 縄文土器の用途と形 縄文土器大成2
- 岩手県立博物館 1982 岩手の土器
- 新井 和之 1982 黒浜式土器 縄文文化の研究3
- 安孫子昭二 1982 縄文時代後・晩期 「村山市史」
- 近藤 義郎、佐原 真 1983 『大森貝塚』(岩波文庫)
- 山梨県考古博物館 1984 縄文時代の酒道具
- 丹野 雅人 1985 注口土器小考 東京都埋蔵文化財センター研究論集3
- 宮城県教育委員会 1988 大梁川・小梁川遺跡
- 藤村 東男 1988 岩手県九年橋遺跡出土の注口土器について 萌木23
- 鈴木 一男 1989 神奈川県大磯町大磯小学校遺跡出土の注口土器 考古学雑誌74-3
- 池谷 信之 1990 納取・堀之内型注口土器 縄文時代1
- 猪方 勉 1991 熊本県大津町瀬田裏遺跡出土の縄文早期の注口土器 考古学雑誌77-1
- 西田 泰民 1992 縄文土瓶 古代学研究所研究紀要2
- 鈴木 徳雄 1992 縄文後期注口土器の成立 縄文時代3
- 須藤 隆 1992 東北地方における晩期縄文土器の成立過程 東北文化論のための先史学歴史学論集
- 大津町教育委員会 1992 瀬田裏遺跡調査報告 資料Ⅱ
- 大津町教育委員会 1993 瀬田裏遺跡調査報告Ⅱ
- 鈴木 克彦 1996 東北地方における十腰内式土器様式の編年的研究 考古学雑誌81-4
- 奥野 麦生 1996 関山式における片口土器の基礎的研究 埼葛地域文化研究
- 苦小牧市教育委員会 1996 静川5遺跡発掘調査概要報告書

青森県内における平安時代終末期の 竪穴住居跡の形態について

成田誠治

1 はじめに

青森県において平安時代の竪穴住居跡が発掘調査されたのは、昭和20年代からで、30年代には岩木山麓遺跡発掘調査や研究者による調査によって数が徐々に増える。48年からは、さらに調査数が増えるとともに以前より1遺跡の発掘面積が広くなり、より面的な調査が行われるようになる。時期も、ほぼ平安時代全期に及んでいる。

竪穴住居跡は、方形で内部に柱穴や壁下周溝を持ち、さらにカマドが構築されているものが基本的な形態である。しかし、同一集落内の竪穴住居跡においてカマドのないものや柱穴のないもの、あるいは壁下周溝のないもの、さらにはプランもくずれた方形のものが混在している。また、カマド形態や柱穴、壁下周溝形態に差違が見られることが明確になっている。

昭和51年に発掘調査された黒石市高館遺跡では、平安時代後期の竪穴住居跡が多数検出され、報告書ではその構造の諸要素について類別を試みている。しかし、その後この時期の資料がさらに増加したので、それらを比較検討してこの時期の竪穴住居構造を考察してみたい。

2 高館遺跡における竪穴住居跡の類別

昭和51年の発掘調査区域は、傾斜地であることと、畠地に造成する際削平されたために竪穴住居跡群の西側部分が不明瞭になっているものが多く見られた。このために報告書(1978年刊行)の類別は、推定によるところが多くみられる。しかし、この遺跡で多く検出された竪穴住居跡形態は、竪穴内部の柱穴が列を成していることであり、これがほかの遺跡と比較した場合特徴的な形態となっている。この特徴に着目して類別を試みている。

(1) 類別

報告書では、第I群から第IV群まで分け、第I群をA類・B類・C類に細分している。しかし再度検討し、ここでは次のように類別することとする。

第I群 柱の列(柱列)を持つもの

A類 壁下に柱列を持つ

 A類a 内部に溝があるもの

 A類b 内部に溝がないもの

B類 壁から少し離れた所に柱列があるもの

 B類a 内部に溝があるもの

 B類b 内部に溝がないもの

C類 竪穴内に柱列が2列あるもの

 C類a 内部に溝があるもの

 C類b 内部に溝がないもの

第II群 四隅とその中間に柱穴があるもの

第III群 四隅に柱穴があるもの

第IV群 竪穴内に柱穴がないもの

第V群 壁下に溝があるもの

A類 溝内に柱列があるもの

B類 溝が堅穴内を巡るもの

以上のはかに堅穴外に長い煙道を持つカマドの痕跡のある堅穴住居跡が2軒検出されたが、ほかの遺構に切られてごく1部しか確認できなかったので、この稿では類別しないこととする。

3 類似の住居跡が検出された遺跡

(1) 牡丹平南遺跡（黒石市）

昭和49年に東北縦貫自動車道建設区域内が発掘調査され、平安時代後期の堅穴住居跡が14軒検出された。これらの堅穴住居跡は、切り合いがなく、しかもある一定の間隔を保って配置されているので、同時期に存在したものと考えられ、1つの集落を形成していたものと推定される。これらの堅穴住居跡は、堅穴内の柱穴や溝の有無・位置などによって類別すると第Ⅲ群と第Ⅳ群に分けられるものがある。多少柱穴の数や位置に違いはみられるが第V群A類とB類に類似するものもある。

第Ⅲ群に分けられる堅穴住居跡は、2軒あり、どちらもカマドが構築されている。規模は、第1号が 21.2m^2 で第2号が 13m^2 である。柱穴が四隅だけでなく、1個多く造られているものが第5号で規模が 22m^2 である。これはこの遺跡のなかで4番目の大きさである。

第Ⅳ群に含まれるものは4軒あり、カマドが構築されているものが3軒、構築されていないものが1軒である。規模はカマドを持つ第11号が 4.4m^2 、第10号が 8.6m^2 、第4号が 11.9m^2 で、この遺跡のなかで小さい規模のものである。カマドを持たないものは、第12号で規模が 13.6m^2 とやや大きめである。

第V群A類にやや類似する堅穴住居跡は、第13号で壁下の溝は部分的に途切れており、1つの壁下溝には複数の柱穴がある。この住居跡の規模は、 24.5m^2 でこの遺跡のなかでは2番目である。第6号と第7号も第V群A類にやや類似している。

第1号は、規模が 30.8m^2 でこの遺跡の中で最大のものであるが、壁下には周溝が巡り、その内側に4本の主柱穴を持ち、しっかりした造りである。昭和51年に発掘調査された青森市三内遺跡のH-44号住居跡は、焼失家屋で炭化した板の残存が良好で周溝の構能が良く解かる住居跡であるが、これも牡丹平南遺跡の第1号と同様な構造である。ともに第V群B類に分けられるものと考えられる。

(2) 沖附(1) 遺跡（六ヶ所村）

尾駒沼の南岸沿いの丘に立地する遺跡で、昭和59年に埋もり切らないで窪みとして残存している堅穴とその周辺を発掘調査して、堅穴住居跡を37軒検出した。

堅穴住居跡群は、3ヶ所に分かれしており、中央区では7軒、西区では22軒、東区では8軒検出された。規模が 30m^2 以上の住居跡は、西区には4軒あるが、中央区と東区はない。中央区には規模が 20m^2 以上の住居跡が4軒あるが、東区では 20m^2 未満の住居跡である。

これらの住居跡群は溝の有無、柱穴の配列状況などで類別すると第Ⅳ群は、それぞれの区に1~2軒あり、第Ⅲ群は中央区と西区に1軒ずつある。第Ⅱ群に相当するものはない。

第V群A類に相当するものではなく、B類に相当するものは西区の第21号で周溝とその内側に4個の主柱穴がある。この第21号は、規模が 51.63m^2 でこの遺跡のなかで最大の堅穴住居跡で、堅穴の外側にはカマドが構築されている壁以外の三方を土塁が巡っている。西区の第15号も構造は第21号に類似しているが、第Ⅲ群のように四隅にも柱穴がある。また、第17号と第27号では、周溝が巡り四隅に柱穴を有するが内側に主柱穴を持たないものもある。第16号は、周溝が巡って二隅に柱穴があり内部に主柱穴がない。第25号は、周溝があり柱穴が不規則で、主柱穴がない。第26号は、1部を除き壁下に溝が巡り、堅穴内部に2個の柱穴があり規模が 43.63m^2 で、この遺跡のなかで2番目に大きいもので

ある。第19号と第33号は、カマドが構築されている壁を除いた三方の壁下に溝が巡っているもので、柱穴が検出されなかった竪穴住居跡である。

第23号は2方向の壁下に溝が検出され、その内側に複数の小ピットがあり、溝のない壁下にも小ピットが複数検出されている。規模は43.40m²でこの遺跡のなかでは3番目に大きい竪穴住居跡である。

このほかに、溝が断続的にあって所々に小ピットが検出されてい第2号、第4号、第13号、第24号、第32号、第35号のような例もみられている。また、溝がさらに部分的となっている第3号、第5号、第8号、第9号、第10号、第12号、第14号、第22号、第30号、第34号などの例もあり、これらは、小ピットが不規則にみられる竪穴住居跡で、それぞれの区から検出されている。

溝がなく小ピットが不規則に検出されたものは、第7号、第11号、第31号で、これらも各区に及んでいる。

以上のように、尾駒沼の中央部に突き出た部分に存在する西区の竪穴住居跡群が軒数も多く、規模の大きい住居跡があって、この地域の中心的なブロックと考えられている。形態的には、各ブロックとも相違するものを含んでおり、独立して存在するものではないと考えられる。そして高館遺跡で多数を占める第I群は、みられない。

(3) 発茶沢遺跡(六ヶ所村)

たかほこ鷹架沼の北岸に隣接する遺跡で、昭和54年・55年に発掘調査され、26軒の竪穴住居跡が検出された。

この遺跡で最大の規模を持つ竪穴住居跡は、第21号で約49m²である。その形態は、壁下に周溝が巡り四隅に小ピットがあって主柱穴が5個ある竪穴住居跡である。第1号は、主柱穴はないが、周溝と四隅の小ピットは第21号と同様である。これらは、第V群B類に含まれるものと思われる。これに類するものは、ほかに第2号、第3号、第4号、第12号、第13号、第18号、第23号などである。

第10号、第11号、第16号、第18号は、第V群A類と類似しているが、溝内の小ピットは列を成すほど多くはない。

柱穴が検出されない竪穴住居跡は、第5号、第7号、第15号、第19号、第20号で、これらは第IV群に類別できるものと考えられる。規模は、約6m²と約16m²のものである。

第6号、第14号、第24号、第25号は、部分的に溝が存在するもので、柱穴と思われる小ピットがあるものとないものがある。

第9号は、規模が約13.50m²で、竪穴内に壁に沿った状況でやや大きめのピットが5個検出されているが、これが柱穴だとすれば、この遺跡では新しい形態ではないかと思われる。

(4) 大平遺跡(大鰐町)

昭和52年と53年に発掘調査され縄文時代と平安時代の集落跡であることが分かった。標高132.5mから137.5mの丘陵斜面に平安時代の竪穴住居跡が50軒検出された。これらの住居跡は、第II群、第III群、第IV群、第V群に類別できる。第II群、第III群、第IV群に分けられる竪穴住居跡は、規模の小さいものである。

この遺跡では、周溝を持つ竪穴住居跡が多く、また焼失家屋も多く炭化した板が周溝の近辺から出土している。周溝を持つものは、20軒で、部分的に溝を持つものも含めると29軒となる。これらは、第V群に含めることができる。

第V群A類に類別できるものでは、H-21号竪穴住居跡のように周溝内に複数の小ピット(柱穴)があり、竪穴の内側に5個の主柱穴を持つものがある。この住居跡は、遺跡中央部分にあり規模が54.97m²で、検出されたなかで最大のものである。H-34号は、規模が小さい(13.23m²)がH-21号と同様な形態である。周溝内に複数の小ピットがあり、主柱穴を持たないものでは、H-25号(15.94m²)がある。

第V群B類では、H-20号が規模が大きく 51.54m^2 あり、5個の主柱穴を持っている。これと同類は、H-1号 (32.41m^2)、H-35号 (約 40m^2)、H-44号 (41.10m^2) である。

第V群B類に含まれるが、主柱穴を持っていないものは、H-12号 (20.98m^2) H-15号 (6.74m^2)、H-19号 (13.57m^2)、H-23号 (21.33m^2)、H-28号 (18.34m^2)、H-32号 (6.92m^2)、H-33号 (17.92m^2)、H-36号 (12.56m^2)、H-46号 (7.19m^2) である。このうち四隅に小ピット（柱穴）を持つものは、H-15号とH-28号である。

部分的に溝を持つものはH-41号 (19.80m^2) で、溝を持たない壁に沿って複数の柱穴と思われる小ピットがあり、さらに溝内にも複数の柱穴があるものである。これは第I群A類aに類別できる。

(5) 古館遺跡（碇ヶ跡村）

昭和52年と53年に発掘調査され、平安時代から中世にかけての遺構が多数検出された。発掘調査した区域は 館跡の1つの郭全域に及び遺構の切合が激しく柱穴の所属が明確にできなかった遺構もある。報告書（1980年刊行）によって類別すると次のようになるものと考えられる。

ア. カマドを有する遺構

第I群A類a : 7H

b : 35H、43H、46AH、51H

B類b : 4H、63H、65H

イ. カマドのない遺構

第I群A類a : 108

b : 42H、128H、47H

B類b : 16H

C類a : 103H

b : 1H

ウ. 高館と古館の第I群の比較

B類aは、古館ではみられず高館でも類例は少ない。切合関係では、A類bに切られC類bを切っている。このタイプは、他の遺跡でも現在のところ類例がみられず今後の研究課題であるが、高館ではC類bより新しくA類bより古いという時間的差違がみられる。

第I群のなかでA類bが他のタイプを切っているのでもっとも新しいタイプである。また、A類bのなかでも重複があり、短期間に消えるタイプではないようである。さらにこのタイプは、高館と古館のどちらにおいてもカマドを持つものと持たないものが検出されているが、これらが検出された地点は、別々であり同時併存の可能性もある。

カマドを持つものは、日常的に生活する所であり、カマドを持たないものは常時居ない建物あるいは何かを収納する建物という機能が考えられる。ただ、カマドを持つものでも工房的な機能を持つものではないかと考えられるものも見られる。

B類bは、高館では切合って検出された54Hと55Hだけで、どちらもカマドは検出されていない。しかし、54Hは、壁から離れたところにある柱列のほかに、その内側に4本の主柱穴が存在したような痕跡もみられる。また、55Hに切られている南壁にカマドが構築されていた可能性も考えられる。古館では、このようなタイプにカマドを持つものと持たないものがある。カマドを持つものでは、カマドが構築されている壁の柱列は、壁下あるいは壁に非常に近い所にある。カマドを持たないものも一方の壁下に柱列がみられる。

C類aは、2列の柱列と一方に溝を持つものであるが、溝の中に柱穴が並ぶタイプである。高館の82Hは、カマドを持つ住居跡であるが、壁下柱列の内側に溝があり、溝の中に柱穴が並んでいる。83Hは、

カマドを確認できなかったものであるが、柱穴の並びと溝の状況は類似するものである。

C類bは、高館ではカマドを持つ44Hのほか、カマドが検出されていない4Hと74Hがこのタイプである。古館では、豊穴を伴わない1Hの柱穴の並びがこのタイプに含まれる。

A類aは、高館の104H、103H、115H、56Hがこれに含まれる。この中でカマドが確認されているものが104Hである。56Hは、東壁直下に溝があり、南壁と北壁に柱列があり、西壁は55Hに切られているため不明である。このタイプでは、部分的に溝が認められるもので、古館の7Hも含めることができる。

(6) 大館森山遺跡(鶴ヶ沢町)

標高165mの独立丘陵に立地し、埋もり切らない豊穴が約30基確認され、岩木山麓遺跡発掘調査の一環として昭和35年に発掘調査された。この調査では、3軒の豊穴住居跡と丘陵を巡る2重の溝跡を確認している。

1号住居跡は、部分的な溝と溝に沿った柱穴の列及び溝のない壁下にも柱穴が並ぶタイプで第I群A類aに類別できるものである。

2号と4号住居跡は、同タイプで2列の柱穴の列が並ぶ部分がみられ第I群C類bに類別できるものである。この遺跡で検出された住居跡には、いずれも煙道の短いカマドが構築されている。規模とプランは、1号が 5.5×7.5 mの長方形、2号が南北7m・東西6.5mでほぼ方形プラン、4号が1辺8~8.2mでやや不整な方形プランである。

(7) 福島城鱗崎豊穴(市浦村)

福島城域内の鱗崎にある埋もり切らない豊穴群である。昭和30年に東北北部の館跡調査の一環として発掘調査された。この時に豊穴は、32基確認され、そのうち4基発掘された。調査の結果2基は井戸跡で、2基が豊穴住居跡であった。第1号住居跡は、壁下に柱穴の列が検出されカマドが構築され、豊穴外にはカマドのある壁以外の壁を土星が巡っているものである。この住居跡の豊穴内部の構造は、第I群A類bに類別できる。

(8) 永野遺跡(碇ヶ関村)

標高185m~190mの平坦な丘陵上にあって、昭和52年と53年に発掘調査された。調査の結果、縄文時代、平安時代、中世の複合遺跡であることが分かった。平安時代の豊穴住居跡は、24軒検出されたが、不明瞭になっているものが3軒ある。

沖附(1)・発茶沢・大平遺跡と同様に周溝を持つ豊穴住居跡が多く、14軒もある。周溝を持たないもので注目すべき住居跡は、第18号でカマドを持ち壁下に柱穴が多数並ぶものである。これは、第I群A類bに類別されるものである。第15号は、規模が $48.67 m^2$ でカマドを持ち、壁下に溝がなく複数の柱穴が並び、その内側に4個の柱穴がある住居跡である。この第15号も第I群A類bに類別される。

第1号・第7号・第11号・第17号は、周溝内に小ピット(柱穴)が多数並んでおり、第I群A類aに類別できる。

(9) 独孤遺跡(弘前市)

この遺跡は、農道建設のため昭和58・59年に発掘調査された。調査の結果、縄文土器も若干出土したが、多数を占める遺物・遺構は、平安時代のものである。

第203号豊穴遺構は、拡張された痕跡か、あるいは掘立建物跡との重複のためか、柱穴が豊穴内部にも多数検出されている。壁下には、壁に沿って柱穴が並んでおり第I群A類bに類別できる。

(10) 杉の沢遺跡(浪岡町)

標高約60mの丘陵地とその斜面に立地している。昭和52年に斜面が発掘調査され、縄文時代・弥生時代・平安時代・中世・近世の複合遺跡であることが分かった。

平安時代の豊穴住居跡は9軒検出されているが、周溝を持つものが多くみられた。周溝を持たないものは少しであるが、第1号は、南壁にカマドが構築され、北壁と西壁の壁に沿って小ピット（柱穴）が多数並んで検出された。第I群A類bに類別されるもので、ほかの住居跡とは形態が異なっている。

(11) 烏海山遺跡（平賀町）

遺跡は標高60～70mで、三方が小高い丘陵に囲まれた場所にあって、昭和50年に発掘調査された。調査の結果、平安時代の豊穴住居跡53軒、小豊穴遺構や鍛冶遺構及び溝跡などが検出され、集落遺跡であることが分かった。

豊穴住居跡は、周溝のあるものが多数を占め、周溝のないものは少ない。最大の規模のものは第19号で、約84m²あり主柱穴が2個とそれに対応する小ピットが2個豊穴内部にある。壁下には、溝が巡り、四隅に柱穴があって溝内にも複数の小ピットがある。

溝内に多数のピットが検出されたものには、第2号（約42m²）があり第V群A類に類別される。壁下には小ピット（柱穴）が多数検出されたものは、第17号（約25m²）で、これは第I群A類bに類別できるものである。

(12) 山本遺跡（浪岡町）

遺跡は、標高約30mの平垣地に所在し、その東端部分が昭和59年と60年に発掘調査された。調査の結果、平安時代の豊穴住居跡や土坑・溝・鍛冶関係遺構などが検出された。

豊穴住居跡は、22軒検出されたが、壁下に周溝のあるものが多くみられる。この周溝のあるものでも溝内に複数の柱穴を持つものもある。

壁下に周溝を持たないもののなかに、第33号と第9号のように壁下に複数の柱穴を持つものである。第I群A類bに類別できるものであるが、柱穴は方形で太いものである。

(13) 羽黒平遺跡（浪岡町）

遺跡は丘陵地の末端部にあり、その1部が昭和52年に発掘調査された。その結果、平安時代の豊穴住居跡68軒や鍛冶関係遺構などが検出された。

豊穴住居跡は、周溝を持つものが多く検出されているが、溝内及び溝の近辺に複数の柱穴を持つものも少数検出されている。また、周溝がなく、壁下に柱穴が列を成しているものも検出されている。

第10号は、四隅に柱穴を持ちさらにその間に5個ずつの長方形を呈する柱穴が配されている。また、豊穴内側に4個の主柱穴を持っている。第I群A類bに類別されるものである。柱穴の数は少ないが、第36号もこのタイプである。また、上面が削平されているため部分的に検出された第57号Bもこのタイプとみられる。

第34号Aは、北陸の東寄り部分から東壁と南壁の東寄り部分にかけて、壁下に溝を持ちそのなかに柱穴が検出されている。西壁と、南壁の西寄り部分には、溝がなく、壁下に柱穴が検出されている。第I群A類のaとbがミックスしたような形態である。この住居跡は、周溝を持つ第34号Bを削り、貼り床して構築されている。その新旧関係は、周溝を持つ豊穴住居跡が古く、柱列を持つものが新しいということを示している。

(14) 蓬田大館遺跡（蓬田村）

この遺跡は、中世の館跡として知られているものであるが、昭和59年・60年・61年に発掘調査され、中世の遺物・遺構のほかに、平安時代の遺物・遺構も検出された。

平安時代の豊穴住居跡では、周溝を持つものが多く検出されているが、第I群に類別できる住居跡も検出されている。

第3号住居跡は、全体を知り得る状況で検出されているが、カマドは構築されていない。やや南北に長い長方形プランである。第8号住居跡は、全面が検出されず、1/3ほど発掘調査されたものである。

これら第3号・第8号は、住穴の配列から第I群A類bに分けられる。これらの床面からは、擦文土器が出土している。

4 壺穴住居構造の変遷

(1) 壺穴住居と集落

平安時代後半期の集落において壺穴部の壁下に周溝が巡り、その内側にしっかりと主柱穴が構築されている壺穴住居跡は、ごく少数である。このような住居跡は沖附(1)遺跡では第21号、牡丹平南遺跡では第8号、発茶沢遺跡では第21号であり、その集落内で規模が最大である。このような住居跡は、集落内で中心的な地位を担っている者の家屋ではないかと考えられる。

大平遺跡では、周溝としっかりと主柱穴を持つ住居跡が8軒ありこのなかにはH-29号のように小規模のものも含まれているが、ほかの7軒は30m²以上の規模を持つものである。この遺跡では、最大の規模を持つ住居跡であるH-21号に注目したい。この住居跡は、壺穴の内側に大きな柱穴を持つほかに四隅にも柱穴があり、さらに周溝内にも小ピット(柱穴)を持つタイプである。沖附(1)遺跡や牡丹平南遺跡や発茶沢遺跡でもこのようなタイプはみられるが、トップクラスの住居跡ではない。大平遺跡のH-21号では、壺穴住居の上屋構造に新しい要素が加わったもので、このような新しいタイプの住居が集落内でのトップに及ぶということは、建築技術の移入というだけでなく、集団的移住によるものではないかと考えられる。

永野遺跡では、トップクラスの住居跡がほとんど新しいタイプである。さらに壁下に柱列を持つ住居跡がナンバー2に入り込んでいる。さらに、浪岡町に所在する山本遺跡や羽黒平遺跡では、柱列を成す柱穴の形状が方形や長方形を呈するようになりさらに新しい要素が加わってくる。

高館遺跡と古館遺跡は、中世の館跡であり、また平安時代にあってもその地形的要素から軍事的集落で、一般集落とかなり性格が異なるものであり、いち早く新しいタイプの壺穴住居(第I群)が入り込む可能性が高いものといえる。このことは住居構造だけでなく、遺物においても、関東地方に多くみられる羽釜や舶来陶磁器破片が住居跡内から出土していることでも理解できるものである。

大館森山遺跡は、要塞的な性格の集落であり、福島城鰐崎壺穴群は十三湊に臨む場所で交易の要衝に立地している。これら遺跡も他地域からの生活様式が入り込む条件を充分備えている。

また、蓬田大館遺跡において第I群に類別される住居跡床面から擦文土器が出土していることは、今後さらに検討すべき課題である。

(2) 年代

年代の推定は、住居跡内から出土した遺物によってなされているが、もう1つの方法として、陶磁器の製作年代によってもおおよその推定はできる。

沖附(1)遺跡の第34号壺穴住居覆土から出土した灰釉陶器は、折戸53号様式で10世紀前半に製作されたものと推定されている。床面からの出土ではないので、この住居跡が廃絶した後に灰釉陶器が入り込んだものであり、住居跡は10世紀前半には使用されなくなっていたものと考えられる。出土した灰釉陶器破片は、硯として再利用されている痕跡があることから第34号壺穴住居跡が使用されなくなつてからも、この集落が存続していたと考えられる。この遺跡で最大の規模を持つ第21号壺穴住居跡の壺穴部の外側に土塁が巡っているが、この土塁が構築される前の地表面に10世紀前半に降下した白頭山火山灰が検出された。このためこの住居跡はほぼ10世紀前半に構築され、カマドの造り替えも行っているのでかなりの期間使用されていたものと考えられる。

高館遺跡では、第20号壺穴住居跡のカマドに付随するピット底面から出土した青白磁小皿破片が年代を推定する資料として重要である。この小皿は影青ひやうせいと呼ばれ、11世紀から12世紀前半に中国で製作

されたものであると推定されている。浪岡町史編纂室の工藤清泰氏によると、この小皿は、口縁形態は平泉出土のものと同じであるが、平泉出土のものは厚ぼったいのに対して高館遺跡出土のものは薄くて非常に良く作られた製品であるという。このような良質のものは、出土例が少なく、高館にもたらされた経緯については、現在のところ知り得ない。このように脈絡がなく、他地域の物が入り込むこと、新タイプの竪穴住居跡が主体となる遺跡が出現することが符合しているようにも考えられる。ここでは、仮説として柱列を持つ竪穴住居跡・この稿では第Ⅰ群として分類したものは、10世紀後半あたりに本県内に出現し、11世紀から12世紀にかけて主体とする遺跡が増えてくるというようにとらえておきたい。

5 おわりに

平安時代の竪穴住居は、形態こそ異なるが縄文時代からの伝統を引くもので、日本列島内では非常に長い間、人々の居住形態であった。八戸工業大学の高島成侑教授によると、近世の庄屋でも竪穴住居であったことが知られているという。中世には竪穴形態の建築物は、工房あるいは収納庫に限られていると考えていたが、振り返ってみると調査されている場所は、館跡など特別な集落が多いことに気付く。住居形態の変遷は、まだまだ研究課題が多い。特に平安時代から中世にかけての東北北部の状況は複雑であり、北方との関わり合いと南方からの急激な文化の浸透が住居形態にも直接的に反映している。

土師器や須恵器についてもその形態的な比較を行うことは重要であり、今後各集落ごとに比較研究することが必要とされる。

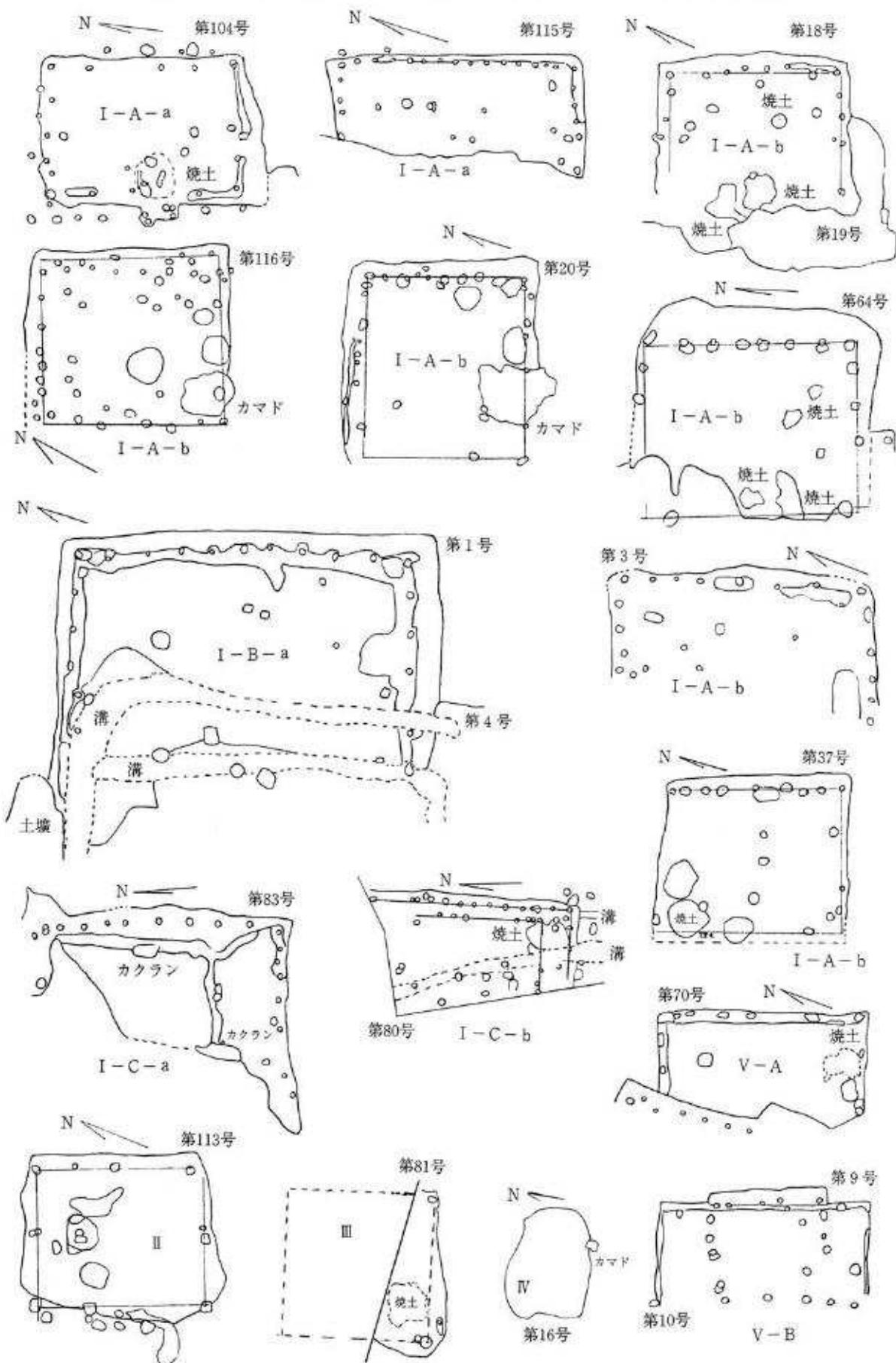
高館遺跡や古館遺跡が発掘調査されてから壁下に柱列を持つ竪穴住居について注目はされていたが、同様な遺跡が発掘調査されないため研究は休止状態であった。近年浪岡町の高屋敷館跡が発掘調査され、土壘と堀に囲まれた集落は、全国的に注目されることとなった。この遺跡と同様の住居構造を持つ高館遺跡の住居跡分類を補足する必要性が強くなったため、まとめてみた。再考してみて、さらにこの時期について研究を進める必要性を強く感じた。

最後に、この稿をまとめるにあたり御教示を頂いた八戸工業大学教授高島成侑氏、浪岡町史編纂室主査工藤清泰氏に対して感謝致します。

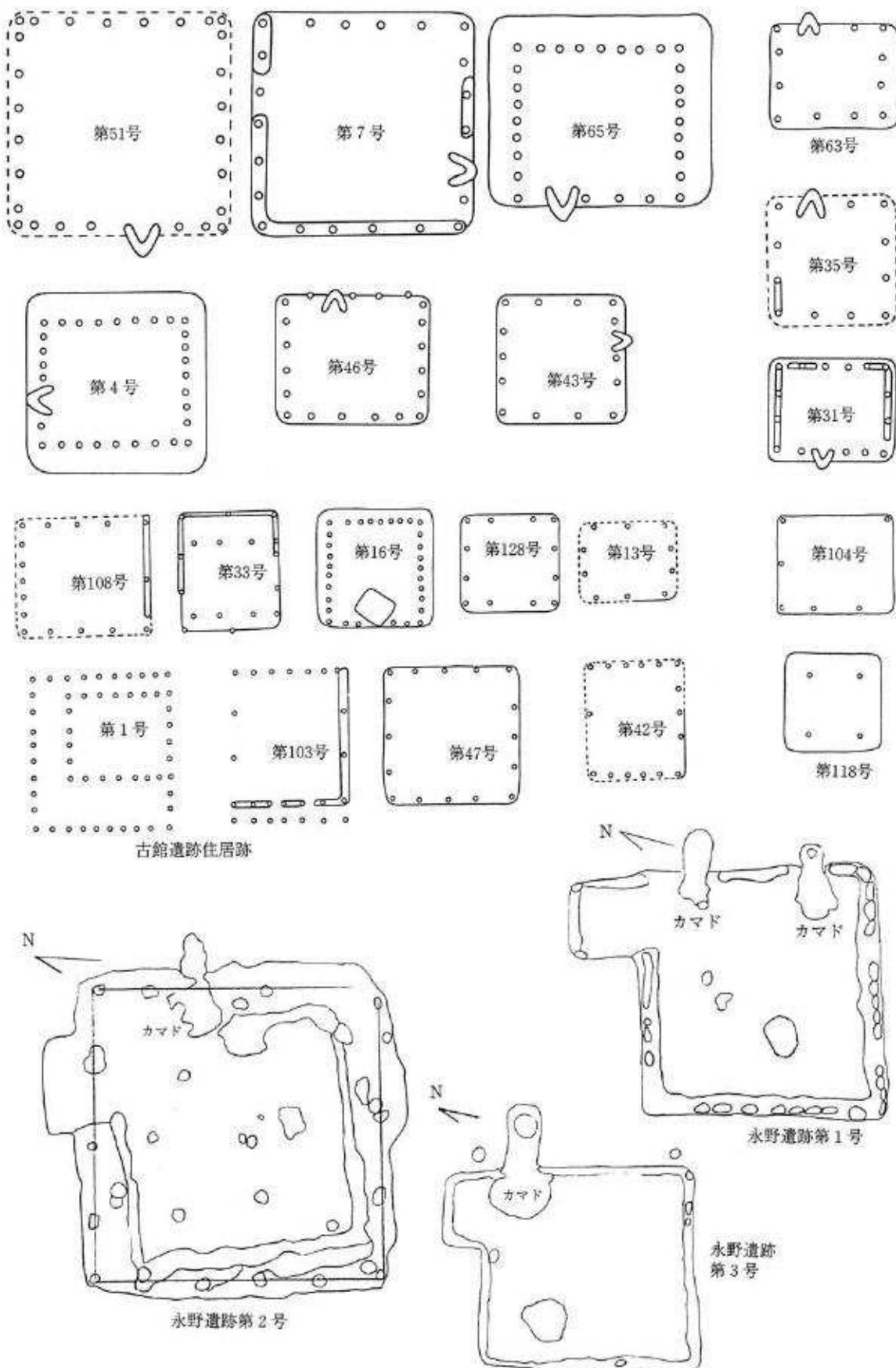
参考文献

- 西村正衛・桜井清彦・玉口時雄 1952 「青森県森田村附近の遺跡調査報告」『古代』第5号
- 江坂輝彌 1953 「尻屋崎付近の土師器、須恵器出土の貝塚」日本考古学協会第11回総会研究発表要旨
- 江坂輝彌 1953 「青森県下北半島稻荷遺跡調査報告」『古代12号』
- 西村正衛・桜井清彦 1953 「青森県十三村中島発見の土師器」『考古学雑誌』40巻1号
- 桜井清彦 1955 「青森県相内村赤坂遺跡について」『古代17号』
- 桜井清彦 1956 「青森県森田村発見の鉄斧」『貝塚』第51号
- 斎藤 忠 1956 「蝦夷の文化とアイヌの文化」『蝦夷』
- 桜井清彦 1957 「青森県西津軽八重菊竪穴住居址（第2次）」『日本考古学年報』
- 桜井清彦 1985 「青森県市浦村岩井遺跡」『日本考古学年報』7
- 桜井清彦 1985 「青森県市浦村赤坂遺跡」『日本考古学年報』7
- 江上波夫・関野雄・桜井清彦 1958 「青森県北津軽郡市浦村相内福島城址」『館址』所収
- 桜井清彦 1958 「東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』所収
- 江坂輝彌 1958 「先史時代における奥羽地方北部と北海道地方の文化交流の研究」『民俗学研究』第26巻第1号
- 橋 善光 1965 「下北半島の歴史考古学」『東奥文化』第30号
- 音喜多富寿 1965 「八戸市新田市子林遺跡調査報告書」八戸市教育委員会
- 平山久夫 1967 「津軽平野における土師器の低地遺跡」『考古学ジャーナル』No13
- 橋 善光 1967 「下北半島尻屋大平貝塚－本州東北端部における歴史時代漁労集落」『考古学ジャーナル』No15
- 斎藤 忠・岩崎卓也 1968 「大館森山遺跡」『岩木山』所収

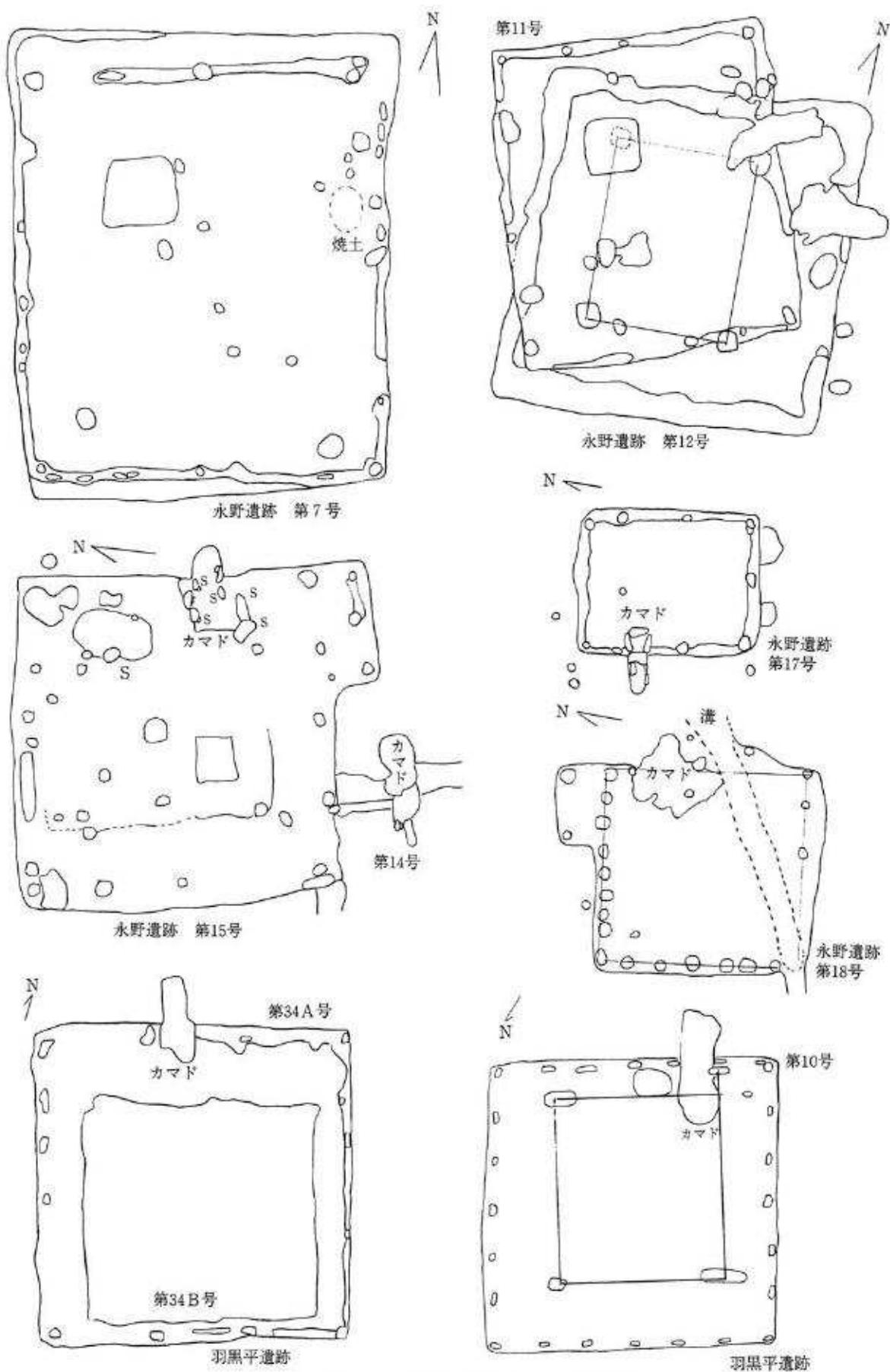
- 渡辺兼庸 1968 「常盤野遺跡」『岩木山』所収
 村越潔 1968 「浮橋貝塚」『岩木山』所収
 村越潔 1968 「外馬屋遺跡」『岩木山』所収
 村越潔 1968 「若山遺跡」『岩木山』所収
 平山久夫 1968 「津軽平野の土師器低地遺跡について」『うとう』第70号
 村越潔 1968 「津軽地方の考古学」『うとう』第70号
 江坂輝彌 1968 「青森県の東部と西部」『うとう』第70号
 岡本勇 1968 「青森県六ヶ所村平沼字追館遺跡」『日本考古学年報』16
 桜井清彦 1968 「東北地方の擦文文化について」『北奥古代文化』創刊号
 坂説秀一 1968 「前田野目窯跡調査概要」五所川原市教育委員会
 坂説秀一 1968 「北限の恵須器窯跡」『考古学ジャーナル』No21
 桜井清彦・菊池徹夫編 1987 「蓬田大館遺跡」
 青森県教育委員会 1975 「富山遺跡・永泉寺跡発掘調査報告書」
 青森県教育委員会 1975 「近野遺跡発掘調査報告書(1)」
 青森県教育委員会 1976 「黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡発掘調査報告書」
 青森県教育委員会 1977 「鳥海山遺跡発掘調査報告書」
 青森県教育委員会 1977 「青森市三内遺跡」
 青森県教育委員会 1977 「源常平遺跡発掘調査報告書」
 青森県教育委員会 1977 「黒石市高館遺跡発掘調査報告書」
 青森県教育委員会 1979 「羽黒平遺跡」
 青森県教育委員会 1979 「杉の沢遺跡」
 青森県教育委員会 1979 「松元遺跡発掘調査報告書」
 青森県教育委員会 1979 「近野遺跡」
 青森県教育委員会 1980 「大鰐町砂沢平遺跡」
 青森県教育委員会 1980 「碇ヶ関村古館遺跡」
 青森県教育委員会 1980 「永野遺跡発掘調査報告書」
 青森県教育委員会 1980 「板留(2)遺跡発掘調査報告書」
 青森県教育委員会 1981 「野辺地町明前遺跡」
 青森県教育委員会 1982 「発茶沢遺跡」
 青森県教育委員会 1983 「鶴窪遺跡」
 青森県教育委員会 1984 「朝日山遺跡」
 青森県教育委員会 1985 「表館遺跡II」
 青森県教育委員会 1985 「売場遺跡発掘調査報告書・大タルミ遺跡発掘調査報告書」
 青森県教育委員会 1986 「沖附(1)遺跡」
 青森県教育委員会 1987 「山本遺跡」
 青森県教育委員会 1988 「小田内沼(1)遺跡」
 青森県教育委員会 1988 「李平下安原遺跡」
 青森県教育委員会 1988 「発茶沢(1)遺跡」
 青森県教育委員会 1989 「表館(1)遺跡III・「発茶沢(1)遺跡IV」
 青森県教育委員会 1990 「李沢遺跡」
 青森県教育委員会 1991 「中野平遺跡・向山遺跡」
 青森県教育委員会 1994 「山元(3)遺跡」
 青森県教育委員会 1994 「久米川遺跡」
 青森県教育委員会 1995 「山元(2)遺跡」
 青森県教育委員会 1995 「野尻(2)遺跡」
 青森県教育委員会 1996 「野尻(2)・(3)・(4)遺跡」



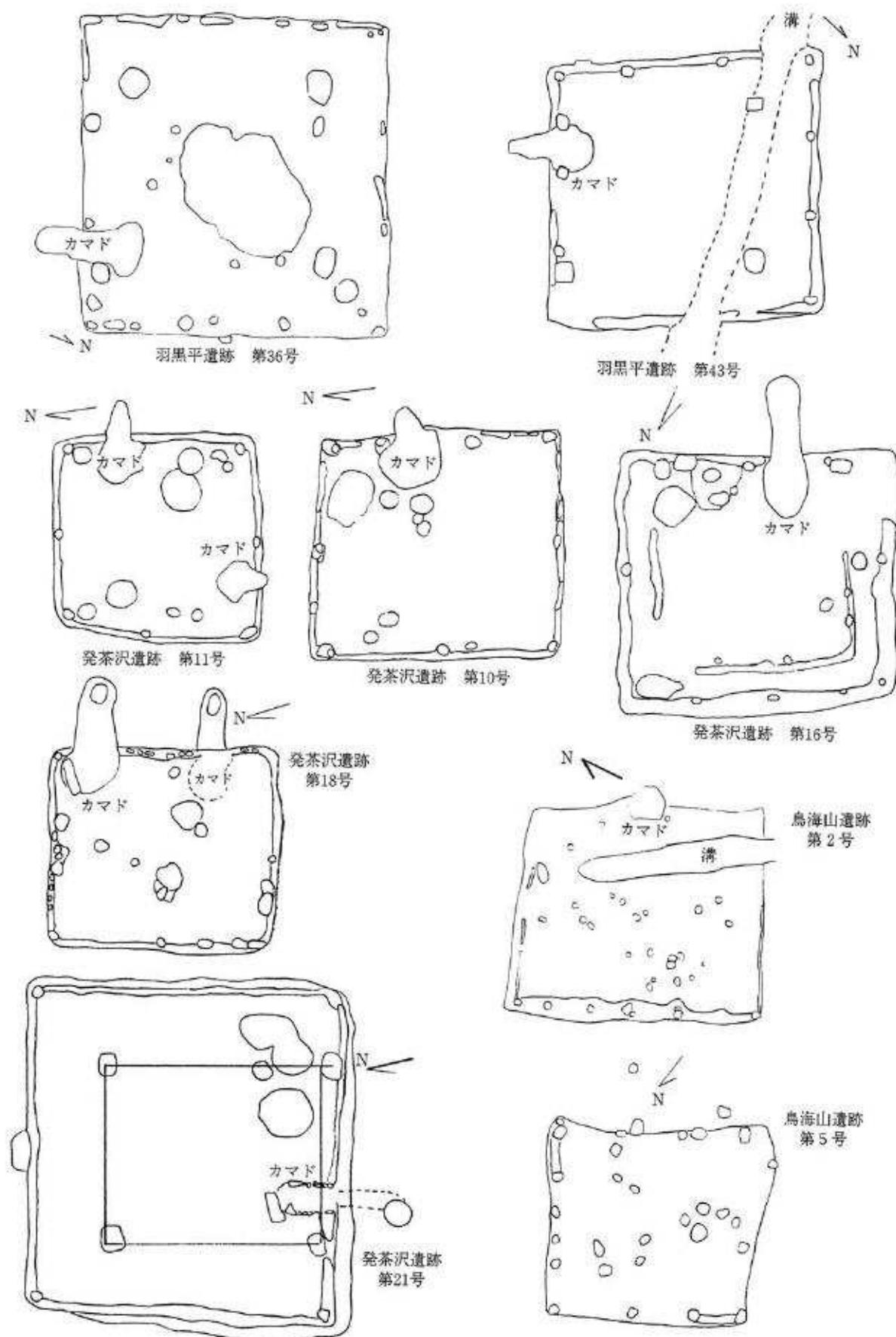
第1図 高館遺跡竪穴住居跡分類模式図

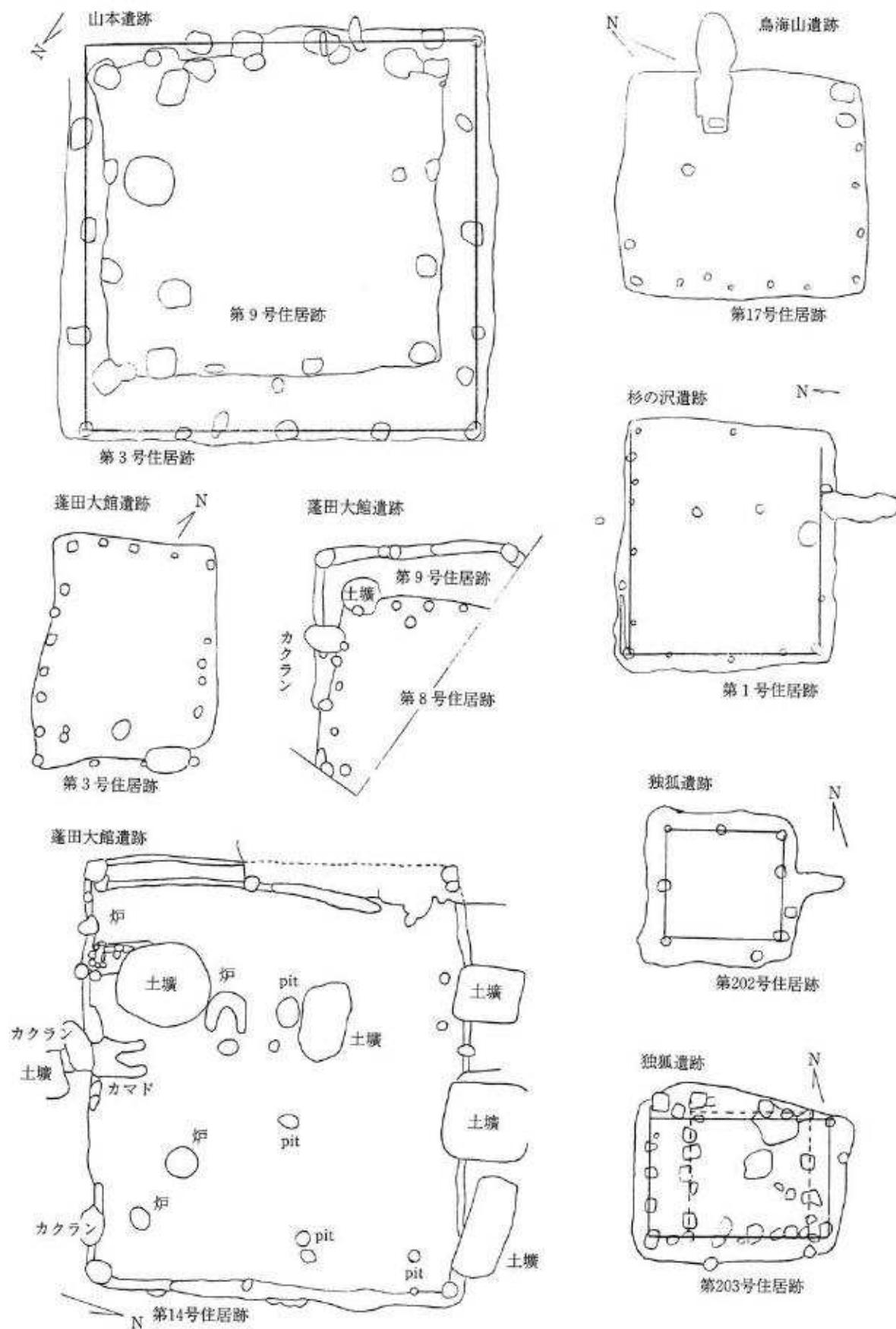


第2図 古館・永野遺跡住居跡模式図



第3図 水野・羽黒平遺跡竪穴住居跡模式図

第4図 羽黒平・発茶沢・鳥海山遺跡
竪穴住居跡模式図



第5図 山本・鳥海山・杉の沢・蓬田大館・独孤
遺跡の遺構模式図

青森県内の平安時代の火山灰について

中嶋友文

1 はじめに

考古学資料が整理され、その新旧関係がいかに詳細に組み立てられても、それは相対的な年代を示すもので、暦年代、絶対年代を明らかにするものではない。そのため考古学資料から暦年代もしくはそれに近い年代を測る方法によって、実年代に接近しなければならない。その方法として、文献から調べる方法と理科学的手法による年代測定がある。

年代測定には、放射性炭素法を用いる場合が多いが、その他にカリウム・アルゴン法、フィッショング・トラック法、熱ルミネッセンス法、熱残留磁気法、年輪年代測定法など様々な方法がある。それらの中で、遺構内に堆積した火山灰を蛍光X線分析や火山ガラスの屈折率などから噴出源を同定し、文献などの資料を参考に、その火山灰の降下時期を決定し、考古学編年上の示準層とするのも一つの方法である。

青森県内でも、近年数多くの遺跡の発掘調査が行われ、縄文時代や弥生時代の土器だけでなく平安時代の土師器・須恵器の編年も行われているが、相対的類型の序列が試みられているのが現状であり、それらに対して実年代は与えられていない。さらに、これらの問題を考える上で重要なことは考古学の立場では土器の相対的編年を確立することを含め、それらに文献及び理化学的手法によって実年代を与えることであるが、その条件が揃うことは、希である。

しかし、県内には平安時代に降下した2種類の火山灰が存在し、その問題を考えるための有利な条件があると言える。しかも、最近の発掘調査における成果として、平安時代の2種類の降下火山灰のうち下位層に存在する火山灰は十和田a火山灰、上位層に存在するものは白頭山-苦小牧火山灰とする点において一致しており、その年代も十和田a火山灰は915年7月（注1）、白頭山-苦小牧火山灰は923-938年の冬期（注2）とする具体的な考察も行われている。

そこで、この両火山灰の中間に位置する土器を確認すれば、降下火山灰との関係において示準的な資料を得ることができると考えたが、両火山灰の降下時期の幅が8年から23年と短いため、これらの火山灰の上位と下位に位置づけられる土器（類型）を把握することにより、それ以前、以後のどちらかの年代を概ねとらえることができると考え、近年の県内発掘事例からこれらに相当する最も良好な土器の資料化を図って見ようと思う。

以下、降下火山灰を白頭山-苦小牧火山灰は白頭山あるいはB-Tm、十和田a火山灰は、十和田aまたはT o-aと記載する。

2 降下火山灰と遺構・遺物の関係

（1）発掘による降下火山灰

表1は、青森県内で発掘調査において出土した火山灰をなんらかの方法で分析した遺跡を集成したものである。今後遺跡の発掘が進めばこの数はさらに増えると思われる。

県内の報告書の記載では、松山（1975）が「十和田a火山灰層は、やや粘土化した木灰状の灰白色ないし黄灰色シルト状火山灰で、十和田湖近傍では火山岩の小片を含む粗粒浮石を下に伴っている。十和田湖周辺から上北地方中部一帯に分布するが、国道4号線周辺より東側の地域ではほとんど見られ

ない。しかし、八戸付近や名川町付近あるいは三戸町や岩手県二戸市付近でもごく断片的に存在する。「～」と記述してあるが、白頭山については触れておらず、十和田aと別の火山灰（白頭山）の存在が認識されるのは羽黒平遺跡の発掘調査以降からである。

沢田（1979）が、羽黒平遺跡及び近野遺跡で認められた2枚の火山灰を重鉱物組成などから比較検討し、上位層の黄褐色火山灰については、不明であるが、下位層の白色・青白色火山灰が十和田aであるとしている。その後、三辻（1981）により、山崎遺跡出土の火山灰を蛍光X線による分析を行ったが、分析試料の比較材料が少ないため、どこのものか不明としている。その後、町田（1983）が、朝日山遺跡の竪穴住居跡から出土した火山灰（黄灰白色）を重鉱物組成および火山ガラスの屈折率の違いから分析し、白頭山であるとした。十和田aの降下時期より若干新しい時期のものとし、北海道南部から東北地方北部（青森県・秋田県・岩手県）にかけて分布しているとしている。これ以後、蛍光X線分析でA群の領域の試料は白頭山に対応するとしている。蛍光X線以外の分析では、松山（1989）が、下田町で採取した白頭山と十和田aを顕微鏡写真で比較している他は、塩原（1990）が、中野平遺跡出土の火山灰（白頭山・十和田a）を火山ガラスの形態によって分析しているだけで、1991年以降は、蛍光X線分析によるものがほとんどである。

図1は、青森県内の発掘調査において出土した平安時代に降下した白頭山と十和田aと同定された遺跡の分布図である。また、図2は、白頭山と十和田aの発掘調査で確認された遺跡の分布範囲図である。それによると、白頭山は、青森県内のほぼ全域に分布しており、北は、北海道帯広市から札幌市、瀬棚町、奥尻町、南は、秋田県能代市から大館市、鹿角市、岩手県一戸市、久慈市まで分布が遺跡内で確認されている。一方、十和田aは、県内の六ヶ所村、野辺地町、青森市、浪岡町、尾上町、碇ヶ関村を結ぶラインより東側に分布し、そのラインは、秋田県大館市、秋田市、山形県鶴岡市、山形市、福島県福島市までの範囲に火山灰が遺跡内で確認されている。

（2）白頭山と十和田aの分析方法及びデータ

遺跡から出土した火山灰の分析には、いくつかの方法があり、現在もっとも多く利用されているものは蛍光X線分析である。その他に火山灰中に含まれる重鉱物成分比からの同定、火山ガラスの屈折率からの同定などが行われている。それらについて簡単に記述する。

蛍光X線分析は、火山灰中の主成分鉱物は石英、長石、雲母であり、その主成分元素としてRb、Sr、K、Ca、Feを含み、火山灰中のそれらの量を比べることで、火山灰を同定する方法であり、最近、Rb-Sr、K-Ca、Feの分析値の他に、Zr量やNa因子が汚染や風化に関係あるとしている。

重鉱物分析は、火山灰中に含まれる重鉱物組成の成分比の分析で、おもにシソ輝石、普通輝石、角閃石など割合を三角図に表し、その領域から同定するものである。

火山ガラスの屈折率の分析は、火山灰中に含まれる火山ガラスの屈折率の違いから同定するもので、テフラの研究では一般的に用いられている。

火山ガラスの形態分析は、火山灰中の火山ガラスを取り出し、その形態を平板状、x-y状、繊維状、スポンジ状に分類し、平板状とx-y状をバブル型、繊維状とスポンジ状を軽石型として分類し、その割合から火山灰の特徴を分析している。

顕微鏡写真による比較観察は、試料を洗浄し、フルイ分けを行い顕微鏡により、円磨度や有色鉱物の粒度などを肉眼観察するものである。

以上の分析結果から、白頭山と十和田a（注3）の違いを表記してみると次のようになる（表2）。

火山ガラスの形態や、顕微鏡による写真観察から、白頭山に比べ十和田aは粗粒であり、火山ガラスより比重が大きい斑晶鉱物が多いことから、給源火山から遠く飛来することは少ないと考えられ、

このことは、顕微鏡写真による比較観察でも、十和田aが比重の大きい有色鉱物（シソ輝石）の散らばりが目立つことから、給源火山から遠く飛来することは少ないと一致する。

つまり、遠く離れた朝鮮半島から来た白頭山と噴火源に近い十和田aとの区別は色調やその粒径（手触り）から容易であるが、汚染や風化が進んだものや噴出源から遠い地域のものは両者の区別が難しいため、理科学的手法による同定が最良の手段と言える。

（3）火山灰の堆積状況および出土土器

県内の遺跡で住居跡内に降下火山灰（白頭山・十和田a）の堆積が確認（分析）された東通村アイヌ野遺跡、青森市三内遺跡、下田町中野平遺跡、浪岡町山元（2）遺跡、山元（3）遺跡の堆積状況と出土土器について比較検討してみる。（注4）

まず、住居跡の覆土中に火山灰が堆積するケースとして、次のような場合が考えられる。

- ①覆土中に十和田aとその上位に白頭山が堆積する
- ②床面に十和田aのみ、または、その上位に白頭山が堆積する（注5）
- ③床面に白頭山が堆積する
- ④覆土中に白頭山か十和田aのみが堆積する（注6）

それぞれ住居跡の堆積状況を①から④に分類し、それらから出土した土器（土師器・須恵器）を図示する。（図3～図7）

①覆土中に十和田aとその上位に白頭山が堆積する住居跡

中野平遺跡 第8号住居跡

床面からやや上層に十和田aと白頭山が堆積しており、出土土器は、平底及び回転糸切り技法で、内外面をロクロによる調整のみの壺、甕はナデやケズリを用いたもの、ロクロ調整のみのもの、ロクロ調整後下半部にヘラケズリを用いたものなどが出土している。

中野平遺跡 第42号住居跡

覆土上層に十和田aと白頭山が堆積しており、出土土器は、平底及び回転糸切り技法で、内外面をロクロによる調整のみの杯とナデやケズリを用いた甕が床面から、カマドからはロクロ調整にのみの壺や甕の他に、タタキ目を持つ土師器（「北陸型」土師器）が出土している。

②床面に十和田aのみ、または、十和田aとその上位に白頭山が堆積している住居跡

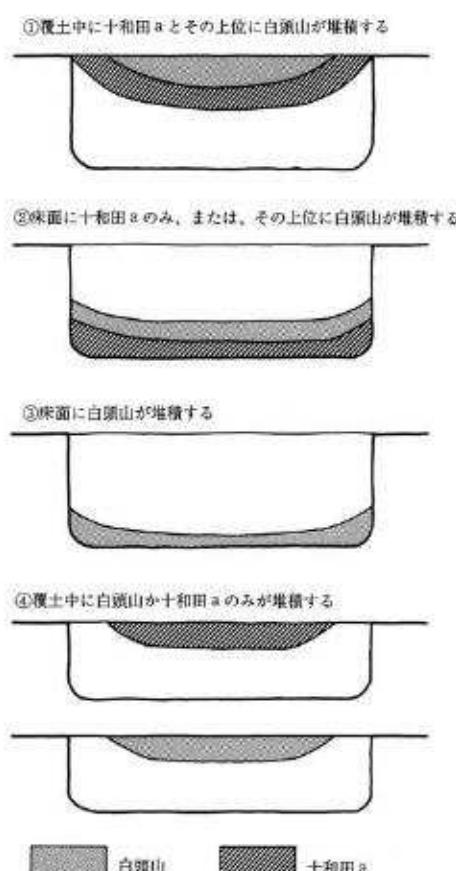
三内遺跡 第44号住居跡

床面に青灰色シルト層（十和田a）が記述されているだけであるが土層注記の降下火山灰の上位層に黄色火山灰混入との記載があり、これが白頭山と考えられこの部類にした。出土土器は、壺が内外面をロクロ調整のみ、甕がナデやヘラナデを用いており、須恵器の長頸甕（底部に菊花紋や、底辺部に粘土紐による高台）やタタキにより調整された大甕が床面に埋設され、カマドの支脚として口縁部がやや広がるロクロ調整の壺が出土している。

中野平遺跡 第45号住居跡

上部が削平されているが床面から十和田aが確認されている。

出土した土器は、平底及び回転糸切り技法で、外面はロクロ調整、内面はヘラミガキによる黒色処



模式図

理を施した壺が出土している。

③床面に白頭山が堆積している住居跡

アイヌ野遺跡 第2号住居跡

基本層序第Ⅱ層中に灰黄色の降下火山灰（分析では白頭山）が薄く堆積し、住居跡の壁際に帶状に分布している。出土土器は、床面から内外面をロクロ調整のみの壺、指ナデやヘラナデを用いた甕、底面に菊花紋をもつ須恵器の長頸壺や壺、カマドから平底で底辺部をヘラケズリ、外面をロクロ調整後内面を黒色処理を施した壺やロクロを用いずナデやミガキによる壺、ケズリやナデを用いた甕が出土している。また、3層（火山灰上位）から壠が出土している。

中野平遺跡 第52号住居跡

壁際を除く床面に白頭山が堆積しており、出土土器は、床面から平底及び回転糸切り技法で、外側はロクロ調整、内側はヘラミガキによる黒色処理を施した壺と、カマドと床面からナデやケズリを用いた甕が出土している。

山元（3）遺跡 第5号住居跡

床面の中央部を除いた覆土中に白頭山が混入しており、出土土器は、床面からナデやケズリを用いた甕、平底で回転糸切り、内外面をロクロ調整のみの壺が多くみられ、内側を黒色処理した壺と高台付皿も出土している。

山元（3）遺跡 第6号住居跡

壁際を除いた床面に白頭山が堆積しており、床面からは、平底で回転糸切り、内外面をロクロ及びカキメ調整した壺が、また、床下から外側をロクロ調整、内側をヘラミガキによる黒色処理を施した壺と須恵器の長頸壺、床直からナデやケズリを用いた球胴甕や壠が出土している。

山元（3）遺跡 第15号住居跡

壁際を除いた床面に白頭山が堆積しており、床面から底面が平底で回転糸切り、内外面をロクロ調整のみの壺と皿、カマドから壠とナデやケズリを用いた甕、須恵器の甕が出土している。またカマドから外側にカキメを用いた壺も出土している。

山元（3）遺跡 第28号住居跡

壁際を除いた床面に白頭山が堆積しており、床面から平底で回転糸切り、内外面ともロクロ調整の壺、内外面をロクロ調整後外側下部にヘラケズリを施した甕、須恵器の短頸壺、ピット内からもタタキ目もつ甕や壺が出土している。

④覆土中に白頭山か十和田aが堆積する住居跡（二次堆積の例）

中野平遺跡 第34号住居跡

覆土上層の2層・3層に白頭山が堆積しており、出土土器として、床面からロクロ不使用の甕が出土し、火山灰層中に10点以上の壺が出土しており、火山灰層上部には平底で回転糸切り、ロクロ調整のみものと内側を黒色処理を施したもののが、下部には底部が回転糸切りやヘラケズリ、内側を黒色処理のものである。また、ロクロ調整し下半部をナデやケズリを用いた甕も火山灰層中から出土している。

山元（2）遺跡 第10号住居跡

覆土第1層に白頭山が堆積しており、カマドから平底でヘラケズリ、外側はロクロ調整、内側を黒色処理を施した壺とロクロ調整のみの壺が、床直から鍋とナデやケズリを用いた甕、覆土から口縁部がやや外反する皿や須恵器の壺が出土している。

（4）降下火山灰前後の土器の様相

堆積状況を時期的にみて、火山灰が流水などによって遺構内に流れ込むなどの二次堆積が考えられ

る④を除外する（注7）と①→②→③の順になり、①は十和田a降下以前、②は十和田a降下直後、③は十和田aから白頭山降下直後の時期が与えられる。

それらから考えて、出土土器について述べてみる。

十和田a降下以前の土器としては、坏がロクロ調整のみのものがほとんどであり、甕はロクロ調整のみとナデやケズリを用いたものが出土しており、特殊な例として中野平遺跡第8号住居跡から出土しているタタキ目のある甕は、「北陸型」土師器（注8）と呼ばれ県内での出土例が少ないものである。その他に、須恵器の坏も出土している。

次に、十和田a降下直後の土器であるが、ロクロ調整のみの坏と内面に黒色処理を施した坏、ナデやケズリを用いた甕、須恵器の長頸壺、大甕が出土している。

最後に、十和田aから白頭山降下直後の土器として、坏は内面黒色処理のもの、ロクロ調整のみのもの、ロクロ調整とともにカキメをもつものが出土しているが、全体的にやや膨らんだ器形が多く、ほとんどが回転糸切りによる底部調整で、一部ピットから出土したものは回転ヘラ切りや静止糸切りの調整を行っている。また、高台付皿なども出土しており、甕はナデやケズリによるものが大半を占めている。須恵器は長頸壺、甕、大甕などが出土しているが、この時期から堀の使用がみられるようになることが唯一の特徴と考えられる。（注9）

これらから考えられることは、②から③の時期（十和田aが降下してから白頭山が降下するまでの間）の土器の様相であるが、黒色処理と無調整の坏・小型甕・長胴甕を主体にし、堀が使用され始め、甕類や堀もロクロ使用ものが少なく、ナデやケズリによる調整が一般的になり、須恵器は、主に坏・長頸壺・甕・大甕が使われている。

いずれにしても、あまりにも比較材料が少なかったことを反省し、数多くのデータの集積から比較検討すればより具体的なものに近づくと考えられ、今後の発掘調査においての資料の増加に期待したい。

3 おわりに

青森県において10世紀初頭に2種類の降下火山灰が見られ、それらは層位的に示準層としてとらえることが可能であり、火山灰が堆積している遺構・遺物の時期決定にも利用できると考えられる。そのために火山灰が出土した際に、しっかりととした土層観察及び土器の出土状況を把握した上で必要に応じて分析依頼することが妥当と考えられる。つまり、白頭山と十和田aの堆積状況から、火山灰の再堆積が考えられる場合、遺構・遺物の時期決定の資料とはならないことから、むやみに分析しても混乱を招くだけである。

また、これから課題として採集現場での堆積状況の観察や、顕微鏡観察による鉱物組成や火山ガラス粒の風化状況などのデータを分析値とともに集積しておく他に、白頭山や十和田aのみならず、他の火山灰自体の年代測定（注10）を行っていくことも大切であると考える。さらに、出土土器の共伴関係や住居跡の形態など様々な事もふまえ、青森県ならず隣接する県の土器の編年なども押えていくことも必要であると考える。

最後に、土師器・須恵器ともに日常生活において簡単に壊れる物ではなく、長期間の使用が考えられることから、住居跡内の火山灰の堆積状況から出土土器に実年代を与えることはやはり容易でなく、それなりの調査方法が必要であり、これから調査に生かしていくたいと思う。つけ加えて、火山灰の分布図作成に当たり、県内を始め北海道・東北の関係機関の方々には大変お世話になり、この場を借りて改めて感謝を申し上げたい。

注記

- 注1 扶桑略記に、延喜15年7月13日 出羽國言ニ上雨レ灰高二寸 諸郷農桑枯損之由一。
「或ハ鳥海山ノ噴火ナランカ」と記載されているが、鈴木恵治は、この噴火を鳥海山ではなく十和田カルデラと考え、岩手県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰに掲載している。
- 注2 町田ら(1996)の研究によって、小川原湖の湖底堆積物から、十和田aと白頭山の年層が、ほぼ8年分挟まれていることが分かり、白頭山の噴火は、923年から924年にかけての冬期と推定したが、その後、白頭山の噴火を923~938年までと年代に幅を持たせている。
- 注3 この数値は、県内の蛍光X線分析の結果、報告書に記載されたもののうち白頭山または十和田aとされた試料(161点)の領域値で、汚染や風化などについて加味していないものである。
- 注4 報告書中で自然堆積と記載又は、考えられる住居跡を対象とした。
- 注5 火山灰が床面に堆積している場合、一般に住居の構築材など廃材上に堆積するため、直接床面上に堆積することは考えられず、二次堆積が考えられる。しかし、焼失家屋を片付ける際に床面まで排土した後に火山灰が堆積した例もあることから、廃棄直後の堆積として扱ってみたが、この点に関しては、再考が必要である。また、火山灰が床面中央と、壁際に堆積するものの新旧についても考えなければいけない。
- 注6 ④は、白頭山・十和田aの両方の火山灰が確認されている場合は、二次堆積の可能性を考えられ、白頭山のみの地域の場合③より時期が古くなる。同じように十和田aのみの地域でも①・②より時期が古いと考えられる。しかし、③の場合は白頭山・十和田aの両方または、白頭山のみでもあり得る堆積状況である。
- 注7 浪岡町山元遺跡も下田町中野平遺跡も白頭山・十和田aの両火山灰が確認されていることから④の2軒の住居跡の火山灰は二次堆積の可能性が考えられる。
- 注8 中野平遺跡(青森県教委1990)の胎土分析結果では、ほとんどデータに差が認められず、遺跡周辺で作られた可能性が高いと記載されている。
- 注9 下北地方(アイヌ野遺跡)と津軽地方(山元(2)・(3)遺跡)や南部地方(中野平遺跡)とは土器の形態にやや違いが見られる。
- 注10 火山灰の年代測定は層中または上下層の炭化物から放射性炭素法(C-14法)を用いたものが多く、K・A法(カリウム・アルゴン法)、F・T法(フィッショントラック法)、TL法(熱ルミネッセンス法)などの火山灰自体の年代測定が行われている例は少ない。

引用参考文献

- | | |
|----------|--|
| 青森県教育委員会 | 1977 青森市三内遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第37集 |
| | 1975 中ノ沢西張・古街道長根遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第29集 |
| | 1979 大平遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第52集 |
| | 1981 山崎遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第68集 |
| | 1981 下北地点原子力発電所建設予定地内 アイヌ野遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第71集 |
| | 1983 朝日山遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第87集 |
| | 1989 幸畑遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第125集 |
| | 1990 中野平遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第134集 |
| | 1993 山元(3)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第159集 |
| | 1994 山元(2)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第171集 |
| 秋田県教育委員会 | 1994 秋田城跡 平成6年度秋田城発掘調査概報 秋田市教育委員会 秋田城跡調査事務所 |
| 新井房夫 | 1993 火山灰考古学 古今書院 |
| 一戸市教育委員会 | 1994 大平遺跡現地説明会資料 |
| 井上克弘 | 1982 東北地方の火山灰 考古風土記第7号 |

- 岩手県教育委員会 1982 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XVII(北上地区) 岩手県文化財調査報告書 第72集
- 岩手県埋文センター 1981 紀要 I
- 庄子貞雄 1987 火山灰土壤学と考古学 土壤学と考古学 博友社
- 震災予防調査会 1918 震災予防調査会報告 第86号 日本噴火志 上編
- 鈴木恵治 1982 文獻史料から見た古代奥羽での天災 考古風土記第7号
- 瀬川司男 1978 縄文期以後の火山灰と遺跡 どるめん 19
- 瀬棚町教育委員会 1985 南川2遺跡
- 仙台市教育委員会 1984 山口遺跡Ⅱ 仙台市文化財調査報告書 第61集
- 高橋与右衛門はか 1983 東北地方北部の遺跡と火山灰の検討 考古風土記第8号
- 平取町教育委員会 1996 平取町カンカン2遺跡 平取町文化財調査報告書Ⅲ
- 福島市教育委員会 1994 倉ノ前遺跡 福島市埋蔵文化財報告書 第63集
- タ 1995 勝口前畠遺跡2 福島市埋蔵文化財報告書 第68集
- 福島県教育委員会 1992 矢吹地区遺跡発掘調査報告書9 福島県文化財報告書 第269集
- 北海道埋文センター 1996 石倉貝塚(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第109集
- 松山力 1980 青森県南東部における旧石器時代末葉以降の火山灰層と黒色土層 「奥南」創刊号
- タ 1983 八戸の地質 文化財シリーズ24 八戸市教育委員会
- 町田洋 1982 火山活動 縄文文化の研究1 縄文人とその環境 雄山閣出版
- タ・新井房夫 1992 火山灰アトラス 日本列島とその周辺 東京大学出版会
- タ・福沢仁之 1996 湖底堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代 日本第四紀学会講演要旨集
- 三浦圭介 1990 日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相 シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」
- タ 1995 新編 弘前市史「資料編I 考古編 第3章」 古代
- 山田一郎・井上克弘 1990 東北地方を覆う古代の珪長質テラフ「十和田-大湯浮石」の同定 第四紀研究第29巻第2号

表1 青森県内の火山灰（白頭山・十和田a）を分析した遺跡

市町村名	遺跡名	分析方法	白頭山	十和田a	その他の火山灰	備考
青森市	朝日山遺跡	II	○			青森県87集 1
	三内丸山（2）遺跡	I	○	○		青森県157集 2
	近野遺跡	III	○	○		青森県52集・76集に記述あり 3
	小三内遺跡	II			中揮浮石	青森市22集 4
	小牧野遺跡	I	○			青森市30集 5
弘前市	境間館遺跡	I	○			青森県102集 6
	野鶴遺跡	I			不明	青森県149集 7
八戸市	鴨平（2）遺跡	I			二ノ倉	青森県73集 8
	鶴窓遺跡	I	○	○		青森県76集 9
	桂窓遺跡	I			十和田b・二ノ倉	青森県84集 10
	弥次郎窓遺跡	I	○	○?		青森県128集 11
	沢掘込遺跡	I	○	○	二ノ倉	青森県144集 12
	史跡根城跡	I	○	○		八戸市2集 13
黒石市	黒森下（1）遺跡	I	○	○		青森県第168集 14
	板留遺跡	III		○		青森県52集に記述あり 15
五所川原	観音林遺跡	I	○			青森県95集に記述あり 16
十和田市	明戸遺跡	I			南部浮石?	十和田市3集 17
	切田前谷地遺跡	I	○		南部or中揮浮石	十和田市4集 18
三沢市	小田内沼（1）遺跡	I	○	○		青森県107集 19
	平畠（5）遺跡	I	○	○		三沢市8集 20
	平畠（3）遺跡	I	○	○		三沢市14集 21
むつ市	大湊近川遺跡	I	○			青森県104集 22
	最花南遺跡	II	○			むつ市11集 23
	梨ノ木平遺跡	II	○			むつ市12集 24
今別町	山崎遺跡	I			不明	青森県68集 25
平館村	今津遺跡	I			不明	青森県95集 26
	尻高（4）遺跡	I	○			青森県95集に記述あり 27
鰐ヶ沢町	杣沢遺跡	I	○			青森県130集 28
	鳴沢遺跡	I	○			青森県142集 29
稻垣村	久米川遺跡	I	○			青森県163集 30
大鰐町	大平遺跡	III		○		青森県52集 31
	上牡丹森遺跡	I	○			大鰐町1集 32
尾上町	李平下安原遺跡	I	○	○		青森県111集 33
	原遺跡	I	○			尾上町1集 34
浪岡町	羽黒平遺跡	III	○	○		青森県44集 35

市町村名	遺跡名	分析方法	白頭山	十和田a	その他の火山灰	備考
浪岡町	山本遺跡	I	○			青森県105集 36
	山元(3)遺跡	I	○	○		青森県159集 37
	山元(2)遺跡	I	○	○		青森県171集 38
	野尻(2)遺跡	I	○			青森県172集 39
	平野遺跡	I	○			青森県192集 40
	浪岡城跡	III	○			浪岡城IV 41
常盤村	水木館遺跡	I	○			青森県173集 42
田舎館村	垂柳遺跡	I			不明	青森県78集 43
	垂柳遺跡	I			不明	青森県88集
碇ヶ関村	大面遺跡	III	○	○		青森県55集 44
野辺地町	陣馬川原遺跡	I	○	○		青森県77集 45
	楓ノ木遺跡	I		○		青森県77集 46
	楓ノ木(7)遺跡	I		○		野辺地町3集
七戸町	矢館跡遺跡	I		○		七戸町4集 47
	作田遺跡	I		○		七戸町5集 48
	治部袋跡遺跡	I		○		七戸町11集 49
	貝ノ口遺跡	I		○		七戸町15集 50
六戸町	掘切沢(3)遺跡	I	○	○		青森県141集 51
上北町	松原遺跡	I		○		青森県77集 52
下田町	中野平遺跡	I・III	○	○		青森県134集 53
	向山(4)遺跡	I	○	○		青森県134集 54
	阿光坊遺跡	I	○	○		下田町2集 55
	阿光坊遺跡	I	○	○		下田町3集
	中野平遺跡	I		○		下田町5集
六ヶ所村	大石平遺跡	I	○	○		青森県90集 56
	大石平遺跡	I	○	○		青森県103集
	発茶沢遺跡B地区	I	○			青森県76集に記述あり 57
	発茶沢遺跡	I	○			青森県96集
	発茶沢(1)遺跡	I	○	○		青森県120集
	沖付(1)遺跡	I	○	○		青森県100集 58
	弥栄平(4)遺跡	I	○			青森県106集 59
	上尾駒(1)遺跡C地	I	○	○		青森県113集 60
	上尾駒(2)遺跡	I	○			青森県115集
	表館(1)遺跡	I	○			青森県121集 61
	幸畑(7)遺跡	III			不明	青森県125集 62

市町村名	遺跡名	分析方法	白頭山	十和田a	他の火山灰	備考
六ヶ所村	唐貝地遺跡	I	○			青森県145集 63
	富ノ沢(2)遺跡	I			不明	青森県147集 64
	家ノ前遺跡	I	○	○		青森県148集 65
	家ノ前遺跡	I	○	○		青森県160集
川内町	板子塚遺跡	I	○			青森県180集 66
大間町	白砂遺跡	I	○			青森県189集 67
大畠町	水木沢遺跡	III			品ノ木火山灰	青森県34集(恐山火山からの供給火山灰) 68
東通村	アイヌ野遺跡	I	○			青森県76集に記述あり 69
三戸町	泉山遺跡	I	○	○		青森県181集 70
	佐野平館跡・上佐野遺跡	I		○?		青森県191集 71
福地村	西山遺跡	I			中揮浮石	青森県136集 72
南郷村	筋久辻遺跡	I		○		青森県151集 73
	畠内遺跡	I			不明	青森県161集 74
	馬場漸(2)遺跡	I		○		青森県76集に記述あり 75

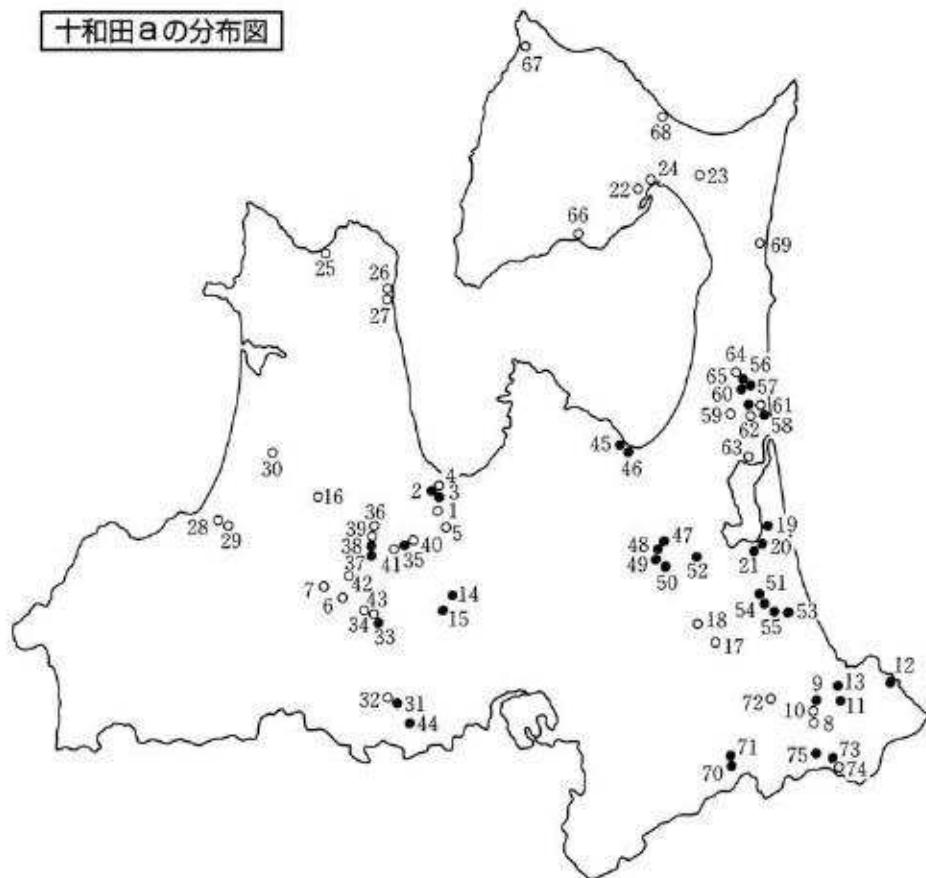
I: 蛍光X線分析 II: 火山ガラスの屈折率による分析 III: その他の分析(重鉱物の組成率など)

※備考欄の数字は、地図中の番号と一致する。

表2 白頭山と十和田aの違い

		白頭山 - 苦小牧火山灰	十和田a火山灰
螢線	Rb-Sr量	0.65~1.35-0.05~0.45	0.1~0.45-0.7~1.4
光分析	K-Ca量	0.8~1.2-0.25~0.6	0.15~0.65-0.6~1.5
X析	Fe量	2.0~3.0	1.1~2.0
重組物	普通輝石	20~40%	20~40%
鉱成物	シソ輝石	40~70%	60%以上
	普通角閃石	5~25%	10%以上
屈折率		1.511~1.522	1.496~1.504
火山ガラスの割合		細粒の火山ガラス多い	斑晶鉱物が多く火山ガラスが目立つ
形態	x y状が全体の1/3 軽石型は発砲性に富む		織維状が全体の約半分 軽石型は緻密である
色調	黄褐色~灰黄褐色		灰白色~青灰白色
粒径	シルト		細砂とシルト
顕微鏡による写真観察	有色鉱物(重鉱物)はほとんど見られない		比重の大きい有色鉱物(シソ輝石)が目立つ

十和田aの分布図



1. 朝日山
2. 三内丸山
3. 近野
4. 小三内
5. 小牧野
6. 境開館
7. 野脇
8. 鶴平
9. 鶴置
10. 薩摩
11. 弥次郎塙
12. 沢堀込
13. 根城跡
14. 黒森下
15. 板留
16. 観音林
17. 明戸
18. 切田前谷地
19. 小田内沼
20. 平畠
21. 平畠
22. 大湊近川
23. 最花南
24. 梨ノ木平
25. 山崎
26. 今津
27. 戻高
28. 空沢
29. 鳴沢
30. 久米川
31. 大平
32. 上牡丹森
33. 李平下安原
34. 原
35. 羽黒平
36. 山本
37. 山元
38. 山元
39. 野尻
40. 平野
41. 浪岡城
42. 水木館
43. 垂柳
44. 大面
45. 陣馬川原
46. 櫻ノ木
47. 矢館跡
48. 作田
49. 治部袋跡
50. 貝ノ口
51. 掘切沢
52. 松原
53. 中野平
54. 向山
55. 阿光坊
56. 大石平
57. 発茶沢
58. 沖付
59. 弥栄平
60. 上尾駿
61. 表館
62. 幸畠
63. 唐貝地
64. 富ノ沢
65. 家ノ前
66. 板子塚
67. 白砂
68. 水木沢
69. アイヌ野
70. 泉山
71. 佐野平館跡・上佐野
72. 西山
73. 篠久辺
74. 番内
75. 馬場瀬

白頭山の分布図

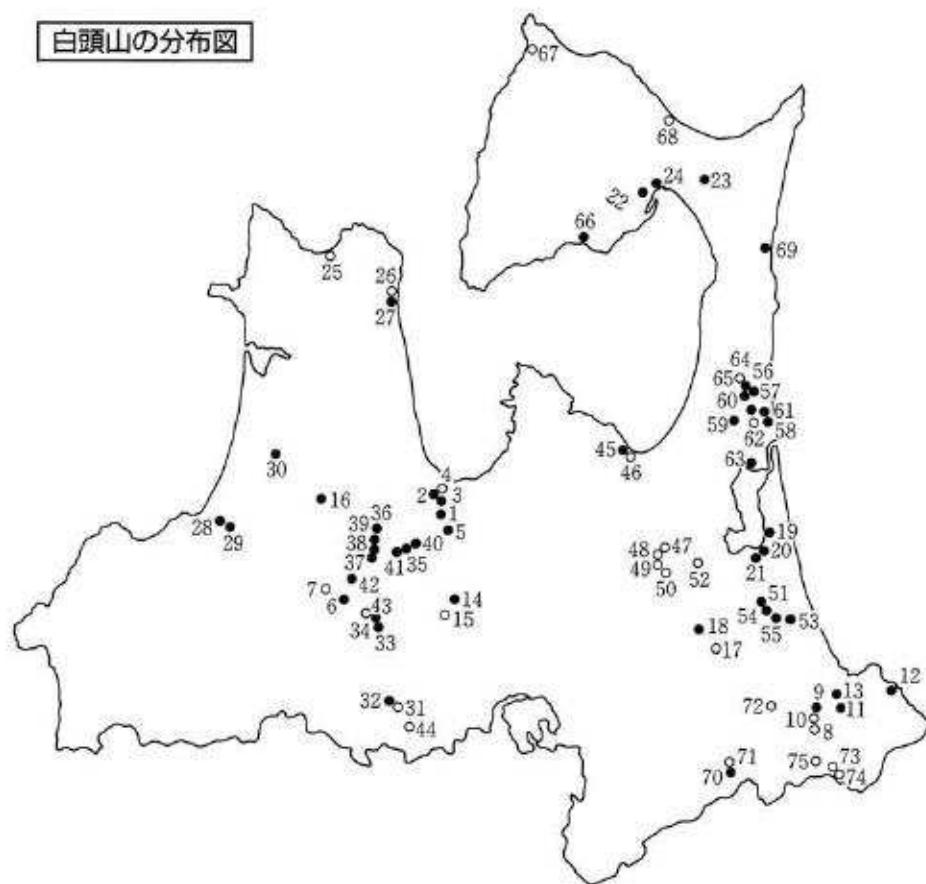


図1 青森県内の白頭山と十和田aの遺跡分布図

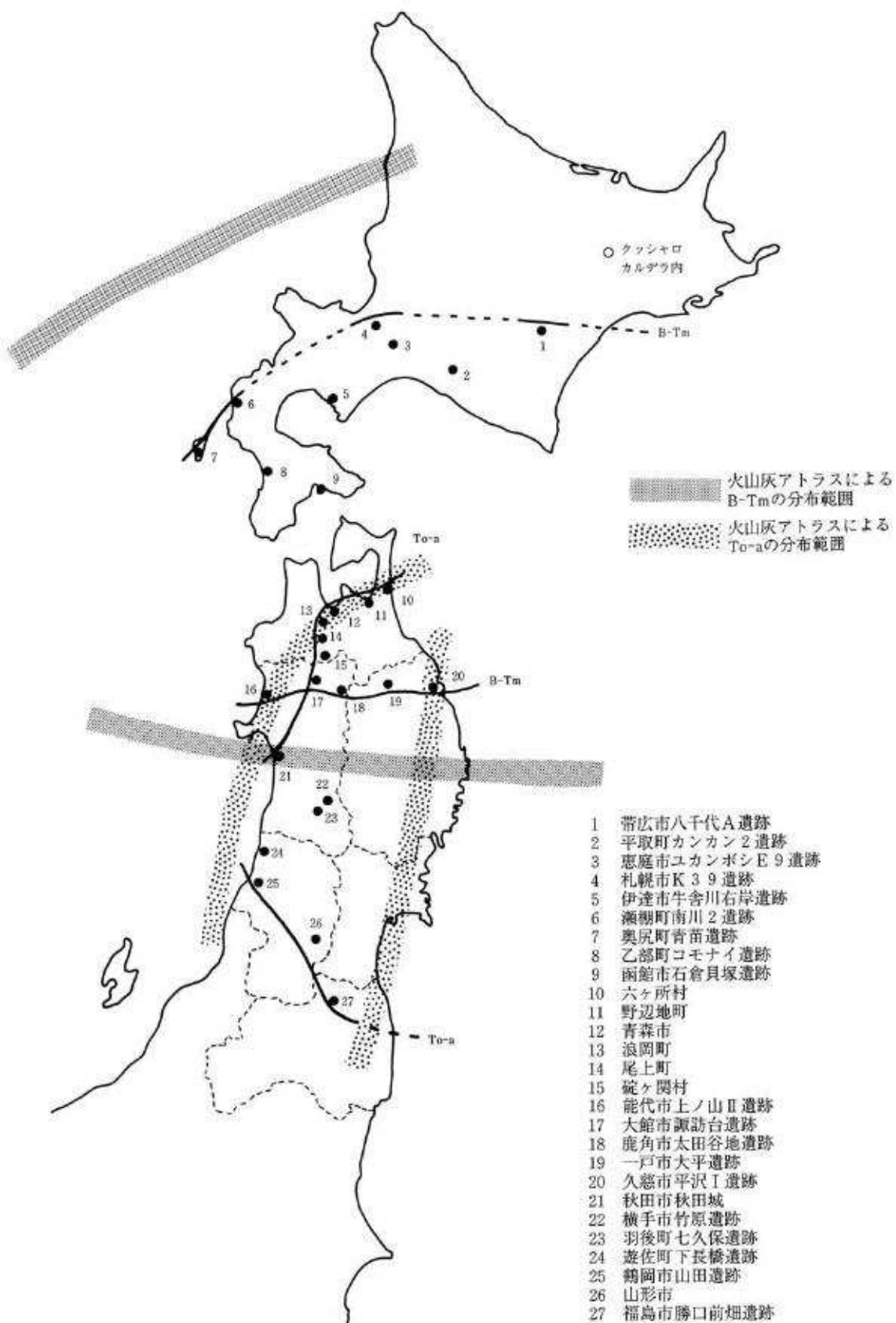
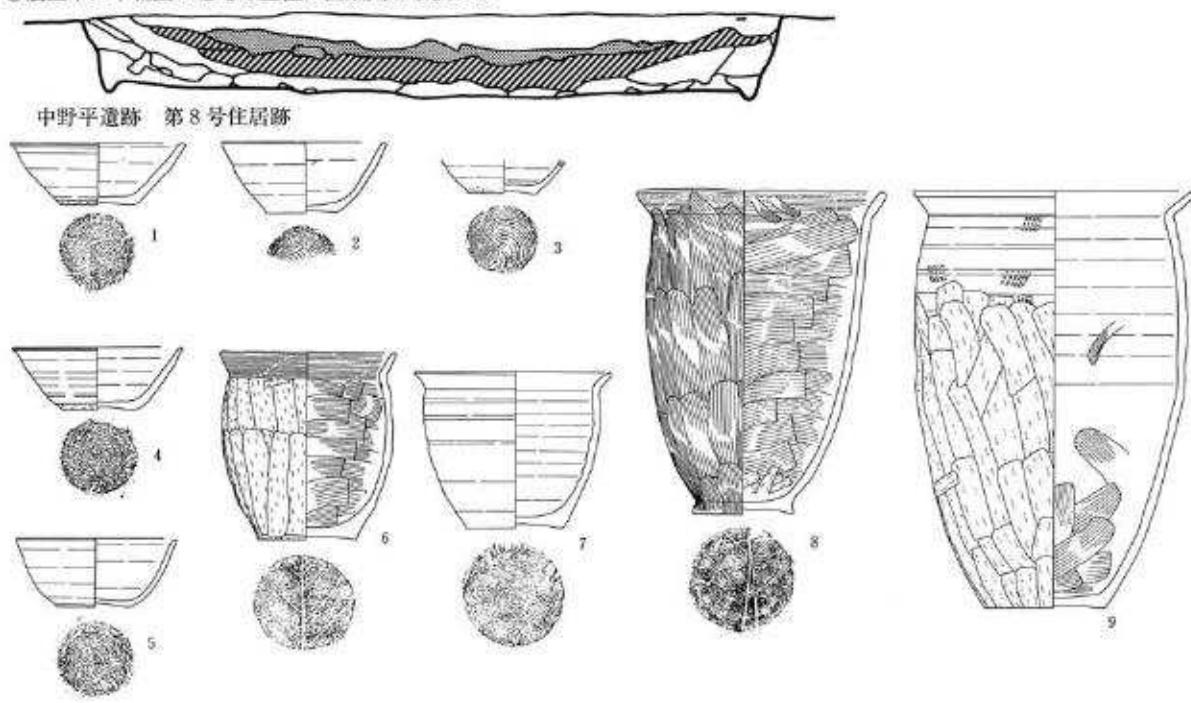
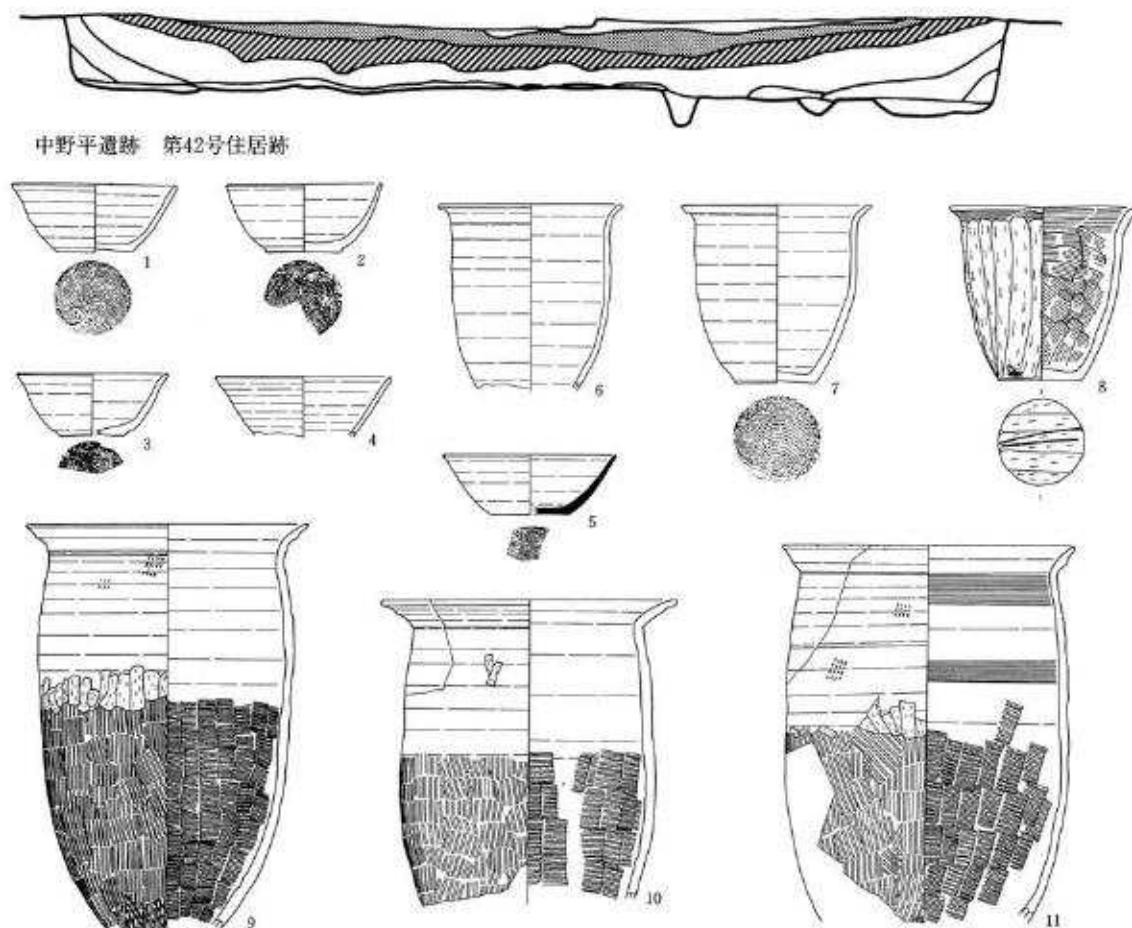


図2 白頭山と十和田aの分布範囲

①覆土中に十和田aとその上位に白頭山が堆積する



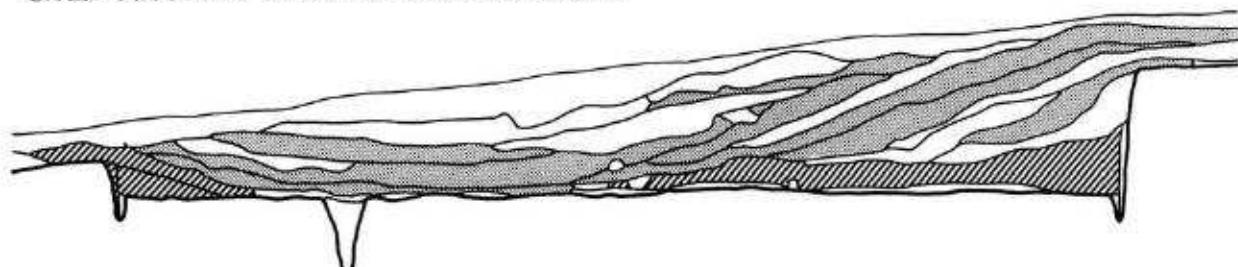
床面：4, 7 カマド：1-3, 5, 6, 8, 9



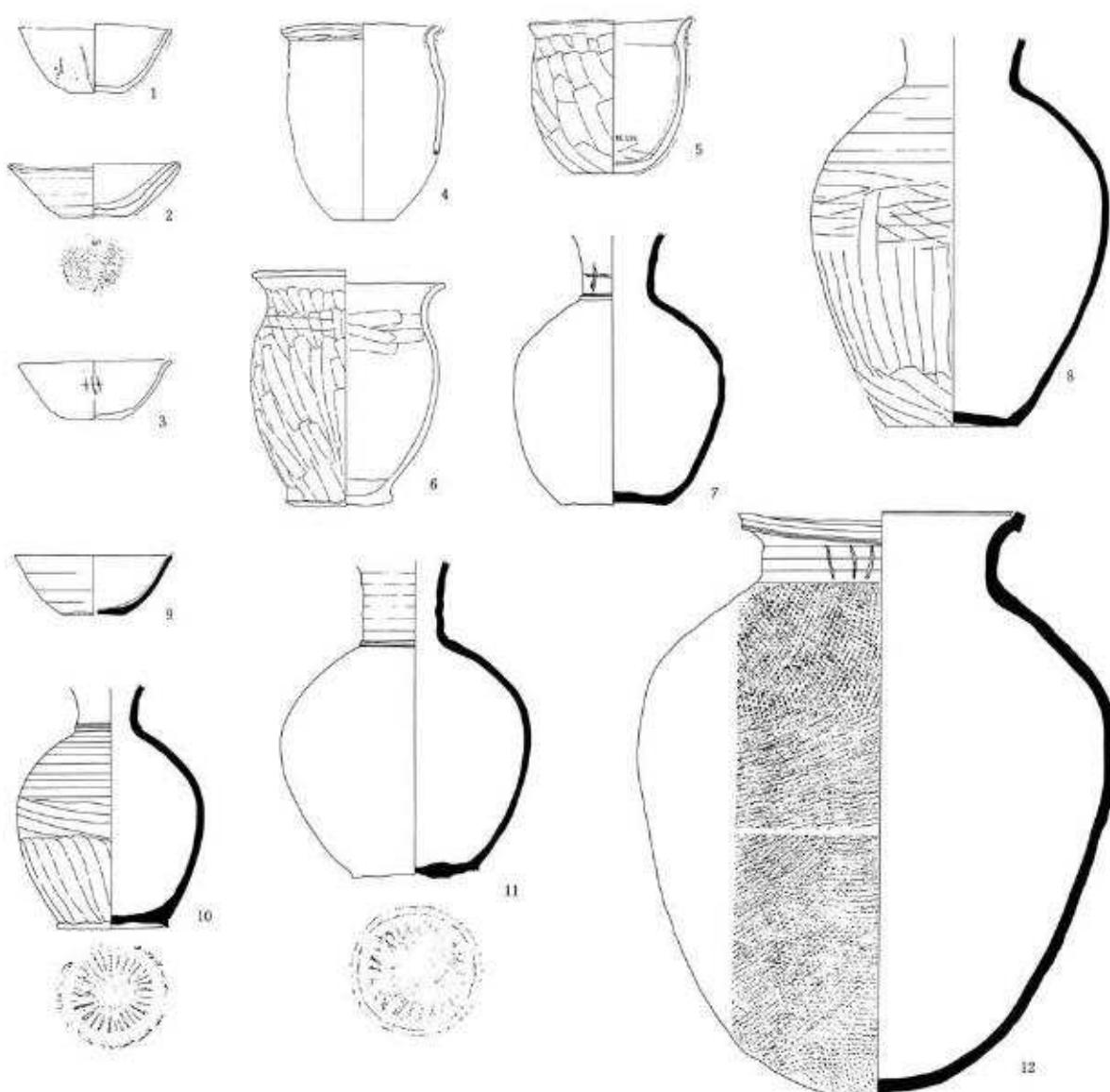
床面：2, 4, 8, 9 カマド：1, 3, 5-7, 10, 11

図3 火山灰の堆積状況と出土土器 1

②床面に十和田臼のみ、または、その上位に白頭山が堆積する



三内遺跡 第44号住居跡



床面：1, 4-11 カマド：2 内周溝：3 廉面埋設：12



中野平遺跡 第45号住居跡

床面：1

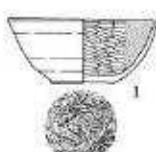
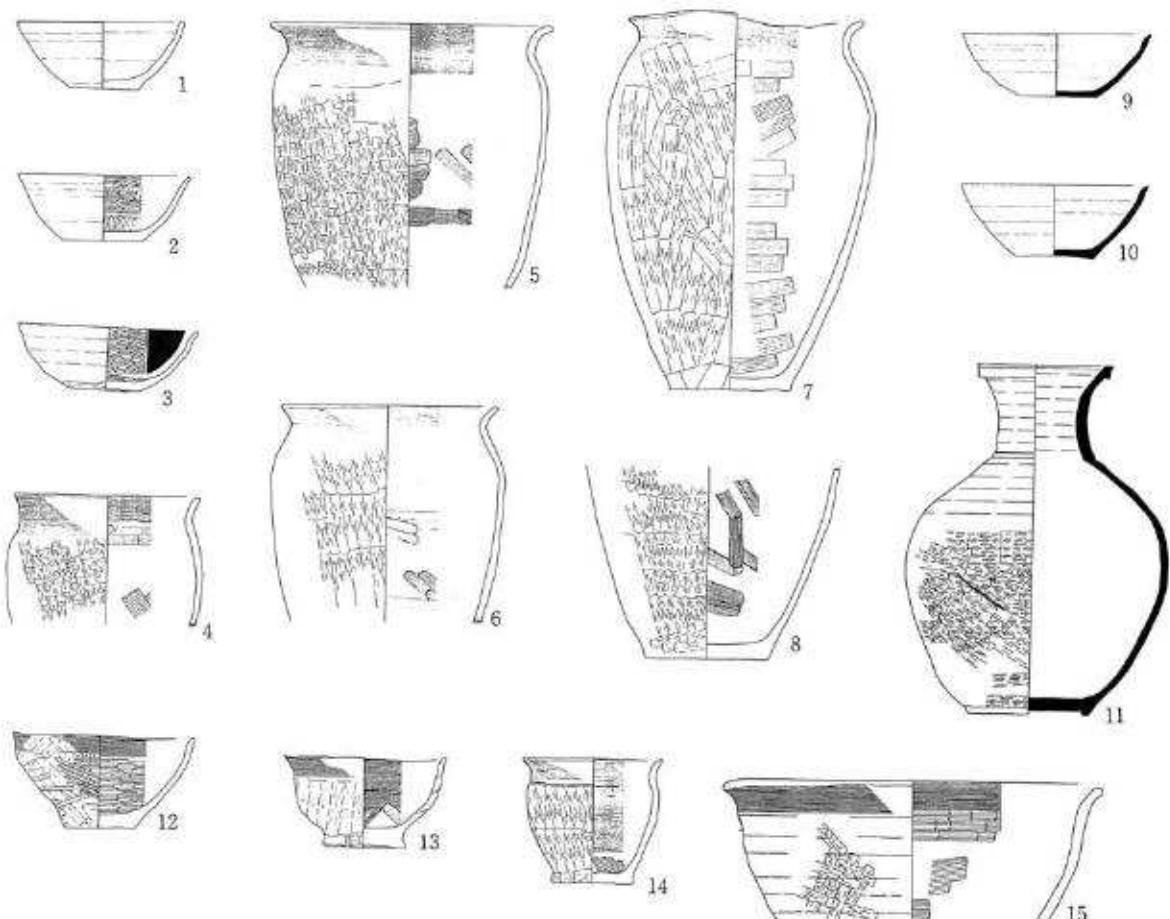


図4 火山灰の堆積状況と出土土器 2

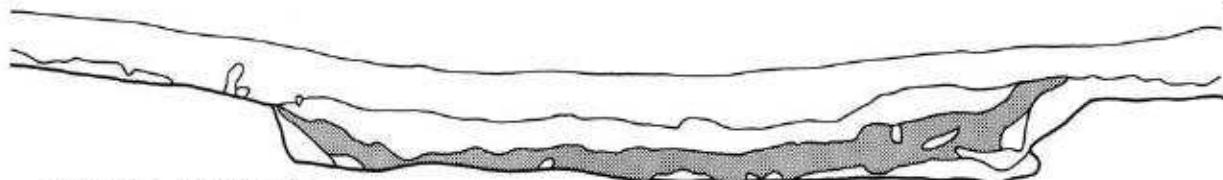
③床面に白頭山火山灰が堆積する



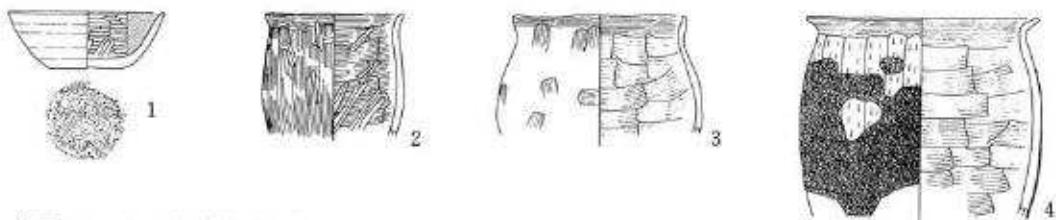
アイヌ野遺跡 第2号住居跡



床面：6, 10, 11 カマド：1～5, 7～9, 12～14 フク土：15

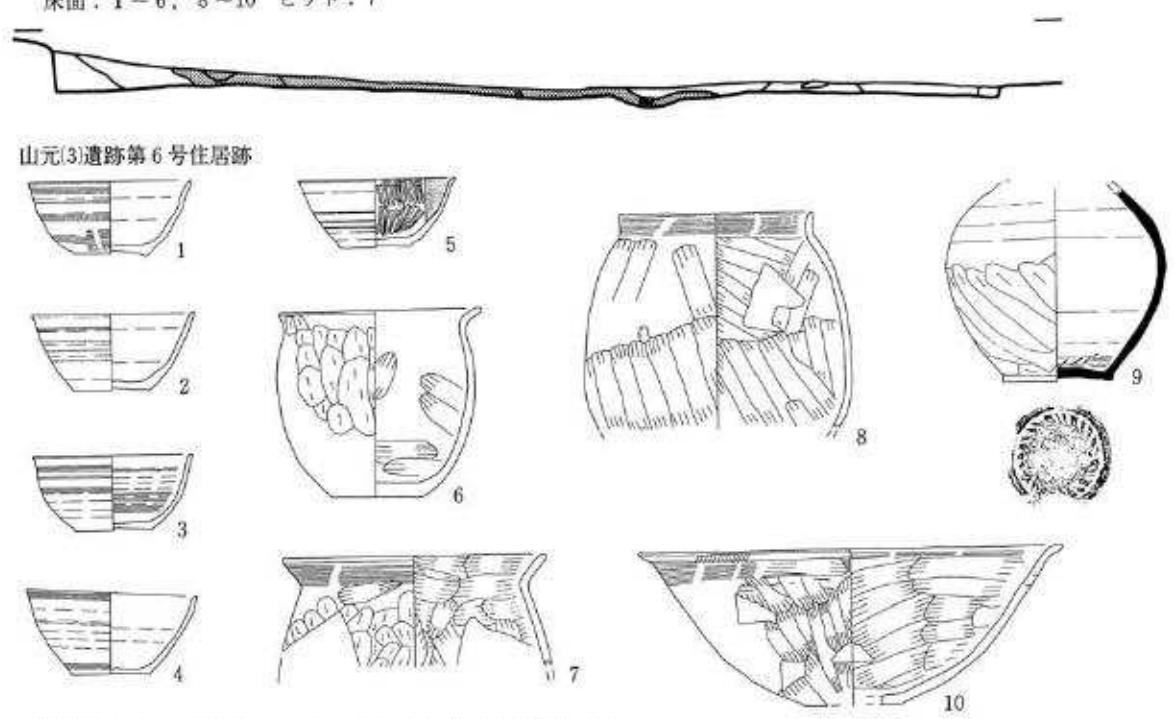
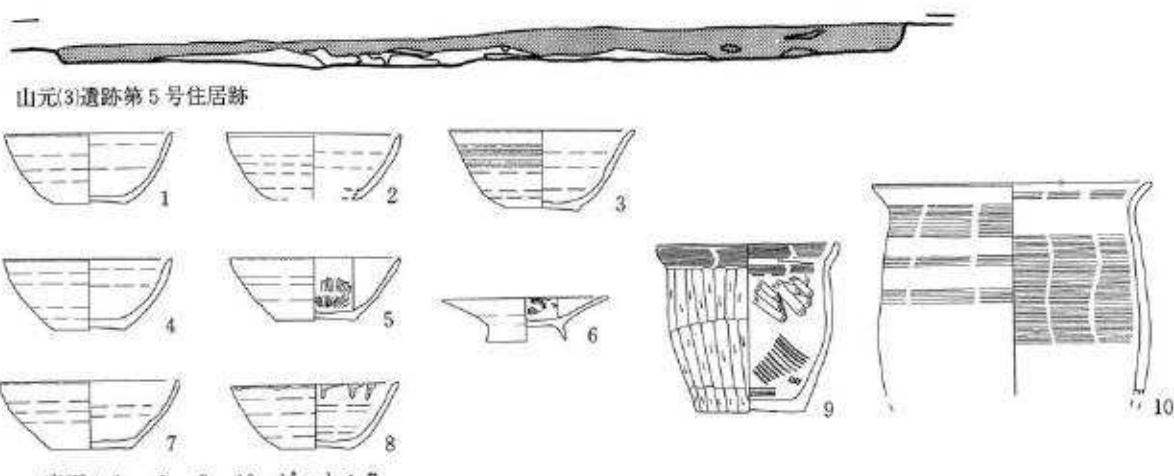


中野平遺跡 第52号住居跡

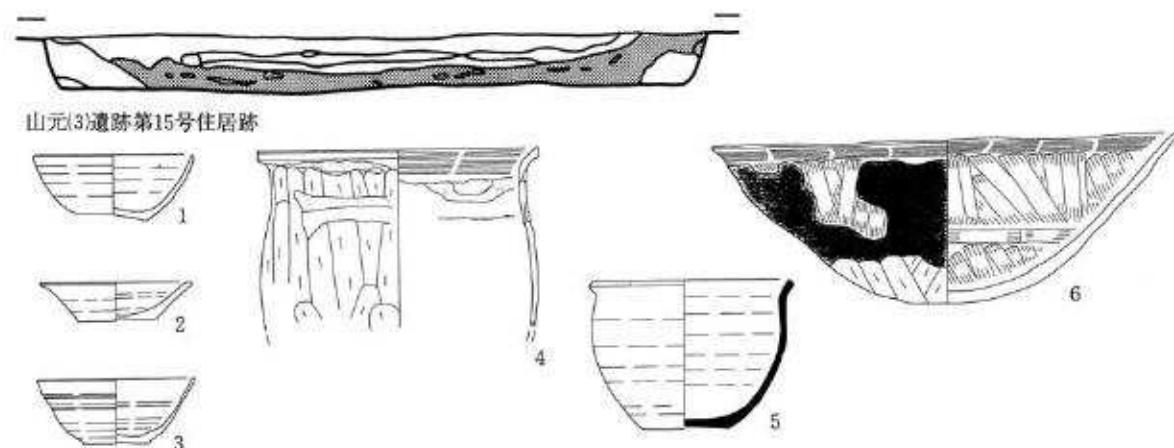


床面：1, 2 カマド：3, 4

図5 火山灰の堆積状況と出土土器 3



床面：1～4, 床下5, 7, 9 カマド：6 床直：8, 10



床面：1, 2, 5 カマド：2, 3, 6 床直：4

図6 火山灰の堆積した出土土器 4

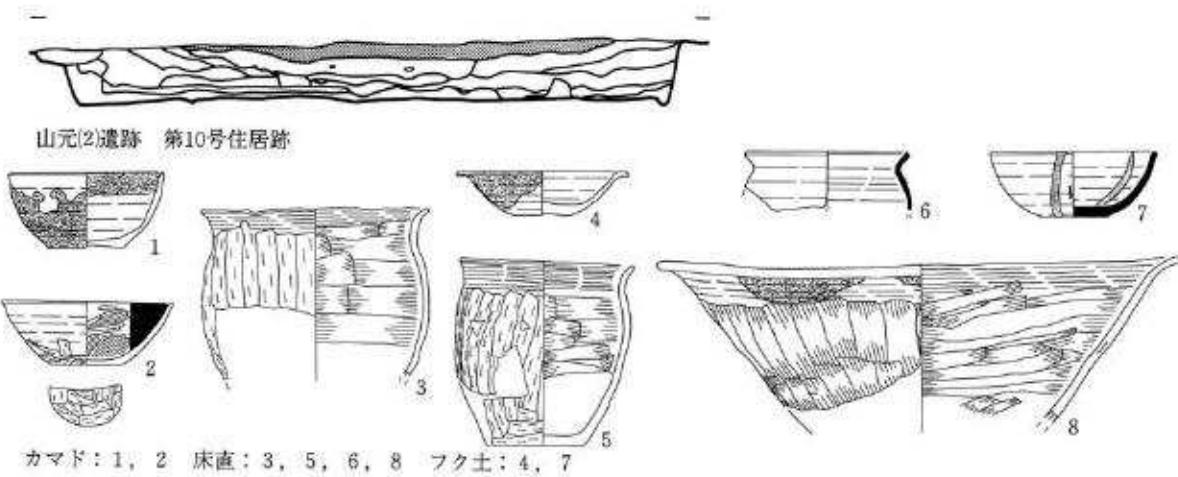
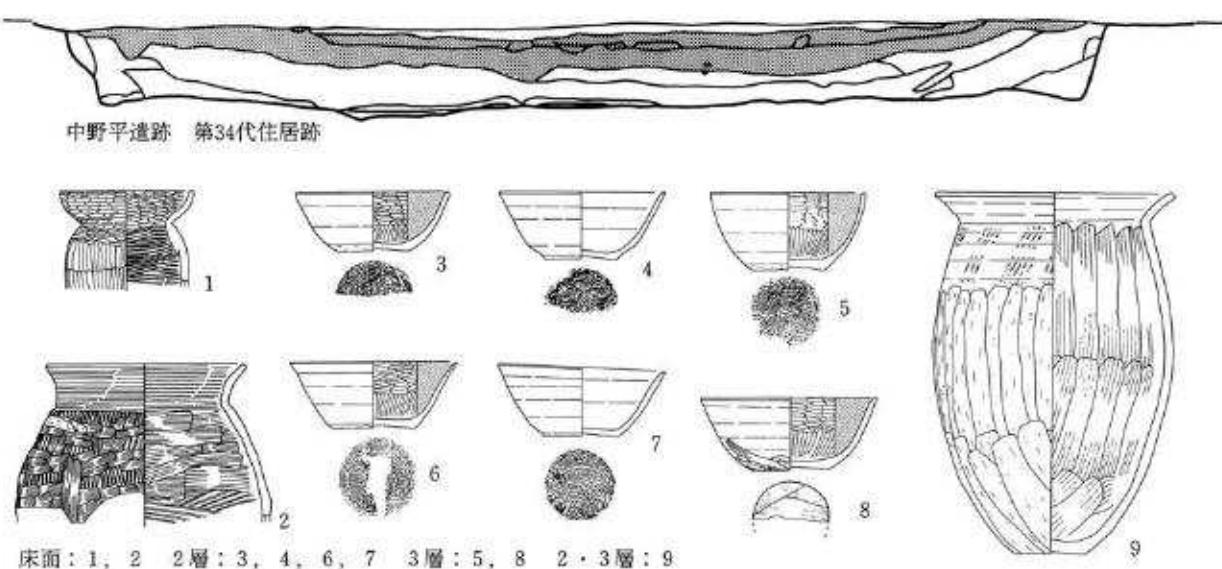
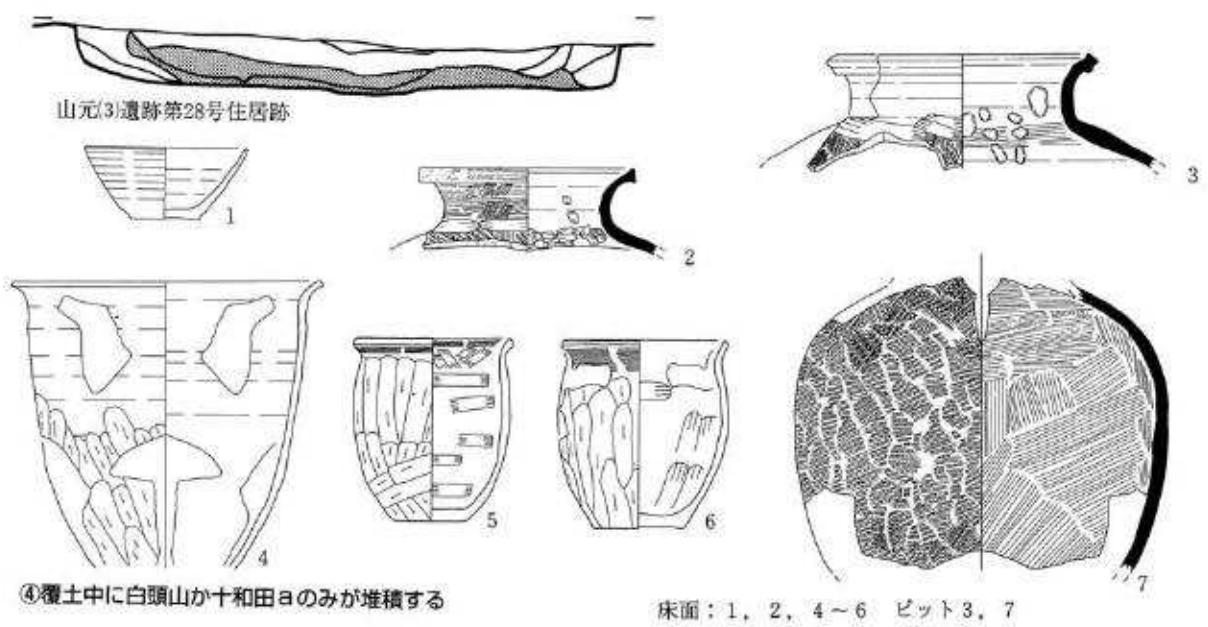


図7 火山灰の堆積状況と出土土器 5

青森近県における陥し穴集成

坂本 真弓・杉野森 淳子

1 「陥し穴」の名称について

これまで、青森県ではTピットと呼ばれる縦長の土坑が太平洋側を中心に出土している。Tピットはトラップピット(TRAP PIT)の略称で、訳すと「陥し穴」である。函館空港第一地点の調査過程の中で吉崎昌一氏により初めて使用された名称である。[註1] 主に北海道内で使用されている。

一般に、陥し穴の平面形態は溝状・楕円形・円形に大別され、その底部に杭痕が見られるものもある。青森県では各々の観点からTピットの他に「溝状ピット」・「溝状土坑」を使用している。また、Tピットが出土している他県では「陥し穴状遺構」(岩手県)・「陥し穴」(北海道)などの名称も使われている。このようにひとつの遺構に対し、形態からの名称と機能からの名称が与えられている。この場合、ひとつのものに関し共通した認識が得られ難くなる可能性もある。よって、陥し穴およびTピットの名称を見直す必要がある。

本稿では青森県および北海道南部・秋田県・岩手県の「Tピット」および「陥し穴」・「陥し穴状遺構」と呼ばれている陥し穴を集成することで用語について考るものである。

2 分類 (田村1987参考)

陥し穴を平面形態から溝状ピット(A類)・楕円形ピット(B類)・円形ピット(C類)の3類型に分類する。楕円形・円形ピットは杭痕が検出されたもの、立地や分布状況から陥し穴の可能性の高いものをB類・C類とする。また、「杭痕」を「逆茂木痕」と呼称する場合もあるが(菊池1987)、青森近県においては逆茂木そのものが明らかな痕跡として残っていないため、「杭痕」と表現する。

3 各県の状況

1) 青森県

青森県内では94遺跡から合計1851基の陥し穴が検出されている。内訳はA形態1835基(94遺跡)、B形態1基(1遺跡)、C形態15基(1遺跡)である。2遺跡を除いてほとんどがAの溝状ピットである。分布は太平洋沿岸に集中しているが、最近では津軽地方および内陸部にも広がる。一遺跡におけるA溝状ピットの数は100基以上を越えるものが太平洋側にみられ、ここでは陥し穴の配列に規則性があり、3~10基毎に並列している。青森県の陥し穴の特徴として、溝状ピットの底部に杭痕が見られないこと、陥し穴と考えられる楕円形・円形土坑が極端に少ないことが挙げられる。

2) 北海道南部

道南では1208基の陥し穴が50遺跡から確認されている。形態はA類1185基(50遺跡)、B類19基(7遺跡)、C類4基(2遺跡)ある。沿岸部を中心に標高100m以下の低位段丘上に分布する。溝状ピットの中には底部に杭痕が残るもののがみられる。中には複数の杭痕が残る陥し穴もあり、設置される杭の数は1~5本である。溝状ピットには陥し穴と考えられる楕円形・円形土坑を伴う例がある。この陥し穴にも杭痕がみられるものもある。

3) 岩手

県北から県南まで合計すると175遺跡で約2749例の検出例がある。平面形態で見るとA溝状の2,128

基、B楕円形の227基、C円形の394基で、岩手県の陥し穴の検出例は隣県の秋田に比べると遙かに多い。分布としては県北から県南まで幅広く認められる。海岸部としては三陸海岸沿いの中位段丘面に、内陸部としては北上川流域の低位段丘面及び中位段丘と低位段丘の境界である斜面上に見られる。1遺跡で検出される陥し穴の平面形態は各遺跡によってバラエティがある。県北ではA溝状の検出割合が高いのが目立つ。南に下るにつれてA溝状、B楕円形、C円形、の割合がほぼ同等になり、遺跡によつてはB楕円形、C円形の割合が高くなってくる。

4) 秋田

秋田県での陥し穴の検出例は県北地方を中心に約224例程度見られる。ほとんどが平面形態のA溝状のもので、A溝状208基、B楕円形0基、C円形16基である。立地としては段丘上に多く見られる。中でも鹿角市の大湯環状列石周辺で検出された陥し穴は主に環状列石周辺に多く見られる。列石とは無秩序に検出されていることから、列石よりも前に造られたものであるだろう。又、陥し穴と他の時代の遺構が重複して検出される例として、古代の集落跡が挙げられる。

4 陥し穴における自然科学的分析の現状と課題

これまで、陥し穴に関する自然科学的分析が行われた例はほとんどない。これは、陥し穴が遺構の堀込み面・出土遺物・切り合い関係などから縄文時代の遺構であることがほぼ確定的であること、陥し穴から出土する遺物が極端に少ないと動物遺体を伴って検出されることが無いという理由から科学的分析の対象から外されていた。このような中でも、堆積土に含まれる花粉から陥し穴周辺の環境を探ろうとする研究や[註2]、リン分析が行われている[註3]。花粉分析結果から、陥し穴周辺の古環境は、草地主体で樹木密度が疎らな様相であったと推定されている事例がある。また、リン分析では陥し穴堆積土中のリンの割合が少ないとから溝状ピットは墓壙とは違う用途を持つと推測される結果が提示されている。

5 おわりに

陥し穴には様々な形態がある。円形・楕円形の陥し穴は各県に分布するが、溝状の陥し穴は東北および北海道を中心に東日本に分布している。陥し穴をトラップピット（Tピット）と和訳した場合、Tピットのなかに溝状以外の形態のものも含まれることになる。

これまで県内では溝状ピットが他の陥し穴と併存せず、単独で検出していることから、Tピット＝溝状ピットの考え方方が一般であった。現在、岩手・北海道では溝状ピットと楕円形・円形ピットが併存する例が見られる。今後、県内でも円形・楕円形の陥し穴が確認された場合、用いる名称に不都合が生じるため全国的に通用する名称を用いる必要がある。今後は従来の「Tピット」を用語として使わず、その形態から「溝状ピット」と呼称し、その機能を「陥し穴」と捉えたい。

本稿の作成に当たり、次の機関と個人から御教示・御指導を頂いた（順不同、敬称略）。青森県立郷土館、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センター、（財）北海道埋蔵文化財センター、秋田県埋蔵文化財センター、函館市教育委員会、福田友之、鈴木政志、越田賢一郎、遠藤香澄、佐藤智雄、福田裕二、櫻田隆、松本建速、羽柴直人、熊谷常正

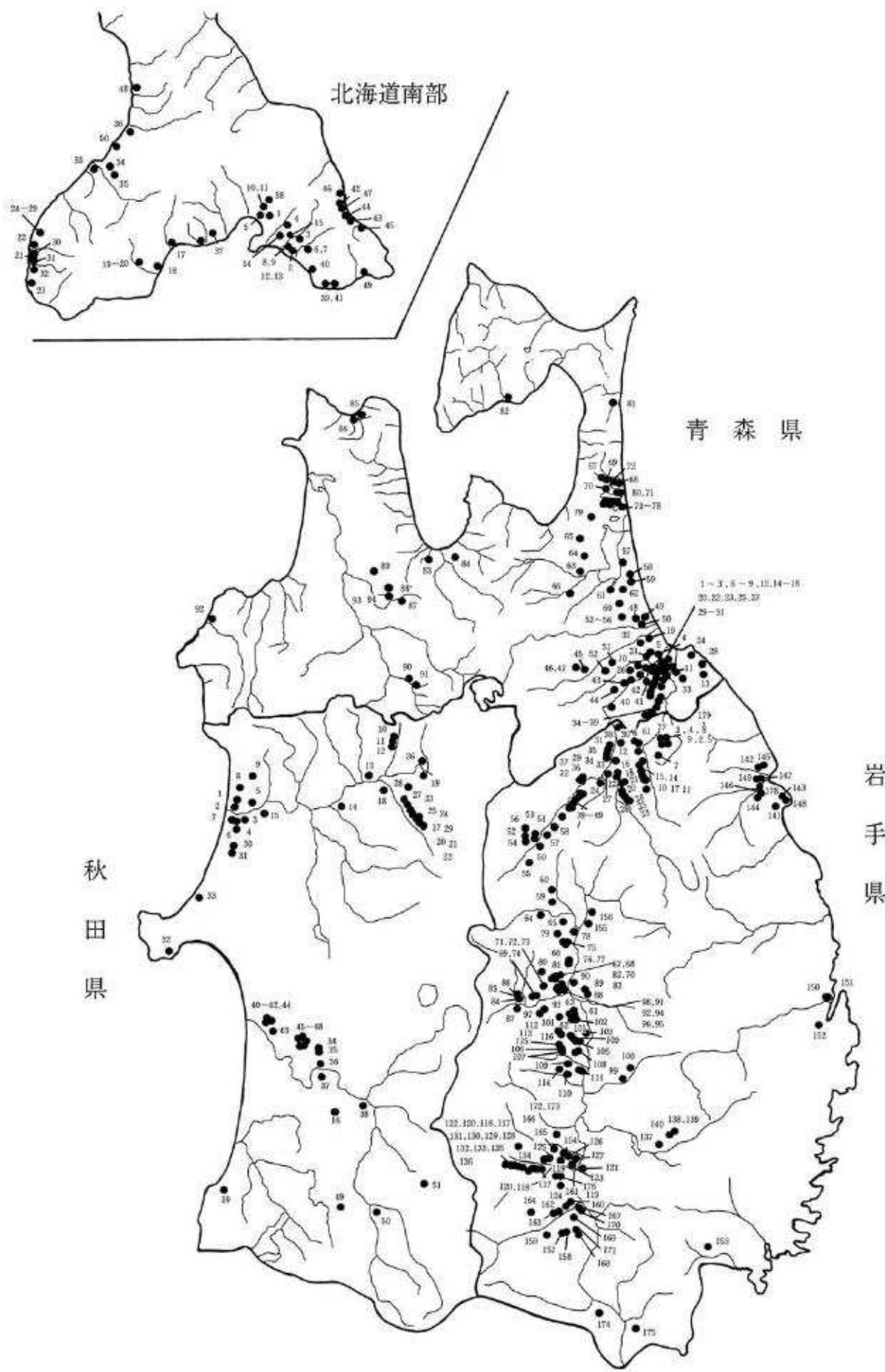


図1 陥し穴検出遺跡分布図

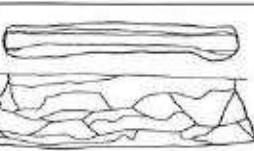
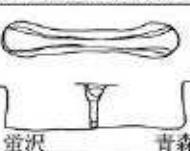
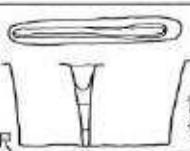
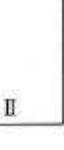
分類	名称	平面形態	類例(石岡憲雄1991より)				
A	溝状ビット 溝状土坑 (壙)						青森・董沢 青森・發茶沢 青森・發茶沢
	楕円形土坑 長條円形土坑						岩手・荒屋II 青森・田面木平I 岩手・五庵I 北海道・美沢4 V
C	円形土坑 ビーカー状 土坑						青森・鶴塚 青森・鶴塚 青森・長七谷地 岩手・大堤II

図2 分類図

・執筆はI、II、III1・2)、Vを杉野森淳子が、III3・4)、IVを坂本真弓が担当した。

・今回の陥し穴集成にあたって当センターにおいて陥し穴検出遺跡地名表をデータベース化することになった。データ自体は青森県埋蔵文化財調査センターで保存している。作成にあたっては、次の点に留意した。

1. 都道府県コード・市町村コード(「全国地方公共団体コード」による)、遺跡番号を用い、増加してゆくデータに対応する。
2. 「陥し穴」という名称のもの以外でも、平面形態・堆積状況・立地などから陥し穴と判断できたものは地名表に含めた。
3. 次の該当する遺跡は今回の掲載から除外した。
1. 概要のみ報告された遺跡
2. 正確な位置が不明な遺跡
4. データの検索が円滑に行われるよう掲載した表の属性以外に次の属性を設けた。【都道府県コード】 【市町村コード】 【遺跡番号】 【出土遺物】
・取り上げた陥し穴の属性は基本的に報告書内の記載を基にした。
5. [等高線]項目中では、溝状・楕円形陥し穴(以下、省略)が等高線に対し平行な場合に「平・平行」、斜交している場合は「斜・斜交」、垂直に交わる場合を「垂・直・直交」と表記した。さらに、等高線に対し直交、斜交、平行している陥し穴群は「混」と表記し、陥し穴が平坦地に立地する場合「平坦」と表記した。

註釈

1. 詳細な研究史については(福田1981)、(森田・遠藤1984)を参照して頂きたい。
2. 引用・参考文献(山田1977・1991a・1991b)、(松山他1985)参考
3. 引用・参考文献(武内1967)参考

引用・参考文献

- 石岡憲雄 1991 「「Tビット」について(再論)」『埼玉考古学論集-設立10周年記念論文集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 森田知忠・遠藤香澄 1984 「Tビット論」『北海道の研究1』考古編 I 清文堂
- 菊池 実 1987 「縄文時代の陥し穴調査法と派生する問題点-大原II遺跡・村主遺跡検出の陥し穴群分析から-」『研究紀要』4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤孝則 1983 「北海道における溝状ビットの自然科学的検討」『十勝考古』6 十勝川流域史研究会
- 佐藤孝則 1986 「動物生態学からみた溝状ビットの機能」『北海道考古学』22 北海道考古学会
- 武内収多 1967 「函館空港整備事業の内遺跡発掘調査実績報告-函館空港第I地点」
- 田村壮一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『岩手県埋蔵文化財調査センター紀要』IV
- 福田友之 1989 「下北半島尾鉤・鷹架沼周辺の溝状ビット群」『考古学論叢II』 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 渡辺俊一 1978 「厚真I遺跡のTビットについて」『苦小牧・郷土の研究』4
- 山田悟郎 1977 「溝状遺構内検出の黒色土の花粉分析について」『札幌市文化財調査報告書XV』札幌市教育委員会
- 山田悟郎 1991a 「4号落し穴から産出した花粉について」『静川9遺跡』苦小牧市教育委員会
- 山田悟郎 1991b 「清水町 上清水4遺跡・共栄2遺跡・共栄3遺跡」(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第70集
- 松山 力・新渡戸 隆 1985 「石の窓(2)遺跡の花粉分析」『石の窓(1)・石の窓(2)・古宮遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第92集

表 陥し穴検出遺跡一覧

青森県

No	遺跡名	市町村名	数量	A	B	C	時 期	等 高 線	標高(m)	備 考	発行年	文 献
1	岩ノ沢平	八戸市	11	11				平0, 直2	60~65	自然堆積	1992	市埋文調報46
1	岩ノ沢平	八戸市	3	3				直交	57~61		1993	市埋文調報50
2	牛ヶ沢(3)	八戸市	9	9			前期後半以降	直交	75~85	自然堆積	1984	県埋文調報86
3	鶴窪	八戸市	27	12		15	前期以後	平9, 直3	45~54	杭痕・C類8基	1983	県埋文調報75
4	壳場	八戸市	172	172				平146, 直26	16~34	自然堆積	1985	県埋文調報93
5	大タルミ	八戸市	9	9			前期以後	直8, 平1	45~47	自然堆積	1985	県埋文調報93
6	風張(1)	八戸市	3	3			後期以前	直交	24~27	自然堆積	1991	市埋文調報42
7	鴨平(1)	八戸市	7	7				直5, 平2	192~200		1983	県埋文調報74
8	鴨平(2)	八戸市	14	14				平7, 直7	170~180		1983	県埋文調報73
9	古宮	八戸市	3	3				斜2, 平1	78~83	自然堆積	1987	市埋文調報19
9	古宮	八戸市	4	4				平3, 直1	86~90		1985	県埋文調報92
10	古坂, 夏間木(1)	八戸市	11	11				平行	52~76	自然堆積	1988	市埋文調報23
11	坂中	八戸市	1	1				平行	60		1995	市埋文調報61
12	沢里山	八戸市	2	2				平1, 直1	90~92		1996	市埋文調報67
13	沢掘込	八戸市	95	95				直39, 平56	73~99		1992	県埋文調報144
14	白桃	八戸市	4	4			後期	平3, 直1	70~75	自然堆積	1993	市埋文調報51
15	白山平(2)	八戸市	8	8			中期以後	直5, 平3	94~95	自然堆積	1984	県埋文調報83
16	田面木平(1)	八戸市	32	31	1		後期以前	直27, 平5	77~103	自然堆積	1988	市埋文調報20
17	田面木平(2)	八戸市	1	1			後期以後	直交	103	自然堆積	1993	市埋文調報53
18	丹後谷地	八戸市	2	2				平1, 斜1	43~47		1986	市埋文調報15
19	長七谷地2号	八戸市	58	58			BP5500年以降		15~20		1982	市埋文調報8
19	長七谷地	八戸市	75	75			中期以後	平49, 直24, 斜2	10~30		1979	県埋文調報51
19	長七谷地貝塚	八戸市	101	101			中期~晚期	直74, 平28	13~22		1980	県埋文調報57
20	長者森	八戸市	7	7				直4, 平3	65~70		1983	県埋文調報74
21	毛合清水(1)(2)	八戸市	4	4				平1, 直3	77		1989	市埋文調報29
22	鳥木沢	八戸市	1	1					60~65		1984	市埋文調報13
22	鳥木沢	八戸市	6	6				混:斜5, 平1	60~65	自然堆積	1985	市埋文調報17
23	土橋	八戸市	2	2			後期前葉以降	平行	140~172		1989	市埋文調報30
24	中崎	八戸市	1	1				直交	66~67		1995	市埋文調報64
25	葦窪	八戸市	5	5				直交	95~107		1984	県埋文調報84
26	咽平	八戸市	6	6			後期	平3, 直3	60~65		1991	市埋文調報43
27	豊巻沢	八戸市	9	9			前期~晚期	直7, 平2	170~175		1986	県埋文調報96
28	舟渡ノ上	八戸市	2	2			前期初頭	直交	35~36	自然堆積	1994	市埋文調報59
29	弥次郎窪	八戸市	3	3				直交	36~41		1990	県埋文調報128
30	湯浅屋新田(1)	八戸市	2	2					90~95		1984	市埋文調報13
31	湯浅屋新田(2)	八戸市	3	3				平行	93~94		1984	市埋文調報13
31	湯浅屋新田(2)	八戸市	2	2				平行	93~94		1987	市埋文調報19
32	和野前山	八戸市	108	108				直72, 平36	14~21		1984	県埋文調報82
33	野場(5)	階上町	1	1				平行	150	自然堆積	1993	県埋文調報150
34	石ノ窪(1)	南郷村	6	6				平5, 直1	210~217	人為・自然堆積	1982	県埋文調報69
35	石ノ窪(2)	南郷村	10	10			中期以後	斜交	200~205	自然堆積	1985	県埋文調報92
36	三合山	南郷村	1	1				直交	213	自然堆積	1982	県埋文調報69
37	田ノ上	南郷村	1	1				直交	200		1981	県埋文調報65
38	馬場瀬(2)	南郷村	1	1				直交	200		1982	県埋文調報70
39	四ツ役	南郷村	2	2				平1, 直1	175~190		1996	県埋文調報188
40	前比良	南部町	6	6			中期以後	直交	110	人為堆積2基	1988	県埋文調報108
41	西張(3)	福地村	3	3			後期以前	平2, 直1	23.5~27		1996	県埋文調報197
41	西張(3)	福地村	5	5			後期以前	平2, 直1	26~28		1997	県埋文調報213
42	雷	福地村	3	3				平2, 直1	90~100		1991	県埋文調報136
43	西山	福地村	9	9				直6, 平3	66~73	自然堆積	1991	県埋文調報136
44	館野	福地村	2	2			後期	平1, 直1	105~108		1989	県埋文調報119
45	幸神	倉石村	1	1			後期以前	斜交	80		1997	県埋文調報212
46	八盃久保2	倉石村	1	1				直交	85		1997	県埋文調報212
47	八盃久保3	倉石村	1	1				直交	85		1997	県埋文調報212
48	向山(4)	下田町	19	19				直15, 平4	15~40	人為・自然堆積	1991	県埋文調報134
49	下谷地(1)	下田町	1	1				平行	10		1988	県埋文調報109
50	中野平	下田町	16	16				平13, 直3	11~19		1991	県埋文調報134
50	中野平	下田町	27	27				平10, 直17	10~17		1996	町埋文調報7

No	遺跡名	市町村名	数量	A	B	C	時期	等高線	標高(m)	備考	発行年	文献
51	上蛇沢(1)	五戸町	9	9			中期末	平4, 斜5	87~95.5	自然堆積	1996	県埋文調報198
52	古街道長根	五戸町	2	2				平1, 直1	95		1976	県埋文調報29
53	堀切沢(2)	六戸町	10	10				平5, 直5	40~45	自然堆積	1992	県埋文調報141
54	堀切沢(3)	六戸町	9	9				平7, 斜2	45~50	自然堆積	1992	県埋文調報141
55	堀切沢(4)	六戸町	7	7				平4, 直3	50~52	自然堆積	1992	県埋文調報141
56	堀切沢(5)	六戸町	8	8				平5, 直3	43~45	自然堆積	1992	県埋文調報141
57	根井沼(1)	三沢市	2	2				平行	20~32	自然堆積	1988	市埋文調報4
58	小田内沼(1)	三沢市	2	2				平行	25	人為堆積	1988	県埋文調報107
59	小田内沼(4)	三沢市	4	4				平行	27.5~29	自然堆積	1992	市埋文調報10
60	上久保(1)	三沢市	10	10				平行	20~32	自然堆積	1995	市埋文調報12
61	平畠(3)	三沢市	3	3			後期	直交	24~25	自然堆積	1996	市埋文調報14
62	下夕沢	三沢市	25	25			前期中葉以降	平8, 直17	25~27	自然・人為堆積	1989	県埋文調報124
63	二ツ森貝塚	天間林村	3	3				直交	30.5~31		1996	村文化調報4
64	内蝦沢蝦夷館	東北町	7	7				直5, 平2	11~14		1990	町埋文調報2
65	搭ノ沢山(1)	東北町	1	1			前期以前	直交	80		1994	県埋文調報164
66	松原	上北町	4	4				直交	35~37	自然堆積	1983	県埋文調報77
67	富ノ沢(3)	六ヶ所村	1	1				直交	48~49		1993	県埋文調報147
68	家ノ前	六ヶ所村	3	3				斜交	22~23		1993	県埋文調報148
69	大石平	六ヶ所村	3	3				直交	47~48		1985	県埋文調報90
70	大石平	六ヶ所村	1	1				直交	45		1987	県埋文調報103
70	沖付(2)	六ヶ所村	1	1				平行	51		1979	県埋文調報48
70	沖附(2)	六ヶ所村	4	4				平2, 直2	54~58		1987	県埋文調報103
71	表館(1)	六ヶ所村	9	9				平行	10~14		1981	県埋文調報61
71	表館(1)	六ヶ所村	3	3				平行	8~18		1985	県埋文調報91
71	表館(1)	六ヶ所村	2	2				平1, 直1	13		1989	県埋文調報121
71	表館(1)	六ヶ所村	3	3				平行	10~15	人為堆積1, 自然堆積2	1990	県埋文調報126~127
72	上尾駒(2)	六ヶ所村	1	1				平行	40~46		1988	県埋文調報114
73	幸畑(3)	六ヶ所村	1	1				斜交	25		1997	県埋文調報222
74	幸畑(6)	六ヶ所村	4	4				直交	30		1997	県埋文調報222
75	幸畑(7)	六ヶ所村	12	12			後期初頭	直7, 平5	37~43	人為堆積2基	1990	県埋文調報125
76	新納屋(1)	六ヶ所村	3	3				直2, 平1	15	自然堆積	1976	県埋文調報28
77	新納屋(2)	六ヶ所村	1	1				直交	10~12	自然堆積	1981	県埋文調報62
78	鷹巣	六ヶ所村	3	3				平2, 直1	20	自然堆積	1983	県埋文調報63
79	千歳(13)	六ヶ所村	10	10				直6, 平4	80~90	自然堆積	1976	県埋文調報27
80	発茶沢(1)	六ヶ所村	1	1				平行	15	[小豎穴状遺構]	1974	県埋文調報9
80	発茶沢(1)	六ヶ所村	4	4				平行	16~18	自然堆積	1975	県埋文調報24
80	発茶沢(1)	六ヶ所村	430	430				直交	14~30	人為堆積1基	1982	県埋文調報67
80	発茶沢(1)	六ヶ所村	9	9				平行	26~30	自然堆積	1986	県埋文調報96
80	発茶沢(1)	六ヶ所村	36	36				直交	17~20	人為堆積2基	1988	県埋文調報116
80	発茶沢(1)	六ヶ所村	188	188			後期	直交	14~20		1989	県埋文調報120
80	発茶沢(1)	六ヶ所村	1	1				平行	18		1990	県埋文調報126
81	前坂下(1)(3)(5)~(8)	東通村	29	29				直22, 平7	8~26		1982	県埋文調報71
82	熊ヶ平	川内町	2	2				平行	25~26		1984	県埋文調報80
83	近野	青森市	1	1				直交	6~20		1977	県埋文調報33
84	螢沢	青森市	1	1			後期	直交	33		1979	青森市螢沢遺跡発掘調査団
85	山崎	今別町	7	7				直5, 斜2	9~30		1982	県埋文調報68
86	二ツ石	今別町	1	1			後期	平行	19~20	人為堆積	1989	県埋文調報117
87	源常平	浪岡町	4	4				平行	55		1978	県埋文調報39
88	山元(3)	浪岡町	17	17			中期末~後期前業	平12, 直5	29~33		1994	県埋文調報159
89	実吉	五所川原市	1	1			前期	平行	13		1997	県埋文調報207
90	砂沢平	大鰐町	3	3				平行	150	自然堆積, [土坑]	1980	県埋文調報57
91	大面	碇ヶ関村	1	1				直交	182	自然堆積, [溝状土坑]	1980	県埋文調報55
92	津山	深浦町	6	6				平5, 直1	62		1997	県埋文調報221
93	野尻(2)	浪岡町	5	5				平2, 直3	40~41		1995	県埋文調報186
94	野尻(4)	浪岡町	4	4				平1, 直3	41~43		1995	県埋文調報186

(注) 県埋文調報: 「青森県埋蔵文化財調査報告書」、青森県教育委員会/市埋文調報: 「八戸市埋蔵文化財調査報告書」、八戸市教育委員会、「三沢市埋蔵文化財調査報告書」、市教育委員会/町埋文調報: 「下田町埋蔵文化財調査報告書」、下田町教育委員会、「東北町埋蔵文化財調査報告書」、東北町教育委員会: 「天間林村文化財調査報告書」、天間林村教育委員会

北海道

No	遺跡名	市町村名	数量	A	B	C	時期	等高線	標高(m)	備考	発行年	文献
1	石川1	函館市	61	61			後期以前	平35, 直26	30	2~4基毎の配列有り	1988	北埋調報45
2	石倉貝塚	函館市	2	2				平1, 斜1	45.5~49		1997	北埋文年報8
2	石倉貝塚	函館市	29	29				直14, 平10	45~50		1995	市教育委員会
2	石倉貝塚	函館市	27	27				直13, 平13	45~50		1996	市教育委員会
3	上湯川町	函館市	1	1				平行	34		1982	市教育委員会
4	権現台場	函館市	26	26			中期終末以降	平19,直7	49~52		1981	市教育委員会
4	権現台場	函館市	12	12			中期前葉	直8, 平4	49~52		1990	市教育委員会
5	サイベ沢	函館市	3	3							1985	市教育委員会
5	サイベ沢	函館市	6	6				平4, 斜2	29~30	自然堆積	1986	市教育委員会
6	豊原1	函館市	8	5	3						1987	市教育委員会
7	豊原2	函館市	109	106		3		直57, 平49	40~50	杭痕:3基, 配列有り	1994	市教育委員会
8	中野A	函館市	75	75				平57, 直18	40~50		1977	市教育委員会
8	中野A	函館市	7	7			4470±100	平4, 直3	49~50		1979	市教育委員会
8	中野A	函館市	51	51			早~前	平34, 直17	44~50	杭痕:4基	1991	北埋調報79-84
9	中野B	函館市	22	22			早期	直12, 平10	43~46		1977	市教育委員会
9	中野B	函館市	13	13				直7, 平6	42~45		1996	北埋調報97
9	中野B	函館市	29	29				直19, 平10	45~50	H5年調査	1994	北埋文年報6
9	中野B	函館市	97	97			早期	平52, 直45	40~50	H6年調査	1995	北埋文年報7
9	中野B	函館市	86	86				直49, 平37	40~50	H7年調査	1996	北埋文年報8
10	西桔梗	函館市	17	17							1974	函館園開発事業団
11	西桔梗1	函館市	1	1				斜交	17.5		1996	北埋調報99
12	函館空港第1地点	函館市	54	54				平10, 直44	26~32	自然堆積	1987	42年度考古学協会発表要旨
13	函館空港第4地点	函館市	56	56			前期以降	平40, 直16	40~50		1969	市教育委員会
13	函館空港第4地点	函館市	108	108				平74, 直34	39~44		1977	市教育委員会
14	日吉町1	函館市	5	5				直交	17.5~15	自然堆積	1978	北海道文化財保護協会
15	見晴町B	函館市	4	4				直3, 平1	80~90		1979	市教育委員会
16	釜谷	木古内町	2	2				平行	20		1996	町教育委員会
17	新道4	木古内町	4	3	1	後期		直交	20	杭痕:C類1基	1984	北埋調報43
18	森越	知内町	2	2				斜交	15~19		1975	町教育委員会
19	湯の里4	知内町	1	1				平行	30~37	自然堆積	1987	北埋調報18
20	湯の里5	知内町	1	1			中期~後期初頭	直交	35		1987	北埋調報18
21	小浜	松前町	1	1				平行	18~22		1975	町教育委員会
22	大津	松前町	7	4	3	前期		平行	31		1974	町教育委員会
23	札前	松前町	6	6				直1, 平5	30~33		1985	町教育委員会
24	白坂第1地点	松前町	10	10				直交	29~30	杭痕:1基	1983	町教委:本報告
25	白坂第3地点	松前町	17	17				平2, 直17	55~59		1983	町教委:本報告
26	白坂第5地点	松前町	7	7				斜5, 平2	53~55.5		1983	町教委:本報告
27	白坂第7地点	松前町	8	8				平2, 斜3, 直3	42~46		1983	町教委:本報告
28	白坂第8地点	松前町	20	19	1			平6, 斜5, 直2	42~46		1983	町教委:本報告
29	白坂第9地点	松前町	15	8	7			直13, 平2	39~40		1983	町教委:本報告
30	高野2	松前町	1	1				斜交	21		1986	松前町郷土資料館
31	棚石	松前町	10	10			中期中葉	平7, 直3	32~34		1978	町教育委員会
32	茂草B	松前町	3	3				平行	30	小ビット(杭):1基	1979	町教育委員会
33	大岱沢A	上ノ国町	9	8	1			平1, 直8	51~54		1987	町教育委員会
34	新村4	上ノ国町	8	8				直交	11~16	自然堆積	1987	町教育委員会
35	豊田西	上ノ国町	1	1				直交	22.5	自然堆積	1985	北埋調報31
36	目名尻	厚沢部町	10	7	3			平3, 直7	10~20		1979	町教育委員会
37	石倉野3	上磯町	1	1			後期	斜交	31	杭痕:2基	1992	町教育委員会
38	大中山13	七飯町	1	1				平交	85.8	H6年調査	1995	北埋文年報7
39	姥子用2	戸井町	5	4	1	中期		平交	10~20	自然堆積	1995	町教育委員会
40	釜谷2	戸井町	108	108			中期末以降	直61, 平46	38~46		1988	町教育委員会
41	戸井貝塚	戸井町	9	9					4.5~7		1993	町教育委員会
42	白尻B	南茅部町	1	1				平行	39		1985	町教育委員会
43	川汲B	南茅部町	1	1				平行	33.5		1986	町教育委員会
44	後駒B	南茅部町	8	8			中期	直交	43~45		1991	南茅部町埋蔵文化財調査団
45	木直C	南茅部町	1	1				平行	16		1981	町教育委員会
46	豊崎N	南茅部町	1	1			中期末葉~後駒末葉	直交	65~80		1991	町教育委員会
47	ハマナス野	南茅部町	2	2				直交	21		1990	町教育委員会
47	ハマナス野	南茅部町	4	4				平行	22		1991	町教育委員会

No	遺跡名	市町村名	数量	A	B	C	時期	等高線	標高(m)	備考	発行年	文献
48	元和	乙部町	3	3				直交	46~50		1976	町教育委員会
49	日ノ浜砂丘1	恵山町	3	3				直交	9.5		1986	町教育委員会
50	茂尻C	江差町	8	8				直交	28~30		1989	町教育委員会

(註) 北海道埋蔵文化財調査年報「北海道埋蔵文化財調査センター」

北理年報「調査年報」北海道埋蔵文化財センター

岩手県

No	遺跡名	市町村名	数量	A	B	C	時期	等高線	標高(m)	備考	発行年	文献
1	大堤II	軽米町	17	2	0	15	A中期, C前期	平坦	245~255	配列規則的, まとめあり	1987	県文振事業団報告書115集
2	大日向II	軽米町	1	1	0	0	時期不明	斜	168~173		1985	県文振事業団報告書100集
3	呂屋敷Ia	軽米町	4	4	0	0	時期不明	垂, 斜	171~185	雪谷川(新井田川支流)	1983	県埋文センター報告書第81集
4	呂屋敷Ib	軽米町	7	7	0	0	時期不明	混	174~194		1983	県埋文センター報告書第83集
5	君成田N	軽米町	2	2	0	0	時期不明	斜, 平行	220~230		1983	県埋文センター報告書第82集
6	橿口I	軽米町	2	2	0	0	縄文時代前中期以降	平行2	248~256	中層浮石層を埋込む	1992	県文化振興事業団報告書175集
7	駒坂	軽米町	24	16	0	8			300	平行に並ぶ	1986	県文化振興事業団報告書98集
8	馬場野I	軽米町	5	5	0	0	中期末以降	混	196~211		1983	県埋文センター報告書68集
9	馬場野II	軽米町	4	4	0	0	時期不明	垂, 平行	195~215		1986	県文化振興事業団報告書99集
10	伊保内Ia, Ib	九戸村	2	2	0	0	時期不明	垂, 斜	301~311		1983	県埋文センター報告書53集
11	江刺家	九戸村	4	4	0	0	時期不明	垂3, 斜1	260~280		1984	県埋文センター報告書70集
12	沖I	二戸市	3	3	0	0	縄文時代	平坦	85~86	立地考察あり 馬淵川流域	1990	県文化振興事業団報告書152集
13	菅波I	九戸村	2	2	0	0	縄文時代後期前業	斜	230~240	瀬月内川(新井田川支流)	1988	県文化振興事業団報告書139集
14	澁谷III	九戸村	5	0	5	0					1983	県埋文センター報告書49集
15	葉の木沢	九戸村	9	9	0	0	縄文時代早期以降	平坦	230~240	杭痕あり, 薙穴? 南部浮石侵入	1990	県文化振興事業団報告書154集
16	馬場II	九戸村	6	5	1	0	縄文時代	平坦	85~86	乾乳, 馬淵川流域, 立地考察あり	1990	県文化振興事業団報告書152集
17	丸木橋	九戸村	2	1	1	1	縄文時代早期以降	?	220	瀬月内川(新井田川支流)	1993	県文化振興事業団報告書189集
18	一戸城跡	一戸町	2	2	0	0	時期不明	平行1	183~186	馬淵川流域	1983	町文化財調査報告書第6集
19	上野一昭和58年度-	一戸町	8	8	0	0	時期不明	混	170~190	馬淵川流域	1984	町文化財調査報告書第7集
20	上野B	一戸町	5	5	0	0	時期不明			町教委	1983	一戸バイパス関係埋文書(4)
21	北館B	一戸町	2	2	0	0		斜	175~180	陥穴状土壇	1981	一戸バイパス関係埋文書(2)
22	小井田III	一戸町	75	75	0	0					1985	県文化振興事業団報告書85集
23	御所野	一戸町	9	9	0	0		混			1992	町文化財調査報告書29集
24	親久保I, II, III	一戸町	29	26	0	3		混	193~222	配列規則的, 杭痕	1987	県文化振興事業団報告書115集
25	田中3·4	一戸町	6	6	0	0	時期不明	混	173~182	町教委	1981	一戸バイパス関係埋文書(2)
26	田中5	一戸町	1	1	0	0	時期不明			町教委	1983	一戸バイパス関係埋文書(5)
27	鳥越館跡	一戸町	6	6	0	0	時期不明	斜	150~155	馬淵川流域	1988	町文化財調査報告書第21集
28	平船III	一戸町	5	3	2	0	早期		165~167	小井田川(馬淵川流域)	1984	県埋文センター報告書76集
29	青久保	二戸市	3	2	0	1	前期, 後期	斜	255~268	2基並列, 杭痕あり	1987	県文化振興事業団報告書118集
30	荒谷A	二戸市	4	4	0	0					1983	県埋文センター報告書57集
31	上田面	二戸市	6	6	0	0					1981	県埋文センター報告書23集
32	大久保	二戸市	100	72	4	24	早·前·後期	混	304~322	時期別のまとめ	1986	県文化振興事業団報告書101集
33	長瀬A	二戸市	4	4	0	0					1982	県埋文センター報告書35集
34	長瀬B	二戸市	8	8	0	0			100		1982	県埋文センター報告書36集
35	長瀬C·D	二戸市	2	2	0	0			100		1981	県埋文センター報告書22集
36	西久保	二戸市	5	5	0	0					1986	県文化振興事業団報告書101集
37	馬立I, II	二戸市	43	41	2	0	時期不明	混	259~278	並列あり	1987	県文化振興事業団報告書115集
38	馬場	二戸市	3	3	0	0	縄文時代	平坦	82~85	馬淵川流域	1990	県文化振興事業団報告書137集
39	飛鳥台地I	淨法寺町	137	126	0	11	縄文時代		200~220	考察·杭痕あり	1987	県文化振興事業団報告書101集
40	安比内I	淨法寺町	41	41	0	0		平22, 垂9, 斜10	215~219	配列等間隔, 考察あり	1986	県文化振興事業団報告書106集
41	大久保I	淨法寺町	4	4	0	0	時期不明	斜	237~246	安比川流域; 配列規則的, 杭痕	1985	県文化振興事業団報告書90集
42	柿ノ木平III	淨法寺町	34	29	3	2	中期後葉		260~280	新洪(安比川支流), 分岐·杭痕あり	1985	県文化振興事業団報告書89集
43	海上I, II	淨法寺町	21	0	21	0	後期	混	235~264	配列規則的, 考察あり, 杭痕	1985	県文化振興事業団報告書90集
44	桂平	淨法寺町	36	14	3	19	縄文時代	重9, 平行5	235~240	杭痕	1986	県文化振興事業団報告書110集
45	五庵I	淨法寺町	81	40	7	34	縄文時代~平安時代		240~251	安比川流域, 杭痕, 考察	1985	県文化振興事業団報告書97集
46	五庵III	淨法寺町	3	3	0	0					1987	県文化振興事業団報告書101集
47	田余内I	淨法寺町	15	12	0	3	前期	斜6, 垂6	250~275	安比川流域; 杭痕	1986	県文化振興事業団報告書105集
48	沼久保	淨法寺町	26	24	2	0	縄文時代後期	重13, 平行4	230~245	安比川流域; 杭痕	1987	県文化振興事業団報告書111集
49	広沖	淨法寺町	7	5	2	0		垂5, 平行2	198~204	杭痕あり	1986	県文化振興事業団報告書111集
50	荒屋II	安代町	32	18	14	0	前期以降	混	335	配列等間隔, 杭痕	1981	県埋文センター報告書21集
51	有矢野	安代町	3	3	0	0	時期不明	平行2, 斜1	295~310	杭痕	1982	県埋文センター報告書38集
52	上の山VII	安代町	1	1	0	0	時期不明	斜	310~330	安比川流域, 杭痕	1983	県埋文センター報告書60集
53	上の山X	安代町	3	3	0	0	時期不明	混	310~315		1982	県埋文センター報告書38集

No	遺跡名	市町村名	数量	A	B	C	時期	等高線	標高(m)	備考	発行年	文献
54	上の山館	安代町	2	2	0	0	後期初頭以降	平行	311～313		1982	県埋文センター報告書40集
55	扇畠I・II	安代町	5	3	0	0	時期不明	斜	380～400	安比川流域	1982	県埋文センター報告書39集
56	越戸II	安代町	2	2	0	0	時期不明	垂	405～418		1981	県埋文センター報告書21集
57	湯の沢III	安代町	4	0	4	0	中期前葉以降	平行	305～320	火山灰分析、考察あり	1984	県埋文センター報告書79集
58	水神	安代町	40	11	29	0	後期		261～287	安比川(馬瀬川流域)、杭痕あり	1986	県文化振興事業団報告書96集
59	荒木田II	西根町	1	1	0	0	時期不明	垂	315～340		1985	県文化振興事業団報告書92集
60	野口II	西根町	2	2	0	0	縄文時代	平行2	315～326	涼川(北上川支流)	1988	県文化振興事業団報告書144集
61	稲荷	都南村	10	10	0	0	時期不明	平坦	126～127	溝状土壤	1979	県文化財調査報告第32集
62	湯沢	都南村	170	170	0	0	中期末以降		197～208	土壤で陥穴の可能性	1978	県埋文センター報告書2集
63	湯沢(A)-(B)	都南村	5	5	0	0	時期不明	平坦	126～127	湯沢川 溝状土壤	1979	県文化財調査報告第32集
64	長者屋敷	松尾村	2	2	0	0				県埋文センター報告書	1980	'80～'84、12、20、77集
65	野歎	松尾村	1	1	0	0			300		1980	県埋文センター報告書11集
66	卯遠坂	滝沢村	1	1	0	0	時期不明	垂	207～209	諸葛川(季石川支流) 溝状土壙	1979	県文化財調査報告第31集
67	大久保	滝沢村	5	5	0	0	時期不明	斜	156～157	溝状土壙、考察-発掘一覧表あり	1979	県文化財調査報告第31集
68	大綴	滝沢村	13	13	0	0	縄文時代	平坦		溝状土壙	1979	県文化財調査報告第31集
69	風林D	滝沢村	4	4	0	0	時代不明	平坦	216～221		1993	村文化財調査報告書第23集
70	高屋敷(II)	滝沢村	1	1	0	0	時期不明	平行	152～154		1979	県文化財調査報告第31集
71	高柳	滝沢村	11	11	0	0	時期不明	斜	138～142	諸葛川(季石川支流)	1987	村文化財調査報告書第7集
72	高柳	滝沢村	32	32	0	0	時期不明	斜		陥穴?	1979	県文化財調査報告書第31集
73	高辯遺跡-第3次-	滝沢村	2	2	0	0	時期不明	斜行	138～142	諸葛川(季石川支流)	1988	村文化財調査報告書第9集
74	高森	滝沢村	21	19	2	0	時期不明	混	170～180	村教委(2次)87～6集	1990	村文化財調査報告書第13集
75	野沢	滝沢村	1	1	0	0	時期不明	平坦			1988	村文化財調査報告書第10集
76	野沢I・II	滝沢村	8	8	0	0	時代不明	垂	210～224		1991	村文化財調査報告書第18集
77	野沢III	滝沢村	7	7	0	0	縄文時代前期	混	244～250	村内陥穴集成、陥穴?	1994	村文化財調査報告書第26集
78	葉の木沢I	滝沢村	4	4	0	0	時代不明	斜3、平行1	200～210			村文化財調査報告書第集
79	柳沢	滝沢村	2	2	0	0	時期不明	斜	270～300		1988	村文化財調査報告書第10集
80	湯舟沢	滝沢村	20	20	0	0	時期不明	混	182～193	市兵衛川(諸葛川支流)	1986	村文化財調査報告書第2集
81	湯舟沢XIV	滝沢村	4	4	0	0	時期不明	垂、斜	176～183		1990	村文化財調査報告書第12集
82	耳取	滝沢村	42	31	6	5	縄文時代中期	斜	145～150		1986	村文化財調査報告書第3集
83	室小路II	滝沢村	10	10	0	0	時期不明	混	145～146	諸葛川(季石川支流)	1988	村文化財調査報告書第9集
84	桜松	季石町	5	5	0	0	時期不明	斜	170	黒沢川(季石川支流)	1982	県埋文センター報告書29集
85	塩ヶ森	季石町	3	3	0	0	時期不明		186～188	3基並列	1982	県埋文センター報告書31集
86	下平	季石町	34	34	0	0					1981	県埋文センター報告書14集
87	下長谷地	季石町	4	4	0	0		斜	190～195	季石川流域	1982	県埋文センター報告書28集
88	上八木田IV	盛岡市	3	3	0	0	時期不明	垂2、斜1	280～285	中津川(季石川支流)	1992	県文化振興事業団報告書177集
89	上八木田V	盛岡市	3	3	0	0		平行2、斜1	270～285	中津川(季石川支流)	1992	県文化振興事業団報告書177集
90	黒石野平	盛岡市	1	1						西田遺跡の一部	1990	県文財調査報告第86集
91	小屋塚	盛岡市	2	1	0	1	時期不明	斜	133～135		1995	小屋塚遺跡-第1～27次調査報告書
92	境橋	盛岡市	2	2	0	0	時期不明	平坦	136	諸葛川(季石川支流)	1986	県文化振興事業団報告書104集
93	下猿田III	盛岡市	6	6	0	0	時期不明	平行	175～182	配列規則的	1981	県埋文センター報告書16集
94	前九年I	盛岡市	5	4	0	1	大本8a式以前			V字状土坑の記載	1979	県文化振興事業団報告書35集
95	前九年II	盛岡市	1	1	0	0	時期不明	平坦	132	溝状ピット一覧表あり	1979	県文化財調査報告第35集
96	大新町(大館遺跡群)	盛岡市	5	5	0	0	大本式以降			堆積土から土器多数	1983	大館遺跡群S57年調査概報
97	繫VI	盛岡市	1	1	0	0	時期不明	垂	180～184		1980	県埋文センター報告書13集
98	長烟	盛岡市	1	1	0	0	時期不明		142		1979	県文化財調査報告第35集
99	観音堂遺跡-第4-7次-	大迫町	8	8	0	0	縄文時代	混	164	町調査報告書'83～8集	1991	町埋文調査報告第20集
100	蛭塚森	大迫町	5	5	0	0	縄文前期以降	斜5	260	溝状ピット考察あり	1992	県文化振興事業団報告書174集
101	一本松	矢巾町	2	1	1	0	時期不明	平坦	127～128	溝状土壤、杭痕(B1)	1979	県文化財調査報告第32集
102	大渡野	矢巾町	1	1	0	0	時期不明	平坦	131		1979	県文化財調査報告第32集
103	御嶽50年度発掘調査報告	矢巾町	2	2	0	0	時期不明				1986	町教委 德丹城跡
104	尼掛	紫波町	1	1	0	0	縄文時代中期以前		120	渋名川(北上川支流)	1988	尼掛遺跡発掘調査報告書
105	稻村	紫波町	3	3	0	0					1981	県埋文センター報告書19集
106	上平沢新田	紫波町	14	14	0	0	時期不明	平坦	134	溝状土壤	1980	県文化財調査報告第52集
107	栗田III	紫波町	56	50	0	6	早期以降			溝状土壤、配列規則的	1982	県文化財調査報告第69集
108	田頭	紫波町	2	0	0	2	縄文時代	?	102	杭痕(C2)	1979	県文化財調査報告第35集
109	中田	紫波町	1	1	0	0				北上川流域 杭痕	1981	県埋文センター報告書19集
110	西田	紫波町	14	5	0	9		混	102～104	北上川流域 杭痕	1980	県文化財調査報告第51集
111	西田東	紫波町	187	183	4	0	縄文時代中期以前か	垂直、斜	84～92	分類、考察あり	1995	県文化振興事業団報告書221集
112	古館駅前	紫波町	1	1	0	0	時期不明	?	108	V字状土壤	1979	県文化財調査報告第35集
113	古館橋	紫波町	3	3	0	0	時期不明	?			1979	県文化財調査報告第35集
114	墳館	紫波町	3	3	0	0	時期不明	斜	175～189	溝状土壤、配列規則的	1980	県文化財調査報告第52集

No	遺跡名	市町村名	数量	A	B	C	時期	等高線	標高(m)	備考	発行年	文献
115	宮手	紫波町	37	29	8	0	縄文時代	平坦	132	溝状土壙、配列等間隔	1980	県文化財調査報告第52集
116	南日詰	紫波町	18	18	0	0	縄文中期末葉以降	平坦	102~103	覆土に遺物多い	1988	県文化振興事業団報告書136集
117	岩崎台地遺跡群	北上市	2	0	0	2	時期不明	平坦	100~110	杭痕あり	1992	県文化振興事業団報告書176集
118	梅ノ木台地Ⅰ	北上市	1	1	0	0	時期不明	平坦	91~93	陥穴?杭痕あり	1992	県文化振興事業団報告書162集
119	上鬼柳Ⅰ・IV	北上市	35	17	16	2	時期不明	平坦	91~93	陥穴?杭痕あり	1992	県文化振興事業団報告書160~179集
120	上反町	北上市	1	1	0	0	時期不明	平坦	123~124		1992	県文化振興事業団報告書181集
121	館N	北上市	2	2	0	0	時期不明	平坦	51~67	陥穴?杭痕あり	1993	県文化振興事業団報告書187集
122	中屋敷	北上市	5	2	2	1	時期不明	斜	127	和賀川(北上川支流)、杭痕あり	1993	県文化振興事業団報告書182集
123	成田	北上市	4	1	0	3	時期不明	斜	79~84		1991	市文化財調査報告第64集
124	比久尼沢	北上市	4	2	0	2	縄文時代	平坦			1984	市文化財調査報告第36集
125	藤沢I-c	北上市	71	71	0	0					1978	県文化振興事業団報告書1集
126	藤沢	北上市	11	11	0	0	縄文時代	平行、平坦	84~90		1982	県文化財報告第72集
127	坊館跡	北上市	2	2	0	0	縄文時代	斜2	73~80		1988	県文化振興事業団報告書145集
128	法量野Ⅰ	北上市	20	6	9	5	時期不明	垂直	127	和賀川(北上川支流)、杭痕	1993	県文化振興事業団報告書182集
129	八幡野Ⅱ	北上市	22	12	9	1	時期不明	平坦	133~127	和賀川(北上川支流)、杭痕	1993	県文化振興事業団報告書183集
130	石曾根	北上市	19	0	1	18	縄文早期末葉以降	平坦	127~124	透水性粘土質な火山灰分析、杭痕	1992	県文化振興事業団報告書165集
131	桜ノ木Ⅱ、Ⅲ~Ⅵ	北上市	11	7	0	4	平安時代以前			溝状土壙、陥穴?杭痕あり	1981	県文化財調査報告第58集
132	煤孫	北上市	11	7	4	0		平坦	120~128	和賀川流域	1994	県文化振興事業団報告書196集
133	月館跡	北上市	4	1	3	0	縄文時代	平坦	120~130	杭痕あり	1992	県文化振興事業団報告書149集
134	鳥谷脇Ⅱ	北上市	8	8	0	0	時期不明	垂、斜			1988	市文化財調査報告書第19集
135	林崎館	北上市	42	4	11	27	縄文時代中期後葉	平坦	127~130	和賀川(北上川支流)、杭痕	1992	県文化振興事業団報告書163集
136	本郷	北上市	45	4	0	41	縄文時代中期以降	平坦	123~130	火山灰分析、杭痕	1992	県文化振興事業団報告書184集
137	寒風	遠野市	3	3	0	0			255~260		1982	県埋文センター報告書43集
138	高瀬Ⅰ	遠野市	30	22	2	6	縄文時代	混	269~273	考察あり、杭痕	1992	県文化振興事業団報告書155集
139	高瀬Ⅱ	遠野市	14	14	0	0	時期不明	平坦、斜	269~271	考察あり	1991	市埋蔵文化財調査報告書第4集
140	蓬田	遠野市	21	18	0	3	時期不明	平坦、斜	265		1991	市埋蔵文化財調査報告書第3集
141	上新町	久慈市	1	1	0	0	時期不明	平坦	40~41	溝状土壙	1979	市埋蔵文化財調査報告書第3集
142	源道	久慈市	17	17	0	0	縄文時代	?	22~40	まとめあり	1988	県文化振興事業団報告書138集
143	小袖Ⅱ	久慈市	6	6	0	0	時期不明	斜、垂	158~162		1987	市埋蔵文化財調査報告書第6集
144	小屋畠	久慈市	6	6	0	0	時期不明	混	30~38	久慈川流域	1984	県埋文センター報告書80集
145	田中Ⅳ	久慈市	14	13	0	1	縄文時代	混			1987	県文化振興事業団報告書117集
146	中長内	久慈市	38	34	0	4	時期不明	混	31~42	市埋文調査報告書M-8集	1988	市埋蔵文化財調査報告書10集
147	鼻館跡	久慈市	85	85	0	0			30	貝川(久慈川へ別流)、杭痕あり	1992	県文化振興事業団報告書171集
148	三崎(田)	久慈市	7	7	0	0	時期不明	斜	181~182	長椅円形土壙	1978	市埋蔵文化財調査報告書第2集
149	明神	久慈市	1	1	0	0	時代不明	平行	20~30		1992	県文化振興事業団報告書150集
150	青猿Ⅰ	宮古市	4	4	0	0	時期不明	平行、斜	58~60	閉伊川流域	1988	市埋蔵文化財調査報告書14
151	長根Ⅰ	宮古市	5	3	2	0	時期不明	混	26~44	閉伊川流域	1990	県文化振興事業団報告書146集
152	払川Ⅰ	宮古市	9	5	4	0	時期不明	平行、斜	21~24	杭痕、土壙-陥穴の可能性	1991	市埋蔵文化財調査報告書29
153	友沼Ⅲ	陸前高田市	7	5	2	0	時期不明	平行	17~21	杭痕あり	1990	市文化財調査報告書第14集
154	白幡林	石鳥谷町	4	2	0	2	時期不明		99~101		1996	白幡林遺跡発掘調査報告書
155	川口Ⅰ	岩手町	29	13	7	9	時期不明	混		柱礎跡、配列跡、杭痕あり	1984	県埋文センター報告書83集
156	川原本	岩手町	20	20	0	0	時期不明	平行	299~300	付属するピット2基	1995	町埋蔵文化財調査報告書第4集
157	尼坂遺跡-第2~4次-	胆沢町	19	14	3	2	時期不明	平坦		杭痕92~22集		町教委93~24~94~25集
158	国分	胆沢町	6	6	0	0	時期不明	平坦			1991	町埋蔵文化財調査報告書21集
159	小十文字	胆沢町	7	7	0	0	時期不明	平坦		V字状土壙	1981	町埋蔵文化財調査報告書11集
160	揚場古墳・五葉館跡	金ヶ崎町	1	1	0	0	時期不明	平坦	65		1991	町文化財調査報告書21集
161	上原	金ヶ崎町	8	0	4	4	時期不明	平坦	70~80		1994	町文化財調査報告書31集
162	柏山館跡	金ヶ崎町	8	8	0	0	時期不明		77~79	分類あり	1990	町文化財調査報告書18集
163	館山	金ヶ崎町	76	21	14	41	時期不明		80~90		1983	県埋文センター報告書65集
164	和光6区	金ヶ崎町	2	0	2	0	縄文時代	斜	150~160		1985	県文化振興事業団報告書88集
165	篠間館	花巻市	71	45	3	23	縄文時代		99~101	配列等間隔	1987	県文化振興事業団報告書115集
166	万丁目	花巻市	3	3	0	0	時期不明	平坦	96	杭痕	1986	県文化振興事業団報告書102集
167	駒上①	水沢市	5	5	0	0		混	63~64	溝状土坑、考察あり	1982	市文化財報告書第7集
168	袖矢地	水沢市	12	4	0	8					1981	県文化財報告第60集
169	西大畑	水沢市	4	4	0	0					1981	県文化財報告第60集
170	東大畑	水沢市	11	0	7	4	時期不明	平坦		杭痕あり	1982	県埋文センター報告書44集
171	南矢中	水沢市	39	35	1	3					1981	県文化財報告第60集
172	薪平	江釣子村	1	1	0	0	時期不明	平坦	53		1985	県文化振興事業団報告書91集
173	猫谷地	江釣子村	3	3	0	0	時期不明	平坦	71~72	3基並列	1982	県文化財報告第71集
174	大平	一関市	15	14	1	0	時期不明	斜、垂	78~82		1984	市教委 狐海寺城跡・大平遺跡
175	富周館	藤沢町	1	1	0	0	時期不明	斜	116		1994	町文化財調査報告書第13集
176	上鬼柳Ⅱ	北上市	4	3	0	1	時期不明	斜	96~97	杭痕あり、和賀川流域	1992	県文化振興事業団報告書161集

No	遺跡名	市町村名	数量	A	B	C	時期	等高線	標高(m)	備考	発行年	文献
177	良角子久保Ⅵ	軽米町	17	6	0	11		平行、斜	250~253		1988	県文化振興事業団報告書129集
178	平沢Ⅰ	久慈市	38	38	0	0		混	106~110		1988	県文化振興事業団報告書125集
179	水吉Ⅵ	軽米町	22	1	0	21			98~110	杭痕あり	1996	県文化振興事業団報告書219集

(註) 県文化振興事業団報告書: 「財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書」財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

県埋文センター報告書: 「財岩手県埋文センター文化財調査報告書」財岩手県埋蔵文化財センター

秋田県

No	遺跡名	市町村名	数量	A	B	C	時期	等高線	標高(m)	備考	発行年	文献
1	上ノ山Ⅱ	能代市	2	2	0	0	時期不明	斜1、平行1	30	米代川流域	1986	県教委第137集
2	金山館	能代市	1	1	0	0	時期不明	平坦	20	米代川流域	1986	市教委・金山館遺跡報告書
3	石丁	能代市	2	2	0	0	時期不明	平行、斜	30~32		1989	県教委第178集
4	十二林	能代市	8	8	0	0	時期不明	平行、斜	20~27		1989	県教委第178集
5	館ノ下Ⅰ	能代市	1	1	0	0					1979	県教委第62集
6	福田	能代市	1	1	0	0	時期不明	斜	20~30		1989	県教委第178集
7	腹敷の沢	能代市	10	10	0	0	時期不明	垂5、斜	36~38	米代川流域	1982	県教委第94、97集
8	土井	八森町	2	2	0	0	時期不明	斜、平行	50~70		1984	県教委第111集
9	中田面	崎浜村	5	5	0	0	時期不明	混	30		1980	県教委第74集
10	大岱Ⅰ	小坂町	2	2	0	0	時期不明	平行、斜	231~235		1984	県教委第109集
11	白長根館Ⅰ	小坂町	7	7	0	0	時期不明	?	215~220		1984	県教委第120集
12	はりま館	小坂町	14	14	0	0		垂、斜	200~203	配列等間隔、小坂川流域	1984	県教委第109集
13	鳶ヶ長根Ⅳ	大館市	1	1	0	0	時期不明	?	115	米代川流域	1984	県教委第84集
14	藤株	鷹巣町	2	2	0	0	時期不明	平坦	40	小森川(米代川流域)	1981	県教委第85集
15	竜毛沢館	二ツ井町	3	3	0	0	縄文時代	斜		米代川流域	1990	県教委第188集
16	石神	大曲市	2	2	0	0	時期不明	斜	65~75	松浦瀬、相馬の竪穴式	1990	県教委第191集
17	案内Ⅵ	鹿角市	1	1	0	0	時期不明	?	220~240		1984	県教委第115集
18	太田谷地館	鹿角市	3			3					1989	県教委第183集
19	大湯環状列石	鹿角市	26	26	0	0	縄文時代後期	斜8、垂9、平行1	150~190	'86'88'91'92'95市姫	31·35·42·43·52·54集	
20	柏木森	鹿角市	1	1	0	0	時期不明		200		1982	県教委第105集
21	北の林Ⅰ	鹿角市	16	16	0	0		垂、斜	200~205	米代川流域	1982	県教委第89集
22	北の林Ⅱ	鹿角市	21	21	0	0	時期不明	混	200	配列規則的	1981	県教委第90集
23	妻の神Ⅲ	鹿角市	13	13	0	0	時期不明	平行、斜	161~163	配列等間隔	1984	県教委第108集
24	猿ヶ平Ⅰ	鹿角市	1	1	0	0	時期不明	斜	203~205		1982	県教委第91集
25	猿ヶ平Ⅱ	鹿角市	2	2	0	0	時期不明	平行、斜	164	米代川流域	1983	県教委第99集
26	下砂沢	鹿角市	1	1	0	0	時期不明	垂	160~180	大湯川(米代川流域)	1990	市教委第40集
27	下乳牛	鹿角市	1	1	0	0	時期不明	垂	138	米代川流域	1984	県教委第119集
28	高市向館	鹿角市	2	2	0	0	時期不明		150~152	間瀬川	1982	市教委第22集
29	中の嶋	鹿角市	1	1	0	0	時期不明	垂	180~183	米代川流域	1982	県教委第105集
30	鳴子台	八竜町	6	5	0	1	時期不明	斜、平行	34		1992	県教委第230集
31	八幡台	八竜町	2	2	0	0	時期不明	垂、平行	19~33		1992	県教委第230集
32	大烟台	男鹿市	2	2	0	0	時期不明	斜	40		1979	日本鉛業株式会社船川製油所
33	三十刈	男鹿市	4	2	0	2	時期不明	斜、垂	30~36	陥穴?杭痕あり	1984	県教委第110集
34	上の山Ⅱ	協和町	6	6	0	0	時期不明	平坦	50	淀川(雄物川流域)	1988	県教委第166集
35	館野	協和町	1	1	0	0	時期不明	平坦	45	淀川(雄物川流域)	1988	県教委第166集
36	半仙	協和町	8	3	0	5	時期不明	平行2、斜1	21~32	陥穴?杭痕あり	1989	県教委第180集
37	上野台	西仙北町	1	1	0	0	時期不明	斜	55~60	雄物川流域	1989	県教委第180集
38	払田櫛跡	仙北町	4	4	0	0	時期不明	平坦	35		1992	県教委第225集
39	下岩ノ沢	仁賀保町	1	1	0	0	縄文時代	垂	66	大沢川流域	1986	市教委・下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書
40	地蔵田A	秋田市	1	1	0	0	時期不明	斜	30	岩見川(雄物川支流)	1994	秋田新都市開発整備事業課
41	下堤C	秋田市	1	1							1987	市教委・秋田新都市開発整備事業課
42	下堤D	秋田市	4	4	0	0	時期不明	?	40		1982	市教委・下堤D遺跡報告書
43	諏訪ノ沢	秋田市	2	2	0	0		?	35	雄物川流域	1993	市教委・諏訪ノ沢遺跡
44	湯ノ沢F	秋田市	1	1							1984	秋田臨空港新都市開発整備事業課
45	石坂台Ⅰ・Ⅲ	河辺町	2	2	0	0	時期不明	垂	45~47	岩見川(雄物川流域)	1985	県教委第125集
46	石坂台IV	河辺町	4	1	0	3	時期不明	斜	45~49	杭痕あり	1988	県教委第150集
47	石坂台VII	河辺町	1	1					60~65		1988	県教委第150集
48	松木台Ⅲ	河辺町	15	15	0	0	時期不明	斜	40		1986	県教委第150集
49	高橋山Ⅱ	羽後町	2	0	0	2	中期末		230~240	石沢川流域	1987	市教委・町内遺跡発掘調査報告書
50	宮の前	福川町	1	1	0	0	時期不明	平坦	123	皆瀬川流域	1979	県教委第64集
51	小田(5)	山内村	3	3	0	0	時期不明	平行	129	横手川流域	1994	県教委第243集

(注) 県教委: 「秋田県文化財調査報告書」秋田県教育委員会

秋田臨空港新都市開発整備事業課: 「秋田臨空港新都市開発整備事業課埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会

秋田新都市開発整備事業課: 「秋田新都市開発整備事業課埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会

青森県内の擦文土器文献

平山明寿

擦文土器は土師器の影響を受けて発生したと考えられ、北海道のほぼ全域に分布している。擦痕（刷毛目）による器面調整と沈線文を特徴とし、底辺部が張り出し、口縁部が大きく外反する器形の土器である。

青森県内から出土する擦文土器の研究が本格的に始まったのは、将木館跡（岩月1951）の発掘調査からである。それからしばらくの間は東京在中の研究者によって研究が進められていたが、1960年代後半から県内の研究者による資料が紹介され始めた。下北半島を中心とした中島・橋（橋1965）や、津軽を踏査した北林（桜井・北林1969）をはじめとする採集資料の紹介が主なものである。発掘調査で擦文土器の出土が見られるようになるのもこの頃からで、大館森山遺跡（斎藤・岩崎1968）、小館遺跡（桜井1971）、第一田名部小学校校庭遺跡（橋1971）、沢田遺跡（桜井1973）、大間貝塚（橋1974）などが主な遺跡である。遺跡から出土した擦文土器が充実した結果、県内から出土した擦文土器の編年研究が佐藤・高杉によって行われた（佐藤1972、高杉1975・1977）。それ以後も古館遺跡（青森県教育委員会1979）や蓬田大館遺跡（桜井1987）など、擦文土器が出土した遺跡は増えており、現在では三浦（三浦1991・1995）により資料集成が進められている。

中島遺跡（桜井1954）や舞戸遺跡（高杉・木村1975）など、県内の奈良・平安期の土器の中には口縁部から頸部にかけて横走沈線を施したもののが見られる。当初は土師器と考えられ（桜井1958）ていた。擦文土器に分類される可能性も高いが、在地の土器として捉えようとする考え方（鈴木1979、三浦1991）も出されている。

県内で擦文土器が出土した遺跡は現在では50以上を数えるが、採集資料によるものがほとんどであり、遺構に伴って出土した例が少ないと注意する必要がある。

小稿は、青森県内出土の擦文土器に関する文献を集成したものである。資料が図化されている文献、「擦文土器」と分類・記述している文献を中心に集成し、地域ごと、遺跡ごとにまとめた。また、編年研究や資料集成などについては「その他の文献」としてまとめた。なお、前述の横走沈線を施す土器については、擦文土器か否か判断が難しいため、掲載を極力さけていることをあらかじめお断りしておきたい。

最後に、この資料を作成するにあたり、御指導・教示して下さった関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

注記（文献表中）

- (注1) 遺跡名は、青森県教育委員会『青森県遺跡地図』1992による。遺跡によっては文献発表当時とは遺跡名が異なる場合がある。
 - (注2) 中島の採集資料による。古釜谷平遺跡と思われる。
 - (注3) 斗南ヶ丘遺跡は現在(1)～(4)に分かれているが、そのどれであるかは不明である。
 - (注4) 沢田A遺跡・沢田B遺跡を統合・改称。
 - (注5) 『青森県遺跡地図』(注1と同じ)には掲載されていない。
 - (注6) 五所川原市近傍出土という。
- なお、1997年刊行の青森県埋蔵文化財調査報告書の中にも擦文土器が出土した遺跡がある。

青森県内の擦文土器文献(1)

地域	市町村	遺跡名(注1)	文献名
下北	大間町	割石	江坂輝彌「青森県下北半島稲崎遺跡調査報告」古代 第12号 1953 渡辺誠「下北半島割石遺跡採集の擦文土器について」考古学雑誌 第51巻第3号 1966 橋善光「下北半島の擦文式土器」北奥古代文化 第5号 1973 橋善光「中島全二蒐集遺物集成(八)」うそり 27 1990
		大間貝塚	橋善光・奈良正義「青森県大間貝塚調査報告」考古学ジャーナルNo99 1974 金子浩昌・橋善光・奈良正義「第三次大間貝塚調査報告」考古風土記 創刊号 1976
		奥戸	橋善光「青森県大間町奥戸出土の擦文式土器」北奥古代文化 第7号 1975
		小奥戸(1)	青森県教育委員会「小奥戸(1)遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書 第154集 1992
	風間浦村	釜谷(注2)	橋善光「中島全二蒐集遺物集成(八)」うそり 27 1990 橋善光「中島全二蒐集遺物集成(九)」うそり 28 1991
		将木館	岩月康典「下北半島に於ける土師器の堅穴」考古学ノート 第5号 1951 東通村教育委員会「将木館遺跡発掘調査報告書」 1981
	東通村	ムシリ	江坂輝彌「尻屋崎付近の土師器、須恵器出土の貝塚」日本考古学協会第11回総会研究発表要旨 1953
		稲崎	江坂輝彌「青森県下北半島稲崎遺跡調査報告」古代 第12号 1953
		白糠赤平	橋善光「青森県東通村白糠採集の土師器と擦文土器について」古代 第53号 1970
		大平(4)	工藤竹久「下北半島大平D地点遺跡」考古学ジャーナル No83 1973 東通村教育委員会「大平(4)遺跡」東通村史編さんによる遺跡発掘調査概報 1995
	むつ市	前坂下(5)	青森県教育委員会「下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書 第71集 1982
		第一田名部小学校校庭	橋善光「第一田名部小学校校庭遺跡第一次調査概報」北奥古代文化 第3号 1971
		斗南ヶ丘(注3)	橋善光「中島全二蒐集遺物集成(10)」うそり 30 1993
上北	鷹巣沢村	九艘泊岩塗	江坂輝彌・高山純・渡辺誠「青森県九艘泊岩塗遺跡調査報告書」石器時代 第7号 1965
		桂沢	橋善光「青森県鷹巣沢桂沢の擦文土器について」考古学ジャーナル No22 1965
	川内町	瀬野	橋善光「下北半島の製塩」うとう 第80号 1974
		上野平	寺田徳穂「下北郡川内町上の平遺跡」考古風土記 創刊号 1976 橋善光・奈良正義「下北半島上野平遺跡の調査」北海道考古学 第13輯 1977
	三沢市	平畠(5)	三沢市教育委員会「平畠(5)遺跡I」三沢市埋蔵文化財調査報告書 第8集 1991
東青	蓬田村	上小国	北林八洲晴「津軽半島における擦文土器の新資料」北海道考古学 第7輯 1971
		小館(1)	桜井清彦「青森県小館遺跡の調査」考古学ジャーナル No62 1971 桜井清彦「小館および油川城址出土の擦文土器」考古風土記 第2号 1977
		蓬田大館	佐々木達夫「津軽・蓬田大館の発掘-1981年-」日本海文化 第10号 1983 桜井清彦・菊池徹夫編「蓬田大館遺跡」早稲田大学考古学研究室報告 1987
		沢田(注4)	桜井清彦・北林八洲晴「青森市の擦文土器について」北奥古代文化 第2号 1969 桜井清彦「青森市沢田A遺跡の調査報告」北奥古代文化 第5号 1973
	青森市	油川城跡	桜井清彦・北林八洲晴「青森市の擦文土器について」北奥古代文化 第2号 1969 北林八洲晴「津軽半島における擦文土器の新資料」北海道考古学 第7輯 1971 桜井清彦「小館および油川城址出土の擦文土器」考古風土記 第2号 1977
		築木館	葛西勲「青森市築木館遺跡出土の擦文土器について」燃系文 第2号 1971 北林八洲晴「津軽半島における擦文土器の新資料」北海道考古学 第7輯 1971
		白旗野(注5)	北林八洲晴「津軽半島における擦文土器の新資料」北海道考古学 第7輯 1971
	弘前市	近野	青森県教育委員会「近野遺跡発掘調査報告書II」青森県埋蔵文化財調査報告書 第22集 1975
		三内	青森県教育委員会「青森市三内遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第37集 1977
		尻八館跡	青森県立郷土館「尻八館」青森県立郷土館調査報告書 第9号 1981
		内真部(1)	北林八洲晴「津軽半島における擦文土器の新資料」北海道考古学 第7輯 1971
		内真部(4)	青森県教育委員会「内真部(4)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第158集 1993
		小三内	青森市教育委員会「小三内遺跡発掘調査報告書」青森市埋蔵文化財調査報告書 第22集 1994
中南	弘前市	小友館	弘前市教育委員会「弘前市小友遺跡発掘調査報告書」 1981
		境間館	青森県教育委員会「境間館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第102集 1986
		中崎館	青森県教育委員会「中崎館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第129集 1989
	黒石市	高館(1)	青森県教育委員会「黒石市高館遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書 第40集 1977
	田舎館村	前川	田舎館村「前川遺跡発掘調査報告書」 1991
	碇ヶ関村	古館	青森県教育委員会「碇ヶ関村古館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第54集 1979

青森県内の擦文土器文献(2)

地域	市町村	遺跡名	文献名
西北	小泊村	坊主沢	鈴木 克彦・松岡 敏美「青森県小泊村出土遺物について」とひょう 3号 1981
		折戸	鈴木 克彦・松岡 敏美「青森県小泊村出土遺物について」とひょう 3号 1981
西北	市浦村	赤坂	桜井 清彦「青森県相内村赤坂遺跡について」古代 第17号 1955
		中島	桜井 清彦「青森県十三村中島発見の土師器」考古学雑誌 第51巻第1号 1954 市浦村教育委員会『十三・中島遺跡』1984
		オセドウ	市浦村教育委員会『オセドウ貝塚発掘調査概報』1992
西北	中里町	中里城跡	中里町・中里町教育委員会『中里城跡試掘調査報告書』中里町文化財調査報告書 第1集 1989 中里町 中里町・中里町教育委員会『中里城跡I』中里町文化財調査報告書 第2集 1990
		唐崎	中里町教育委員会『中里町の遺跡II』中里町文化財調査報告書 第7集 1994
西北	金木町	藤枝	桜井 清彦「青森県相内村赤坂遺跡について」古代 第17号 1955 竹内 正光「津軽平野における擦文の遺跡」考古風土記 第6号 1981
		川倉小学校	高杉 博章・木村 鉄次郎「津軽半島における擦文式土器の新例と問題点」北奥古代文化 第7号 1975
	五所川原市	神明町	竹内 正光「青森県金木町出土の続縄文期土偶と擦文土器」考古風土記 第3号 1978
		居升村	竹内 正光「津軽平野における擦文の遺跡」考古風土記 第6号 1981
	出土地不明(注6)	高杉 博章・木村 鉄次郎「津軽平野における擦文式土器の新例と問題点」北奥古代文化 第7号 1975	
西北	石田	五所川原市教育委員会『石田遺跡』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集 1994	
	稲垣村	松枝	竹内 正光「津軽平野における擦文の遺跡」考古風土記 第6号 1981 福田 友之「津軽・稲垣村松枝遺跡出土の擦文文化資料」北海道考古学 第23輯 1987
		懸河	稲垣村教育委員会『懸河遺跡発掘調査報告書』稲垣村文化財調査報告書 第1集 1989
	久米川	青森県教育委員会『久米川遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第163集 1993	
	木造町	石上神社	青森県教育委員会『石上神社遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第35集 1976
西北	雄ヶ沢町	大館森山	斎藤 忠・岩崎 卓也「大館森山」岩木山一岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書 1968
		舞戸	高杉 博章・木村 鉄次郎「津軽平野における擦文式土器の新例と問題点」北奥古代文化 第7号 1975
	種里城跡	雄ヶ沢町教育委員会『種里城跡』雄ヶ沢町埋蔵文化財調査報告書 第11集 1989 雄ヶ沢町教育委員会『種里城跡II』雄ヶ沢町埋蔵文化財シリーズ 第12集 1995	
	空沢	青森県教育委員会『空沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第130号 1989	

その他の文献

著者名	文献名
桜井 清彦	「東北地方北部における土師器と堅穴に関する諸問題」館址 1954
菊池 徹夫	「擦文文化の形態分類と編年についての一試論」物質文化 15 1970
佐藤 達夫	「擦文土器の変遷について」常呂 1972
菊池 徹夫	「擦文式土器基本形態の形成」北海道考古学 第8輯 1972
高杉 博章	「擦文文化の成立とその展開」史学 第47巻第1・2号 1975
高杉 博章	「本州における擦文文化の様相」考古風土記 第2号 1977
鈴木 克彦	「青森県の擦文文化」季刊どるめん 22号 1979
北林 八洲晴	「古代」青森県の考古学 1983
石附 喜三男	「擦文文化における東北地方」角田文衛古希記念 古代学叢論 1983
天野 哲也	「本州北端部は擦文文化圏に含まれるか」同志社大学考古学シリーズIII 1987
三浦 圭介	「本州の擦文文化」考古学ジャーナル No341 1991
三浦 圭介	「古代」新稿弘前市史 資料編1 (考古編) 1995
大沼 忠春	「擦文・オホーツク文化と北方社会」考古学ジャーナル No411 1996

平成8年青森県内発掘調査動向

大湯卓二・木村鉄次郎・鈴木克彦

1 はじめに

当センターでは県内で発掘された遺跡の発掘動向を把握するために調査内容の情報収集に努めているが、文化課提供の別紙一覧のとおり約126件に及ぶ発掘件数があり、市町村の全ての発掘情報を網羅することは難しい状況にある。遺漏もあるかと思うが、時期別に主要な遺跡の発掘内容を以下に簡単に紹介することにする。この調査にあたって多くの関係機関から協力していただいた。

2 縄文時代

本年は県内で旧石器時代の遺跡の発掘はなく、発掘された中で最も古い時期の遺跡は、2点ながら早期押型文土器が発見された階町山館前遺跡である。次いで古い時期の遺跡は、早期白浜式の貝殻文土器を出土した集落跡の福地村西張(2)遺跡である。該期の6軒の住居跡と石器等が出土した。白浜式を伴う住居跡は本県ではまだ類例が少ない。早期の住居跡は六ヶ所村幸畑(1)遺跡で2軒発見されている。この遺跡からは、早期と思われる所謂Tピットと言われる溝状の陥し穴(3基)が発見された。本県からは類例が多数出土しているが、早期の確実な類例は少ない。八戸市田面木遺跡、見立山(2)遺跡の遺跡でも早稲田5式などの住居跡や土器が出土している。また、津軽地方では少なくない早期貝殻文土器が青森市新町野遺跡に出土している。

十和田市寺山(3)遺跡では前期前葉に降下したと考えられている中揮浮石層の下位から陥し穴が発見され、その時期を想定できる。所謂Tピットと言われているもので、概ねの時期を特定できる資料である。同市の大和田遺跡にも中揮浮石層の下位から前期初頭の遺物が出土している。遺構、遺物の多くは中期のもので住居跡(5軒)、掘立柱建物跡(3棟)などが発見されている。同じ十和田市の平窪(1)遺跡、寺上遺跡でも当該期の集落跡が発掘された。森田村石神遺跡では前期から中期にかけての住居跡などが発見された。前期後半から中期前半期の青森市桜峯(1)遺跡は該期の住居跡6軒、多数の土坑が発見された。また、青森市三内丸山遺跡では5次~7次の発掘が行われた。5次の発掘では主に中期の住居跡、6次の発掘では前期、中期の遺物の捨て場を発掘し、多数の動植物遺存体が見つかり、中には太さ60センチの木柱が新たに発見された。7次の発掘では2列に配列した土坑など発見された。集落遺跡である碇ヶ関村四戸橋遺跡から中期後葉の完形の土偶が出土した。その他に早期から晩期までの各時期にわたる遺構、遺物を多数出土した八戸市弥次郎窪遺跡では、特に土坑(160基)が多く、時期毎に群をなしている。この遺跡からは中期終末期と思われる直径3メートル、深さ2.5メートルの超大型な土坑が発見されたことが特筆される。このような大型土坑は、かつて黒石市長坂(1)遺跡などに発掘されたことがあり後期初頭に稀に見られるが、本県では最大規模なものである。同時期の住居跡も数軒発見されている。青森市野木遺跡も中期の集落跡である。埋設土器等が出土している。

最近国史跡に指定された青森市小牧野遺跡の発掘では、後期前葉の十腰内1式期の配石遺構等の遺構と多数の土器、石器が発見された。

南郷村水吉遺跡は主に後期から晩期にかけての集落跡である。4軒の住居跡、配石遺構4基、埋設土器3基など多数の遺構が発見された。土偶などの土製品や石器などの出土遺物が多い。

六ヶ所村幸畑(1)遺跡では後期の住居跡(3軒)が発見されている。

その他に、倉石村八盃久保(3)遺跡、幸神遺跡、八戸市一王寺(1)遺跡、牛ヶ沢(4)遺跡、新井田古館遺跡、境沢頭遺跡、階上町山館前遺跡、三沢市猫又(1)遺跡、小田内沼(3)遺跡、七戸町貝ノ口遺跡、東北町夫稚原(7)、(13)、(14)遺跡、横沢山(5)遺跡、天間林村二ツ森貝塚、六ヶ所村幸畑(4)遺跡、青森市新町野遺跡、葛野(2)遺跡、岡町(2)遺跡、五所川原市隠川(4)、(12)遺跡、市浦村五月女苑遺跡、弘前市石川城跡、小栗山館遺跡、大久保C遺跡、独狐遺跡、田舎館村垂柳遺跡、平賀町大光寺新城遺跡など、縄文時代の各時期にわたる遺物が出土した遺跡は少なくない。これらの中には一王寺(1)遺跡、猫又(1)遺跡、小田内沼(3)遺跡、夫稚原(7)、(13)、(14)遺跡、横沢山(5)遺跡、垂柳遺跡のように小面積の範囲確認調査も含まれているが、猫又(1)遺跡、小田内沼(3)遺跡では集落跡が存在することが確認されたり、弥生時代の遺跡として有名な垂柳遺跡では沖積地から少量の後期の土器が出土している。青森市新町野遺跡は青森市教育委員会と青森県埋蔵文化財調査センターが試掘したもので、前期から後期にかけての集落跡が確認されている。これらの遺跡では、早期から晩期に及ぶ遺構、遺物があるものの質量的にまとまったものではない。

3 弥生時代

八戸市弥次郎窪遺跡からは、五所・二枚橋式期頃の住居跡2軒・竪穴遺構6基、土坑基が検出した。

鰯ヶ沢町平野遺跡の試掘調査では、天王山式土器が数点出土した。

田舎館村垂柳遺跡では、水田跡の範囲確認が行われた。遺物は、田舎館式土器が出土した。

脇野沢村瀬野遺跡の試掘調査の結果、土坑が数基検出した。遺物は、二枚橋式土器が出土した。

4 古代

古代については、青森県教委で実施した発掘調査では14遺跡があげられる。その中で県埋蔵文化財調査センターが行ったものは、浪岡町野尻(1)遺跡、五所川原市隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡、八戸市弥次郎窪遺跡、十和田市大和田遺跡・伝法寺館跡、大間町小奥戸(2)遺跡、六戸町長谷遺跡、鰯ヶ沢町外馬屋前田(1)六ヶ所村幸畑(4)遺跡、青森市野木遺跡・新町野遺跡があり、県文化課で行ったものは平内町大沢遺跡がある。

野尻(1)遺跡では、平安時代の竪穴住居跡17軒・掘立柱建物跡15棟・溝跡36条が検出された。この住居跡の内16軒は、掘立柱建物跡か外周溝が伴うものであった。隠川(4)遺跡では、平安時代の掘立柱建物跡・外周溝のセットをなす竪穴住居跡が3軒みられ、畠跡の可能性がある連続溝状遺構も検出されている。第4号住居跡からは住居跡の隅に3つの粘土塊があり、須恵器窯跡に近い遺跡であることから注目される。また、ヘラ書きによる絵画土器(土師器坏)が出土している。隣接する隠川(12)遺跡でも、平安時代の竪穴住居跡6軒と連続溝状遺構が検出された。弥次郎窪遺跡では製鉄遺構1基が検出された。大沢遺跡では、平安時代の製塩釜が検出され、製塩土器が出土した。

大和田遺跡では、奈良時代の竪穴住居跡4軒・土坑1基が検出された。小奥戸(2)遺跡では平安時代の竪穴住居跡1軒が検出された。長谷遺跡では、平安時代竪穴住居跡10軒の他に須恵器を埋設した遺構1基検出された。外馬屋前田(1)遺跡では、平安時代の竪穴住居跡18軒と土坑20基・掘立柱建物跡6棟が検出されている。幸畑(4)遺跡では、平安時代竪穴住居跡4軒の検出をみた。野木遺跡では平安時代の竪穴住居跡61軒が検出され、平安時代の大きな集落遺跡であることが判明した。

青森市教委の調査では、新町野遺跡で平安時代の竪穴住居跡8軒、葛野遺跡で平安時代の竪穴住居跡4軒が検出されている。

八戸市教委の調査では、田面木遺跡で奈良時代の竪穴住居跡1軒と平安時代の竪穴住居跡2軒が、

見立山（2）遺跡で奈良時代の竪穴住居跡2軒、酒美平遺跡で奈良時代の竪穴遺構4軒、牛ヶ沢（2）遺跡で奈良時代の竪穴住居跡2軒、新井田古館遺跡で奈良時代の竪穴住居跡1軒、境沢頭遺跡で奈良時代の竪穴住居跡2軒・円形周溝4基、平安時代竪穴住居跡8軒・土坑4基が検出された。また、丹後平古墳では7世紀の土坑墓1基が検出された。

三沢市教委の調査では、平畠（3）遺跡で平安時代の竪穴住居跡22軒・竪穴遺構1基、小田内沼（3）遺跡では平安時代竪穴住居跡9軒・土坑2基が検出された。

七戸町教委の調査では、史跡七戸城跡北館の調査で平安時代の竪穴住居跡2軒、貝ノ口遺跡で平安時代の竪穴住居跡3軒・粘土採掘穴8基等が検出された。

階上町教委の調査では、山館前遺跡で平安時代の竪穴住居跡3軒、下田町教委の調査で、中野平遺跡で平安時代の竪穴住居跡が検出された。

5 中世

市浦村十三湊遺跡の調査は、土塁北側の家臣団館と推定される地区と土塁南側の町屋屋敷跡と推定される地区の2ヶ所を行った。家臣団館からは、板塀や棚で回りを囲まれた武士の屋敷跡と職人の作業場と推定される竪穴遺構が発見された。この竪穴遺構から炉跡が確認されたほか鉄や銅の製品が出土していることから、鍛冶工房との関連施設と推定されている。町屋では、中軸街路に沿って町人の家が検出され、それぞれの家には井戸が設けられていた。この他に、領主館及び館内部に推定される個所から堀、掘立柱建物、竪穴遺構、井戸、土坑、集石遺構などを検出した。遺物では12世紀から15世紀までの土器・陶磁器（青磁器、白磁器、青白磁器、中国天目、壺、高麗青磁、珠洲、瀬戸、かわらけなど）・鉄製品（刀子、かすがい、釘）・銅製品（鏡・錢）・石製品（砥石、硯）が出土した。

十和田市伝法寺館跡（戦国時代）は、二つの郭のうち東郭の一部を調査し、竪穴遺構13基、土坑25基、焼土跡17基、小穴（柱穴）150個を確認した。主な遺物に、青磁・白磁・染付などの舶載陶磁器と瀬戸美濃・天目・志野などの国産陶磁器、鉄・鉄釘・鉄鎌小刀・鋸・小札・小柄・刀の鰐止め金具、砥石・臼・茶臼・明錢・輪錢などがある。

青森市岡町（2）遺跡の調査では、中世の遺物である珠洲焼片の片口摺鉢・瓶・甕が出土した。また、堀の可能性もある溝跡も検出され、城館の可能性が高い。

八戸市新井田古館遺跡では、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、井戸跡、溝跡、堀跡（2条）、土塙、焼土構築などを検出した。中世から近世に跨がって使われた館跡である。遺物に、国産陶磁器、鉄鍋、刀子などの鉄製品や下駄、折敷などの木製品などがある。

戦国時代期の平賀町大光寺新城跡遺跡の調査では、堀跡・井戸・溶鉱炉・土橋などを検出した。土橋は幅1m、長さ20mほどではほぼ完全な形で検出している。堀跡から生活用具としてのミソベラや折敷や箸、下駄、桶などのほか戦いに使用された太刀・鉄鎌・鉄砲玉、梵字が墨書きされている搭婆なども発見された。

史跡七戸城跡（七戸南部氏の居城）からは、北館館主の建物跡と思われる掘立柱建物跡7軒、竪穴建物跡1基、土坑2基、溝1基が発見された。遺物は、中国陶磁器・国産陶磁器・古錢の他、鉄製品では小札・釘などが出土した。

七戸町貝ノ口遺跡の調査では、掘立柱建物跡、竪穴建物跡2基、土坑、溝跡23基、布堀3基、焼土遺構6基を検出した。遺物は、中国陶磁器・国産陶磁器・古錢・釘などの鉄製品が出土した。貝ノ口遺跡は、史跡七戸城とはほぼ同時期に存在したことが分かった。

三戸南部氏の居城とされる南部町聖寿寺館跡の第3次調査では、北方堀跡が数回改修されていたことが確認された。遺物は、15・16世紀の陶磁器・皿・椀・盤・紅皿のほか石臼・小札などが出土した。

15世紀前半期頃と推定される藤崎町藤崎城跡の調査では、堀と土塁が確認された。遺物は摺鉢の破片と少ない。

東通村砂子又高館の調査では、竪穴遺構1基を検出している。

五所川原市真言館跡の試掘調査では、輪銭が2枚ほど発見されただけである。鰯ヶ沢町種里城跡の、調査では、城跡への通路のほか掘立柱建物跡、井戸など検出された。遺物では、15世紀～16世紀にかけての中国製（青磁器、白磁器、染付）・日本の陶磁器（瓦質土器、珠洲摺鉢、越前摺鉢、美濃、瀬戸、天目茶碗）・木製品（下駄、漆塗椀）・胴銭60枚が出土した。

岩木町大浦城跡では本丸、二の丸に挟まれた東側を発掘し、堀跡を検出した。遺物は、古銭、陶磁器が出土した。

浪岡町高屋敷館遺跡では、当センターが行った堀跡の東側に巡る同類の堀を確認した。

6 近世

史跡津軽氏城跡弘前城跡（長勝寺構）の調査は、寺院調査である。陶磁器、オハジキ、ガラス、梅の種などが出土した。

八戸城跡では、堀2条、溝跡1条、土塁を1箇所検出した。遺物に、陶磁器、瓦質土器、鉄製品、硯、古銭（寛永通宝）、キセル、貝殻、味噌甕、樽、鍋の蓋、鎌などがある。

八戸市新井田古館遺跡は、中世・近世とに跨がっている遺跡で掘立柱建物跡、竪穴建物跡、井戸跡、溝跡、堀跡、土壙、土壙墓、焼土構を検出した。国産陶磁器、鉄釘、鉄鍋、刀子、火打金、木製鍬、下駄、折敷、人骨、馬の骨、貝殻などが出土した。

18世紀から19世紀にかけての東通村岩屋近世貝塚遺跡では、当時の貝塚の跡及び陶磁器類が出土した。（付表は、文化課提供。）

付表・平成8年度青森県内遺跡発掘調査一覧

番号	遺跡名	時代	遺跡番号	市町村名	調査実施機関	発掘調査年月日	原因
1	大光寺新城遺跡	中世、近世	30-140	平賀町	平賀町教委	8.4/45~8.7/31	道路建設
2	狐森遺跡	縄文(中、後)	03-247	八戸市	八戸市教委	8.4/22~8.4/25	住宅建築
3	中野平遺跡	縄文(早)、奈良、平安	48-026	下田町	下田町教委	8.4/22~8.6/14	住宅建築
4	玉井(1)遺跡	縄文(後)	19-013	森田村	森田村教委	8.4/10~8.6/14	道路建設
5	新井田古館遺跡	中世、近世	03-147	八戸市	八戸市教委	8.4/22~8.10/31	住宅建築
6	桜峯(1)遺跡	縄文	01-207	青森市	青森市教委	8.5/13~8.10/25	道路建設
7	吾妻沢(2)遺跡	平安	17-025	深浦町	深浦町教委	8.5/13~8.6/14	電気事業
8	根の山遺跡	縄文(晩)	23-005	岩木町	青森県教委	8.5/7~8.5/17	農道整備
9	十腰内(1)遺跡	縄文	02-010	弘前市	青森県教委	8.5/7~8.6/6	道路建設
10	外馬屋前田(1)遺跡	縄文(前、中、後)、平安	15-042	鰺ヶ沢町	青森県教委	8.6/10~8.9/27	農道整備
11	法師岡遺跡	縄文(後)、平安	64-026	福地村	福地村教委	8.4/8~8.8/30	電気事業
12	新納屋(1)遺跡	縄文(早、後)平安	50-107	六ヶ所村	青森県教委	8.5/7~8.10/31	道路建設
13	幸畠(1)遺跡	縄文(早、前、中、後)、平安	50-032	六ヶ所村	青森県教委	8.5/7~8.10/31	道路建設
14	幸畠(4)遺跡	縄文(中、後)、平安	50-035	六ヶ所村	青森県教委	8.5/7~8.10/31	道路建設
15	牛ヶ沢(4)遺跡	縄文、弥生、奈良	03-266	八戸市	八戸市教委	8.5/8~8.7/19	石灰石採掘事業
16	砂子又高館遺跡	平安	54-035	東通村	東通村教委	8.4/22~8.5/2	村史編纂事業
17	館平遺跡	縄文(早)、奈良、平安中世、近世	03-024	八戸市	八戸市教委	8.5/7~8.5/10	住宅造成・在宅建築
18	岩屋近世貝塚遺跡	近世	54-016	東通村	東通村教委	8.4/22~8.6/2	村史編纂事業・学術調査
19	水吉遺跡	縄文	65-229	南郷村	青森県教委	8.4/23~8.11/1	ダム建設
20	石橋遺跡	縄文、平安、奈良	03-060	八戸市	八戸市教委	8.4/26~8.4/26	住宅建築
21	幸神遺跡	縄文(前)、平安	66-005	倉石村	青森県教委	8.4/23~8.7/4	農道整備
22	八戸久保(3)遺跡	縄文	66-031	倉石村	青森県教委	8.4/23~8.7/4	農道整備
23	野木遺跡	縄文、平安	01-210	青森市	青森県教委	8.5/9~8.10/30	工業団地整備
24	新町野遺跡	縄文(中)、平安	01-161	青森市	青森県教委	8.5/9~8.10/30	工業団地整備
25	小奥戸(2)遺跡	平安	52-017	大間町	青森県教委	8.5/8~8.7/11	原子力発電所建設
26	隠川(4)遺跡	平安	05-064	五所川原市	青森県教委	8.5/8~8.10/30	道路建設
27	隈無(2)遺跡	縄文(後、晩)、平安	05-062	五所川原市	青森県教委	8.5/8~8.10/30	道路建設
28	餅ノ沢遺跡	縄文(中、後)、平安	15-034	鰺ヶ沢町	青森県教委	8.9/17~8.10/25	農業関連
29	平窪(1)遺跡	縄文(前・中)、平安	06-089	十和田市	青森県教委	8.7/1~8.9/30	道路建設
30	平窪(2)遺跡	縄文	06-090	十和田市	青森県教委	8.8/1~8.11/1	道路建設
31	伝法寺遺跡	中世、近世	06-052	十和田市	青森県教委	8.10/1~8.11/1	道路建設
32	弥次郎塙遺跡	縄文(前)	03-140	八戸市	青森県教委	8.5/9~8.9/27	道路建設
33	隈無(1)遺跡	縄文、平安	05-073	五所川原市	青森県教委	8.5/8~8.10/30	道路建設
34	寺山(3)遺跡	縄文(後)	06-092	十和田市	青森県教委	8.5/7~8.7/31	道路建設
35	大和田遺跡	縄文、奈良、平安	06-059	十和田市	青森県教委	8.5/7~8.6/28	道路建設
36	野尻(1)遺跡	縄文、平安	29-060	浪岡町	青森県教委	8.5/7~8.10/31	道路建設
37	見立山(1)遺跡	縄文(前、後、晩)、弥生	03-113	八戸市	青森県教委	8.5/9~8.9/27	道路建設
38	十三湊遺跡	中世、近世	38-002	市浦村	青森県教委	8.5/20~8.6/7	漁港整備・学術調査
39	隈無(6)遺跡	縄文	05-078	五所川原市	青森県教委	8.8/19~8.10/30	道路建設
40	平野(1)遺跡	縄文(後、晩)、弥生	15-039	鰺ヶ沢町	青森県教委	8.9/17~8.10/25	農業関連

番号	遺跡名	時代	遺跡番号	市町村名	調査実施機関	発掘調査年月日	原因
41	今須(4)遺跡	縄文(前、後)、平安、弥生	15-038	鰺ヶ沢町	青森県教委	8.9/17~8.10/25	農業関連
42	館平遺跡	縄文(早)、奈良、平安、中世、近世	03-024	八戸市	八戸市教委	8.9/1~8.12/10	住宅建築
43	猫又(1)遺跡	縄文、奈良、平安	07-024	三沢市	三沢市教委	8.9/2~8.10/30	資材置場造成
44	二ツ森貝遺跡	縄文(中)	49-021	天間林村	天間林村教委	8.6/3~8.6/28	遺跡整備
45	岡町(2)遺跡	縄文(前、後)、平安	01-082	青森市	青森県教委	8.5/10~8.5/24	その他の建物
46	大浦城遺跡	中世	23-023	岩木町	岩木町教委	8.5/7~8.10/31	学校校庭整備
47	大久保地区遺跡	平安	02-048	弘前市	弘前市教委	8.5/20~8.6/28	開発計画
48	荷軽井遺跡	縄文(前)	59-002	五戸町	五戸町教委	8.5/7~8.6/30	道路建設
49	鶴平(1)遺跡	縄文(早、後、晚)	65-231	南郷村	南郷村教委	8.8/1~8.8/30	電気事業
50	高屋敷館遺跡	平安	29-003	浪岡町	浪岡町教委	8.5/20~8.6/2	学術調査
51	十三湊遺跡	中世、近世	38-022	市浦村	市浦村教委	8.5/20~8.5/24	公園整備
52	五月女范(1)遺跡	縄文(晩)	38-021	市浦村	市浦村教委	8.5/27~8.6/7	土砂採取
53	瀬野遺跡	中世	57-010	脇野沢村	筑波大学	8.5/27~8.6/9	学術調査
54	聖寿寺館跡遺跡	中世	62-018	南部町	南部町教委	8.7/1~8.9/30	農業関連
55	堀越城跡遺跡	縄文、平安、中世	02-043	弘前市	弘前市教委	8.7/1~8.7/12	児童館建設
56	種里城跡遺跡	中世	15-024	鰺ヶ沢町	鰺ヶ沢町教委	8.6/3~8.7/30	史跡整備・遺跡整備
57	下平(2)遺跡	縄文(早、中、後)	06-008	十和田市	十和田市教委	8.6/10~8.7/26	道路建設
58	藤崎城跡遺跡	中世	26-003	藤崎町	藤崎町教委	8.4/17~8.6/30	墓地公園造成・都市計画道路
59	杉沢遺跡	縄文	64-037	福地村	福地村教委	8.7/1~8.8/30	電気事業
60	田面木遺跡	平安、奈良	03-034	八戸市	八戸市教委	8.7/4~8.7/10	住宅建築
61	田面木遺跡	平安、奈良	03-034	八戸市	八戸市教委	8.10/17~8.11/8	住宅建築
62	原田遺跡	縄文	56-013	佐井村	佐井村教委	8.8/19~8.9/6	道路建設
63	大山遺跡	縄文(後)	03-168	八戸市	八戸市教委	8.8/19~8.9/3	菜園分譲
64	酒美平遺跡	奈良	03-077	八戸市	八戸市教委	8.8/20~8.10/31	都市計画道路建設
65	小牧野遺跡	縄文	01-176	青森市	青森市教委	8.7/1~8.9/27	学術調査
66	大光寺新城跡	平安	30-104	平賀町	平賀町教委	8.8/1~8.9/15	その他開発
67	真言館遺跡	中世	05-043	五所川原市	五所川原市教委	8.7/26~8.7/28	学術調査
68	平畠(3)遺跡	縄文、平安、奈良	07-003	三沢市	三沢市教委	8.9/2~8.10/30	土砂採取等
69	山館前遺跡	縄文、平安	63-073	最上町	最上町教委	8.7/15~8.8/2	総合運動公園計画
70	西張(2)遺跡	縄文	64-007	福地村	青森県教委	8.7/9~8.11/1	東北新幹線建設
71	田名部館遺跡	縄文、中世、近世	08-056	むつ市	青森県教委	8.7/16~8.8/19	道路建設
72	長坂(1)遺跡	縄文	04-015	黒石市	黒石市教委	8.6/3~8.10/31	農業関連
73	浅沢遺跡	縄文	04-019	黒石市	黒石市教委	8.6/3~8.10/31	農業関連
74	大久保地区遺跡	中世	02-048	弘前市	弘前市教委	8.7/1~8.10/31	開発
75	中館(八戸城)跡	近世	03-181	八戸市	八戸市教委	8.8/26~8.9/10	三八城公園整備
76	幸畠(10)遺跡	縄文	50-122	六ヶ所村	六ヶ所村教委	8.7/29~8.8/31	道路建設、観光開発
77	幸畠(6)遺跡	縄文	50-037	六ヶ所村	六ヶ所村教委	8.7/29~8.8/31	道路建設、観光開発
78	尾崎神社遺跡	近世	39-020	小泊村	小泊村教委	8.6/29~8.6/30	学術調査
79	小奥戸(2)遺跡	平安	52-017	大間村	青森県教委	8.6/11~8.7/11	電気事業
80	貝ノ口遺跡	平安、中世、近世	41-065	七戸町	七戸町教委	8.7/16~8.11/29	道路建設
81	田名部館遺跡	中世	08-056	むつ市	むつ市教委	8.8/7~8.8/31	建設予定地の造成
82	十三湊遺跡	中世、近世	38-022	市浦村	市浦村教委	8.8/20~8.10/12	学術調査
83	山下遺跡	平安	01-277	青森市	青森市教委	8.10/28~8.11/29	公園造成

番号	遺跡名	時代	遺跡番号	市町村名	調査実施機関	発掘調査年月日	原因
84	玉水(2)遺跡	平安	01-278	青森市	青森県教委	8.10/28~8.11/29	公園造成
85	上野尻遺跡	縄文、平安	01-281	青森市	青森県教委	8.10/28~8.11/29	公園造成
86	新町野遺跡	縄文(前、後)、平安	01-161	青森市	青森県教委	8.10/14~8.11/21	防災調整池造成事業
87	独孤遺跡	縄文、平安、中世、近世	02-212	弘前市	弘前市教委	8.10/21~8.11/1	民間開発
88	貝ノ口遺跡	平安、奈良、中世	41-065	七戸町	七戸町教委	8.9/2~8.12/13	住宅建築
89	穴子沢(2)遺跡	縄文	63-040	階上町	階上町教委	8.9/9~8.10/25	道路建設
90	浅水上遺跡	縄文	59-005	五戸町	五戸町教委	8.7/22~8.9/30	道路建設
91	中館(八戸城)遺跡	近世	03-181	八戸市	八戸市教委	8.8/22~8.9/30	公園整備
92	日和見山遺跡	縄文	17-002	深浦町	深浦町教委	8.11/6~8.12/6	道路建設
93	葛野(2)遺跡	縄文(前)、平安	01-218	青森市	青森市教委	8.9/11~8.11/11	農道整備
94	小栗山館遺跡	縄文、平安、中世、近世	02-107	弘前市	弘前市教委	8.10/7~8.11/8	市道建設
95	原子溜池(4)遺跡	平安	05-039	五所川原市	五所川原市教委	8.9/9~8.11/30	電気事業
96	見立山(2)遺跡	縄文、奈良、平安	03-114	八戸市	八戸市教委	8.9/17~8.10/30	八戸西靈園拡張工事
97	十三湊遺跡	中世、近世	38-022	市浦村	青森県教委	8.6/24~8.9/20	学術調査
98	行人塚遺跡	縄文	03-260	八戸市	青森県教委	8.8/7~8.8/9	学校建設
99	岩渡小谷遺跡	縄文(前・中)、平安	01-287	青森市	青森県教委	8.9/30~8.10/15	道路建設
100	根岸遺跡	縄文、奈良、平安	42-014	百石町	百石町教委	8.10/1~8.10/15	住宅建築・遺跡整備
101	長谷遺跡	縄文、平安	44-040	六戸町	青森県教委	8.8/26~8.10/31	農道建設
102	岡町(2)遺跡	縄文(晚)、平安	01-082	青森市	青森県教委	8.10/14~8.11/15	警察学校移転事業
103	垂柳遺跡	弥生	32-002	田舎館村	田舎館村教委	8.9/17~8.11/29	遺跡整備
104	原子溜池(3)遺跡	縄文	05-005	五所川原市	五所川原市教委	8.10/21~8.11/30	電気事業
105	小田内沼(3)遺跡	縄文	07-028	三沢市	三沢市教委	8.11/11~8.12/6	道路建設
106	石神遺跡	縄文、平安	19-002	森田村	森田村教委	8.11/5~8.12/10	遺跡整備
107	大沢遺跡	平安	09-024	平内町	青森県教委	8.10/30~8.11/18	道路建設
108	天童山館遺跡	中世	15-083	鰺ヶ沢町	鰺ヶ沢町教委	8.11/15~8.12/15	公園造成
109	一王寺(1)遺跡	縄文	03-014	八戸市	八戸市教委	8.11/14~8.11/20	学術調査
110	丹後平古墳群遺跡	平安、奈良	03-254	八戸市	八戸市教委	8.11/1~8.11/29	都市計画道路
111	丹後平(1)遺跡	縄文、平安、奈良	03-093	八戸市	八戸市教委	8.11/1~8.11/29	区画整理
112	高館遺跡	縄文、平安、奈良	03-137	八戸市	八戸市教委	8.12/6~8.12/10	宅地造成
113	石倉下遺跡	縄文	04-121	黒石市	青森県教委	8.12/2~8.12/13	道路建設
114	築館遺跡	縄文	04-029	黒石市	青森県教委	8.12/2~8.12/13	道路建設
115	中野平遺跡	平安、奈良	48-026	下田町	下田町教委	9.4/22~9.6/4	店舗開発
116	三内丸山(1)遺跡	縄文(前・中)	01-020	青森市	青森県教委	8.5/19~8.11/1	遺跡整備・学術調査
117	三内丸山(2)遺跡	縄文(前・中)	01-021	青森市	青森県教委	8.5/19~8.11/1	遺跡整備・学術調査
118	史跡七戸城跡	古代、中世、近世	41-001	七戸町	七戸町教委	8.6/3~8.11/29	史跡整備事業
119	横沢山(5)遺跡	縄文	47-234	東北町	東北町教委	8.9/17~8.10/31	道路建設
120	夫稚原(13)遺跡	縄文(後)	47-295	東北町	東北町教委	8.5/7~8.6/28	道路建設
121	夫稚原(14)遺跡	縄文(後)	47-296	東北町	東北町教委	8.5/7~8.6/28	道路建設
122	夫稚原(7)遺跡	縄文(後)	47-289	東北町	東北町教委	8.7/1~8.9/13	道路建設
123	石川城跡	縄文、平安、中世	02-038	弘前市	弘前市教委	8.5/13~8.6/28	農道整備
124	弘前城跡	近世	02-074	弘前市	弘前市教委	8.4/15~8.4/26	庭院改築工事
125	史跡津軽氏城跡	近世	02-074	弘前市	弘前市教委	8.9/9~8.10/15	寺改築
126	境沢頭遺跡	縄文、平安	03-271	八戸市	八戸市教委	8.5/23~8.7/18	送電線新設工事

研究紀要第2号

1997年3月28日 印刷

1997年3月31日 発行

編集・発行 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038 青森市新城字天田内152-15

電話 0177-88-5701

FAX 0177-88-5702

印 刷 長尾印刷株式会社

〒030 青森市平新田字森越17-1

電話 0177-26-7121

BULLETIN
OF
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTAS RESEARCH CENTER

No.2

CONTENTS

A Study of the chuko (Pot with spout) Potteries of the Jomon Period	SUZUKI,Katuhiko
The Forms of the Pit-Dwellings in Aomori Prefecture near the End of the HEIAN-Period	NARITA,Seiji
The Tephra of the HEIAN-Period in Aomori Prefecture	NAKAJIMA,Tomohumi
A Table : The Trap-Pits of Aomori Prefecture	SAKAMOTO,Mayumi SUGINOMORI,Junko
A Table : The Satumon Potteries of Aomori Prefecture	HIRAYAMA,Akitosi
The Trend of Excavation Investigation in Aomori Prefecture	OYU,Takuji KIMURA,Tetujiro SUZUKI,Katuhiko

March 1997
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTAS RESEARCH CENTER